
特別でも異常者でも過負荷でも悪平等でもなく・・・？

がはら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特別でも異常者でも過負荷でも悪平等でもなく・・・？

【Nコード】

N1907T

【作者名】

がはら

【あらすじ】

『めだかボックス』を読んでふと洩らした一言。

「めだかボックスの世界に行っ

てみたい……」

その一言を聞き《あのキャラ》が目の前に！？

《あのキャラ》は【俺】に取引を持ちかけてきた。

「めだかボックスの世界に飛ばしてやつてもいい。だがその代わりあることをやってもらいたい」 一体『あること』とはなんなのか！？

第0箱「取って付けたように」(前書き)

プロローグ的なものです。

第0箱「取って付けたように」

『めだかボックス』

【俺】の好きな作品だ

ジャンプの掲載順は後のほう

でも【俺】はあの作品が楽しみでジャンプを買ってると言ってもいい

あの作品は他の漫画となんだか雰囲気が違う

だから【俺】は今日も学校帰りにジャンプを買いにコンビニへ足を運ぶ

月曜日

テレビで得た情報だが…

たしか一週間の中で一番自殺が多い曜日らしい

理由は簡単だ

『憂鬱な一週間がまた始まる』という理解できなくもない心理

たしかにあの『国民的アニメ』が終わった後に来るなんともいえない虚脱感

人によっては絶望と言い換えていいかもしれない

…な—んてことをジャンプ片手に自室で菓子を食いながら考えてみる

月曜はジャンプの発売日だ

そんな日に死ぬなんて【俺】には恐ろしくてできそうもない

~~~~~1時間経過~~~~~

「…マジで球磨川 だな」

(→ の意味がわからない人は誉め言葉とだけ覚えておいて)

もちろん『めだかボックス』を読み終えた感想だ

「……主人公を食っちゃってる感が否めねーな」

なんて身も蓋もないことを言ってみる

「んあ——」

大きく伸びをしながら明日の時間割を思い出す

「あ、明日から体育マラソンなんだっけ……」

……めんどくせーなー……それに引き替え『めだかボックス』の世界は面白そうだよなー

な—んか毎日がエブリデイ！みたいな？」

「そのネタまだ使ってる奴がいたとは驚きだね」

「……【俺】も自分で言っておいて後悔してるよ……って今のダレ？」

【俺】はワケあって一人暮らしをしている  
故に家族の内の誰かという選択肢はない

「ん？『ぼく』が誰かわからないのかい？  
毎週楽しみにしてくれてるにしてみれば随分とつれないじゃないか」

そこには安心院なじみ……………さんがいた

「取って付けたように『さん』を足したね」  
「モノローグにツッコまないでください」

## 第0箱「取って付けたように」(後書き)

完全なる行き当たりばったり作品です。書きながらストーリーリー考え  
てます。

## 第1箱「難しい話じゃないさ」(前書き)

なんかプロローグの続きみたいになっちゃった。あと展開早すぎ。会話の繋ぎやテンポがおかしい。反省はしてない。

## 第1箱「難しい話じゃないさ」

さて…この状況は一体なにg

「『アリバイブロック腑罪証明』を使ったんだよ」

…『腑罪証明』ってたしかいつd

「そう、いつでも好きなときに好きな場所にいられるスキルのことさ」

…………それは現実世界も例g

「もちろんこの『世界』も例外じゃないよん」

……………白髪ババa

ゴッソ

頭突きされた

「…………ここまでなんにも発言してませんよ【俺】」

額をさする

「わざわざ口を開かなくても【きみ】の考えていることは手に取るようにわかるよ

僕の持つ一京分の一のスキルの一つ  
ハートフルボイス『想願叫』を使えばね」

まあ作者もいちいち力ギ括弧打つの面倒だろうから  
助かるっちゃあ助かるかな？

「うんうん♪」

で？

なんでこんな思春期の男の子一人しかいないようなムサイ場所に？

「ん〜改めて聞かれると…っていうより念じられると返答に困るなあ  
しいて言うなら【きみ】の悶々とした願望がたまたま！偶然！奇  
跡的に！

僕の心にダイレクトアタックを決めたから  
その願望を叶えるために馳せ参じたのさ？」

最後疑問形かよ……

「まあまあ、人外の厚意は素直に受け取りなよ」

まあ貰えるモンは病気以外ならなんでも貰うぜ？ニヨホ♪

「よろしい

それじゃ餞別として僕のスキルをいくつか見繕って貸してあげる  
よ」

マジで!？

……なーんか怪しいなあ

だいたいなんで悪平等の安心院なじみが？

【俺】なんて安心院さんに見れば  
所詮そこらのゴミクズと一緒になんじゃ？

---

数分後

---

なんか門みたいなのを準備している安心院さん  
たぶんさっきのモノローグも聞こえてたはず……

一体なぜ【俺】を？

「よし！この門を通れば晴れて君も箱庭学園の生徒の仲間入りだよ  
……それと今君が思考を巡らせていたことだけど」

……やっぱり聞こえてたんだ

「実はね、折り入って【きみ】に頼みたいことがあるんだ」

【俺】に頼みたいこと？  
人外の安心院なじみが？

「おいおい【きみ】、僕のことは親しみをこめて安心院さんと呼び  
たまえよ」

今言っんですか……

これはまあ……自分ルールってヤツですよ  
友達以外の人のことは心の中でフルネームで呼ぶことにしてるんです

「変わった自分ルールだね」

自分でもそう思います

……で？【俺】に頼みたいことってのはなんですか？

「ああそうだったね

ゴメンゴメン、つい脱線してしまったよ

本題は……いや、問題はここからだ

【きみ】を『向こう』に行かせてあげるかわりにやってもらいたいことがある」

やってもらいたいこと……ですか？

「ああ

なに、難しい話じゃないさ

ただ【きみ】に――」

まさかこの時は『あんなこと』を頼まれるなんて【俺】は思いもしてなかった

第1箱「難しい話じゃないさ」(後書き)

スキル名とかはそのときそのときで考えます。  
生ぬるく見守ってね」

第2箱「そんなのどちらでも」(前書き)

絶賛迷走中！

やっと箱庭学園に入りました。

## 第2箱「そんなのどちらでも」

落ちている

【俺】は今落ちている

安心院さんがこしらえた門をくぐったら地面が遥か下方にあった

くぐったというか

くぐらされたというか

タックルされたというか

「仕方ないだろ？僕の腕は見てのとおり、ぶっとい螺子で封じられてるんだ」

「だからってタックルはないでしょタックルは」

ただいま安心院さんと大空をランデヴー中

あなたと私でランデヴー♪ほらランデヴー♪ほらランデヴー♪

「それじゃあ『あの件』、しっかり頼んだよ」

「しっかり頼まりました」

「ああそうそう！大事なことを忘れていたよ

【きみ】が『こっち』で物語を進めていくといずれ僕と会うことになると思う

だけどそれは別の僕だからね

困ったときに助力を仰げるなんて甘い考えは禁物だよ」

「わかりました」

だんだん地面が近づいてきた

「さてと、そろそろお別れだ」

「名残惜しいですね

もうちよつと安心院さんとおしゃべりしてたかったです」

「嬉しいことをいつてくれるね

だけど残念なことに【きみ】と会つのはこれが最後になるだろうね」

「……………そうですか」

「おやおや？寂しいのかい？」

「ほんのちよつとだけ」

「落ち込むことはないさ

そのうち嫌でも顔を突き合わせることになるよ

……………《僕》とね」

「……………でしょうね

……………それじゃ！お達者で！」

その言葉を最後に【俺】は『その安心院さん』と別れた



かな……………

……………なーんて、僕のキャラじゃないか」

そう言い残して『安心院なじみ』は――

「あ、言っておくけどフラグは立ってないよ？

あくまで『ただの話し相手として』って意味だからね」

……………

そう言い残して『安心院なじみ』は（今度こそ）退場していった

一方その頃、安心院さんと別れた【俺】はというと…

「ゲハッ！ゴホッ！ガフッ！

ハア…………ハア…………ハア…………」

着地失敗で瀕死状態DEATH

激突した衝撃で地面が少しだけ凹んでしまった

全身の骨という骨が粉碎骨折

五臓六腑がズタズタ

こんな状態でも死ねないのはなんでだ？いや死んだら困るが

『僕のスキルを貸してあげるよ』

……もしかして安心院さん

『死延足』も俺に貸してくれたのだろうか？

……『死延足』って寿命が延びるだけなのかと思ってたな

---

数分後

---

しかし参った

死なないから命の心配はないものの指一本動かせない  
喉も潰れて助けも呼べないで八方塞がりだぞ……  
しかもどうやら【俺】が倒れている場所は元々人通りが少ないらしい

あんな轟音を打ち鳴らして地面に激突したつてのに  
さつきから人っ子一人見かけん

『大嘘憑き』（オールフィクション）みたいな  
スキルがあればこんな状況も打破できるんだけど…

そこで【俺】は大変なことに気付いた

スキルについて説明なんにも受けてねえし！！

途方に暮れていたら急に背後から声がしてきた

「おいおいおいおい

たまには真面目に登校してみるもんだな

まさかこんな場所で人間の死体に出くわすとは思わなかったぜ」

身動きがとれない上に背後に立たれているので声の主の顔は見えない  
だが声色からして女の子には間違いない

「貴重な実験材料としていただいとくかな

一度でいいから生きてるのじゃなくて終わってるのを改造りたか  
つたんだよ」

この言動で確信した……

名瀬天歌だ！もしくはくじら？

…そんなのどちらでも同じか

とか考えてる間に首根っ子を掴まれてズルズルと引きずられていく

顔中包帯でグルグル巻き

頭にナイフがブスリ

オプシオンとしてボロ雑巾のような男の三点セット

こんな場面見られたら大変なことになるよ名瀬天歌？

という見当外れな心配を抱きつつ【俺】は学園の門をくぐることに  
成功した

**第2箱「そんなのどちらでも」(後書き)**

どう展開していこうかなあ？

まさにノープランなのです。

あ、ノープランってスキル名に使えそうかも！

### 第3箱「もしやあなた」(前書き)

話が進むの遅いです。あと、今までの話を編集しなおしました。よかつたら流し読みでいいんで読んでくれたら嬉しいです。至らないトコがあつたら感想で指摘をば。

### 第3箱「もしやあなた」

タッタッタッタッタッタッ…

走っている…

タッタッタッタッタッタッ…

それはもう走っているとしか表現しようがないくらい走っている…

タッタッタッタッタッタッ…

……え？なぜ走ってるのかって？

そうだな……

それじゃあこの小説で初めての回想シーンにいつてみようか

~~~~~15分ほど前~~~~~

「チッ……」

森ガール一人きりじゃあさすがに骨が折れるぜ……

なんであんな場所に実験室を作っちまったかなー」

……と、ブツブツ文句を垂れながら名瀬さんは【俺】を引きずっている

たしか彼女は【十三組の十三人】（サーティン・パーティ）の一人だが身体能力は普通だったはずだ

ならば全身の力が抜けた男の死体を運ぶのは重労働だろう……
……まあ死んでないが

「まったく…一苦労だぜ…」

…このイライラはコイツにぶつけさせてもらうかな」

……さて、このままでは俺は彼女に好き勝手に体を改造くりまわ
されてしまう

さすがに女の子に自分の体を見られるのは恥ずかしい

この状況を打破したくても体は動かないし声も出ないし
スキルを使おうにもどんなスキルがあるかわかんねえし………

………待てよ？

そっぴや安心院さんってスキルを数える為のスキル持ってたよな？

なら…

『そのスキルがどういうスキルなのかを把握する為のスキル』
とかあってもおかしくないんじゃないか？

………ちよつと自分の中を探してみよ

………

………

うむむむむ

スキル名はわかるみたいだがスキルの数も能力もわからないからど
うすればいいのやら

「はあ……はあ……」

「やっと……着いたぜ……」

とかやってる間に実験室に到着してしまいましたとさ

やべえ……早いトコなんとかしないとマジでシャレにならんぞ

「よっこらせつと」

ドサッ

手術台みたいなものに寝かされたようだ

「さてさて？」

どんなデザインがお望みだ？

……… まあ聞いたところで死人に口なしだな………」

福山雅治みたいをお願い

……… なんて言ってる場合じゃないっての！

ドルルン、ドルルン、ヴヴヴィイイイン……！

おいおいおいおい！

なんか不吉なエンジン音が聞こえてきましたよ！？

まさかチェンさん！？

チェンさん来ちゃった！？

「頭が邪魔だな……
最初に取り外しとくか」

いきなり頭から!?

う、うおおおおお!

エンジン音が近づいてくるううう!

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイってコレ!!

ガシッ!

「!?!」

……………?

……………なんだ?

エンジン音が遠ざかったぞ?

力を振り絞り目を開く【俺】

……………力を振り絞ってやつとまぶたを開くだけってどんだけー

……………で、一体何が起こった?

見てみるとチェーンソーを持った名瀬さんの腕を誰かが掴んでいた
……………誰だ?

掴んでいる腕をたどっていくと……………?

……………えっ!?

【俺】だった

【俺】が名瀬さんの腕をガツシリと掴んでいた

………驚いた

だって今の今まで《自分の意志では》指一本動かせなかったのに
《腕が勝手に》動いたんだから

「コ、コレ生きてんのか？」

こんな状態で………？」

まあ一番驚いてるのは名瀬さんだろう

名瀬さんにしてみれば死体が急に動きだしたんだから

………にしても『コレ』はないんじゃないの『コレ』は…

「チツ

なんつー馬鹿力だ………

離しやがれ！うぜえんだよ！」

腕を振り払われてしまった

と、同時にチェーンソーを振るかぶる名瀬さん…

………普通生きてるってわかったらやめない？

サッ

ズガガガガガッ！！！！

「…………チッ」

紙一重でかわせた……………危ない危ない

【俺】の身代わりになってくれた手術台……………プライスレス…
それはともかく早くこの場から逃げなければ！

「あ、待ちやがれ！」

聞こえないーいなーんにも聞こえないーいつと

~~~~~

こうして冒頭へと戻るわけなのですよ

タッタッタッタッタッタ…

…やっぱりあった…ビンゴ！

走って逃げている間に『スキル能力を把握するスキル』を見つけた

さてさて？今【俺】が走っていられるのはたぶんスキルのおかげだ  
ろう

さっそくこのスキルの正体を拝ませてもらおう

なにになに？『ゴーストラップ 生氣者』……………か

能力は……………

『自らの意志や肉体のダメージを無視し、四肢それぞれがそれぞれの判断で動く』

……高千穂仕種のオートパイロットの劣化版……  
いや……粗悪品みたいなもんか

あの時は体が解体されそうだったから《腕》がそれを拒否した  
そんなトコだろう

………それにしても

痛え………

メチャクチャ痛え………

動かないはずの体を無理に動かされてるんだから痛みがないわけが  
ない

実際絶叫したいくらい体中が痛い喉が潰れてるのでそれすら無理  
という始末だ

使われてない教室でも見つけて少し休憩を――

ドンッ

「ほっ!？」

ドサッ

角を曲がったら人にぶつかってしまった

倒れた………【俺】の方が

謝りたいが声が出せない

「おやおや……

こんな老人とぶつかって倒れるとは……

最近の若者は足腰がなってませんねえ」

あ、理事長

不知火袴理事長だ

「……………あなた……この学園の生徒ではありませんね  
何者ですか？」

体中ボロボロの怪我人を前に『何者ですか？』って……  
さすが理事長といつかなんというか……

「……………そういえば随分と怪我をしていますね  
大丈夫ですか？」

今気付いたんかいっ！！

「……………先程から返事がありませんが……  
もしやあなた喋れないのですか？」

【俺】は再び力を振り絞り首を縦に振った

### 第3箱「もしやあなた」(後書き)

私の頭の中では…

1 行スペース〓同キャラのセリフやモノローグ間隔

2 行スペース〓異なるキャラのセリフ間隔

3 行スペース〓セリフからモノローグ、モノローグからセリフへの移行

4、5 以上スペース〓緊張状態時などの演出

みたいな感じです。

第4箱「■■■■です」(前書き)

推理もどきみたいなのをいれてみました。

## 第4箱「■■■■です」

1ヶ月後

怪我は完治した

体中の骨も五臓六腑も喉もすべてだ

治るの早くね？と思われる方もいるだろう

自分でもどういうわけだかわからないが昔から怪我の治りは早いのだ

「怪我が治ったら来い……ってことだったけど」

あの時理事長に発見された【俺】は、理事長の計らいによって病院へと運ばれた

……でも何で見ず知らずの【俺】を助けてくれたんだろ？

「えー………っと

理事長室つてどこだ？

……校内の見取り図とかないのかな？」

あ！ちなみに今【俺】箱庭学園のお客様用入り口にいます

「待っていましたよ」

「あ！不知火さん！」

「ほっほっほっほっ

予想どおり右往左往していましたね」

「いやー恥ずかしながら……」

……ってかただけ広いんですかこの学園！？  
「ここに来るまでにすでにちょっと迷っちゃいましたよ!？」

校門から入ってこのお客様用入り口に着くまでに軽く30分くらい  
かかった

……もとから少し方向音痴なこともあるが

「これはこれは申し訳ない  
こちらで迎えの者を用意すべきでしたね」

「いやいや！

そこまでしてくれなくていいですから！

………で？

入院する時、『退院後、私のところに来てください』って言っ  
てましたけど…

一体【俺】にどんな御用があるんですか？」

「………詳しい話は理事長室でしましょう  
こちらですよ」

---

理事長室

---

「単刀直入に言います

この学園に入学して頂きたい」

「いいですよ」

「!」

「どうかしましたか？」

「い、いえ」

少し新鮮な反応でしたので…

……いきなりこのような事を言われて動揺しないのですか？」

動揺もなにも最初からそのつもりなのです

「……まあどこに進学するかまだ決まってませんでしたからね

【俺】個人としては願ったり叶ったりの申し出ですよ

……それより、1ついいですか？」

「な、なんですか？」

「どうしてあの時見ず知らずの【俺】を助けてくれたんですか？」

「ああ……そのことですか……」

心なしか少しホッとしているようだ

どんなことを聞かれると思ってたんだ？

「たいした理由はこれといってないですよ

ただ、あのままではすぐにあなたにお迎えが来てしまうと思った  
ものですから

要するに、ただの人助け……といったところですよ」

「……………ただの人助け？

この学園の生徒でもない

体中ボロボロで名前も知らない見ず知らずの男に

素性も聞かず治療費を負担し、その上自分の学園に入学までさせ

るのが

ただの人助けとは……【俺】には思えませんが」

「……！」

「……………」

「そもそもいきなり【俺】に『私の学園に入学しないか』なんて聞いてくる時点でおかしいんですよ

普通そついうのって親とかに相談した上で

本人に意志確認するもんなんじゃないんですか？

なのにどうして入院中は一度もそんな連絡がなかったのに今になっていきなりそんなことを？」

「……………」

「……………調べたんでしょ？【俺】の素性を…

……………あの時【俺】は血塗れでしたからね

床や壁、不知火さんにぶつかった時にあなたの服についた血でもいい

その血からDNA鑑定でもして【俺】が誰なのか調べようとした」

「……………」

「……ただの結果は……………わからなかった

わかるはずがなかった

だって【俺】はあの時まで《この世界》には存在してなかったんだからな

「あの時……………、【俺】と不知火さんが初めて顔を合わせた時なぜかはわからないがあなたは【俺】に関心を抱いた

……でなければ素性を調べたりしなかったはずですからね  
……だからこそあなたは入院する時に【俺】に  
『退院したら私のところに来てくれませんか』と言った  
あの時はたぶん【俺】が入院している間に【俺】のことを徹底的  
に調べあげて  
退院したあとで集めた情報を【俺】に叩きつけ、  
学園に引き込もうとしたんですよ？」

「……………」

「けどどういうわけだか【俺】についての情報は皆無」

見つかったとしても名瀬さんとかそのあたりぐらいだろうな

「そこであなたは計画を変更することにした  
まあ変更といっても単純なものですよね  
順序を逆にすればいいだけ

《調査》と《勧誘》の順序をね……

【俺】を学園に引き込んでからじっくり調査をするという段取り  
にしたわけだ」

「……………」

「……………なんちゃって」

「……………ほっほっほっほっ

いやはや、なかなか面白い話でしたよ  
だが所詮、推理は推理

現実ではありません」

「はい、そうですね」

「で？」

「はい？」

「あなたのお名前は？」

入学するのであればそれなりの手続きを踏まねばなりませんからね」

「ああそうですね！

【俺】の名前は……………」

「  
■ ■ ■  
」です」

【俺】は名を名乗った

#### 第4箱「■■■■です」（後書き）

ちなみにまだめだかや善吉たちは入学してない設定です。  
名瀬さんもまだ一年生の設定。

入学式でめだかや善吉たちと同じタイミングで入学させるつもり。

あ、主人公の名前は手抜きじゃないよ？  
ちゃんとありますから。

## 第5箱「彼にとって」(前書き)

この回で主人公の思考がどういうものかがぼんやりとわかります。

## 第5箱「彼にとって」

——前回に続き理事長室——

「……………」

す、すみません

もう一度よろしいですか？

よく聞き取れなかったのですが……………」

（いや、聞こえなかったというよりも『耳』にはちゃんと届いたが

『脳』で理解できなかったといった方が近いかもしれませんね……）  
「……………」

「……………」悪いんですけど

【俺】自分の名前はあまり好きじゃなくて  
何回も言いたくないんですよ」

「しかしそれでは……………」

「手続きに必要な書類だけ用意してくればあとは自分でなんとか  
しますから」

「……………」わかりました

ならばあとはあなたにお任せしましょう」

「すみません、個人的なわがままで迷惑をかけてしまって……………」

「いえいえ、お気になさらないください

……ところで」

「なんですか？」

「お住まいはもうお決まりですか？」

「……………」

わ……

忘れてたあああ……！

今までずっと病院暮らしだったからすっかり……

「……………」

その様子ではどうやらまだのようですね」

「……………はい」

「なんならこちらでいくつか物件を紹介しましょうか？」

「いいんですか！？」

「ええ、まあさすがに生活費などは工面できかねますが……………」

「十分です……！」

いえ……！十全です……！」

あとはバイトなりなんなりで稼げば問題ない

他人から強要される苦勞は好きではないが

自分で苦難を乗り越えたりするのは嫌いじゃないからな

……べつにMってわけじゃないよ？」

「ではそういうことで話を進めさせてもらいましょう  
……最後に1つよろしいですか？」

「？」

「いやなに

簡単なテストのようなものをしてもらっただけです」

おもむろにサイコロを取り出す理事長

………例の『アレ』か

「サイコロで……テスト？」

一応とぼけてみる

「ええ

出た目によってあなたのクラスを決めようかと」

「………なかなかのプレッシャーがかかるテストですね  
一年間過ごすクラスが『運』で決まるワケですか………」

「………『運』

まあそれも大きな要因の1つではありますね」

「………まあ普通に振って

普通な結果を出して

普通に受け入れるとしますよ」

「……………随分と普通に拘るんですね」

「シンプルイズベスト  
何事も普通が一番ですよ  
普通が……………ね」

「……………」

「ほいじゃあ  
いってみようやってみよう」

理事長の手からサイコロをひったくり机の上に放る

コロンツコロンツ  
クルクルクルクルクル…

…………サイコロたちが机の上で廻る…………果たして結果は？

……………

普通だった…………

なんてことはない

いくら異常性や過負荷を複数所持しているからって

【俺】の本質は至って普通なのだ

「……………なんていうか、普通でしたね……………」

まあ【俺】自身、普通がいいって言ったから満足ですけどね」

「……………そうですね  
思ったような結果は得られませんでしたか……  
一応あなたのクラスは決まりました」

「何組ですか？」

「それは入学式当日のお楽しみですよ  
ほっほっほっほっ」

「じゃあもう帰っても？」

「ええ、構いませんよ  
……………ああそうそう」

住むところが決まるまでの間はこの地図の場所を拠点にするとい  
いでしよう」

「ありがとうございます  
それじゃあ【俺】はこれで」

「ええ、……………よい学園生活を」

---

学園内廊下

---

あ——……………

サイコロはちよつと残念だったなあ

もう少し意外な展開を予想してたんだけど……

そのあと地図の場所を探して道に迷ったのは言うまでもないだろう

---

理事長室

---

「さてと

彼はやたらと《普通》に拘っていたようですからねえ  
希望は叶えて差し上げませんと

……………それにしても

『思ったような結果は得られなかった』……………ですか  
我ながら洒落の利いたことをいってしまいましたねえ……………」

『このサイコロの状態』を普通と言つてのけるとはたいしたものですね……………」

……………いや

彼にとって『この状態』は不可解でもなんでもない  
普通のこと……………というワケでしょうかね

『結果は得られなかった』

否

『結果はでなかった』

なぜなら

数分前彼が放ったサイコロは

いまだ勢いが衰えることなく机の上でクルクルと廻っているのですから……………

## 第5箱「彼にとって」（後書き）

ちなみに理事長が主人公の名前を理解できなかったのもスキルの能力のせいです。

## 第6箱「はじめましてだよ」（前書き）

今回からモノログに（ ）やめました。あと「」の前のキャラの頭文字も削除。

ストーリーはナメクジ並のスピードで進行します。

## 第6箱「はじめましてだよ」

サイコロテストから2週間後  
住むところは決まった

……ただ家賃と生活費を稼ぐのにバイトをしなければならない  
もちろん1つでは足りるわけではない  
よっていくつかバイトを掛け持ちするつもりだ

バイトをやるなら……

何かいいスキルはないものか…

と、探してみたらおあつらえ向きなのが2つ見つかった

……でもそのうち1つは下手をすればちよつとした噂になってしまう  
だから1つは候補から外した

《眠れぬ檻の非情》  
スリーピングルーティーン

これがバイトで使うつもりのスキルの名だ

単純に《疲れない》というスキル

無論、スキル名にあるとおり眠らなくても……

大丈夫だ、問題ない

ちなみに不採用になった方のスキルは《五人式》クインデットという

《自分を含める5人の自分を出現させる》スキル……

……ぶっちゃけて言えば5人限定の分身の術だ  
5人でバイトをすればその分稼げるが……

同じ時間帯に違う場所で姿を見られたら厄介だ

……まさか5つ子だなんて言い訳もないだろう

まあそんなこんながいろいろあって入学式当日

「今日は入学式だから早く行かないとな……

………げっ

みずがめ座最下位かよ……」

最近ちょっと驚いたことがあった

めざましテレビが放送されていたのだ

めざましテレビだけじゃない

【俺】が元いた世界でも放送されていた番組がいくつかあった  
これはテレビっ子の【俺】には嬉しい収穫だ

………だがまあ多少変わっているところもある

たとえばジャンプにめだかボックスが掲載されてなかったりとかだ  
どうやらこの世界にとっても最低限のルールは存在するらしい

「さてと………それじゃ

イテキマース」

………って自分以外に誰もいない部屋に

どこぞのAIBOみたく挨拶してみてもむなしいだけだな

『キング・クリムゾン……!!』

「…………というわけで校門前です  
…………ん？人ばかりができてる…………なんだ？」

行つてみると掲示板にクラス分けの貼り紙がしてあった

「うわぁ…………」

コレ全員新入生かよ……………」

ザッと見てみても200人くらいはいる

もう校内に入つてる人もいるだろうにそれを差し引いてもこの人数  
…………

「まあ13クラスあるからな…………」

1クラス40人として考えるとこれくらいになるのは妥当か…………  
さてさて？

俺は一体何組なのかなつと」

これだけ人数がいるのだ  
すぐには見つかるまい…………

「と思つたらもう発見

1年1組か…………

1組はノーマルだったよな？たしか」

黒神めだかの幼馴染みである人吉善吉も1組だったからな  
接点を作りやすいにこしたことはないだろ

「そんじゃま、さつさと教室に……………」

ドンッ

「うおっ!？」

人混みにぶつかって倒れた

……なんかぶつかったり倒れたりが多いな【俺】

「あたたた……」

ぽきゅっ ぽきゅっ ぽきゅっ

「ごめ〜ん、大丈夫？」

ん？

この底抜けに明るい声と独特な足音……

もしかして……

「でもそんなトコでぼけつとアホ面さげてる【キミ】も悪いよ？

そんなボケボケしてたらあつという間に喰われちゃうから

………社会という怪物に」

やっぱりな……

『不知火半袖』……

まさかこんな早いタイミングで出会っことになるとは思わなんだ

「……………悪い悪い

朝弱くてさー【俺】

その上今日は入学式だろ？

緊張して昨日ろくに眠れなかったんだよなー

だからついボーッとして……」

「あーわかるわかる！」

あたしもコーヒー飲んだあととか眠れなくなるもん」

「……………えっと

今のはツツコむべき？」

「べきべき」

……………？

あれ？もしかして【キミ】ってお爺ちゃんが言ってた……

■ ■ くん？」

！……！

なぜ【俺】の名前を！？

……………ああ、なんだ

あのスキルを発動し忘れてた

前にも言ったが【俺】は自分の名前が好きじゃない

完全に名前負けしてるし厨二丸出しの名前だからだ

まあ理由はそれだけじゃないが…

とにかくそういうことだから【俺】はあるスキルを常に発動させている

正直他人からしてみれば「なんだそのスキル」というような代物だ  
つていうか安心院さんから貸してもらったスキルのほとんどがそんな感じだ

まあ1京以上あるんだからなかには用途のよくわからないものもある  
だろうさ

そのスキルというのが……コレだ

ワン・ツー・スリー」

端的に言えば《他人に自分の名前を呼ばせない》スキル  
このスキルを発動していれば誰も【俺】の名を呼べない  
呼ぼうとしても出てこないし、まず理解ができないのだ  
先日の理事長との対話中、理事長が名前を聞き返したのもこのスキ  
ルの所為だ

……故に【俺】が驚いたのは、

不知火が【俺】の名前を知っていたことではなく

【俺】の名を呼んだことに驚いたのだ

【俺】の名前を知ってたのは……

たぶん【俺】が書いた書類を理事長にみせてもらったとかそんなと  
こだろう

Do you understand?先輩?

「あれ？【俺】どつかでキミとあったことあった？

……っっていうかお爺ちゃんって何のこと？」

我ながら名演技だねまったく

「いんや」

あたしたちは、はじめましてだよ　それが正解  
お爺ちゃんってのは……

ほらっ【キミ】理事長に会ったことあるでしょ？

アレあたしのお爺ちゃんなんだよね」

「マジで！？（知ってるけどね）

言われてみればアホ毛とかそっくりだな……

そっかぁ……あの理事長の……

あ、ところでキミの名前は？」

「あたし？」

あたしは不知火半袖

気軽に『袖ちゃん』って呼んでくれていーよ」

「そっか、よろしくな袖ちゃん

【俺】は■■■■だ

気軽に『おい』とか『ちよつと』とか呼んでくれていーから」

「……？」

えと……ゴメン

もう一回言ってくれない？」

《戒名》だ

「悪い袖ちゃん

【俺】自分の名前は一回しか言わないことに決めてんだ」

「………そう

なら仕方ないね」

その後【俺】と《袖ちゃん》は他愛もない雑談を交わしながら教室に向かった

………たしかこの時点では不知火と人吉善吉は知り合っていないはず

2人は『消しゴムを拾った』と『拾われた』仲だったよな？

じゃあ少なくとも2人に接点ができるのは授業が開始した後か……  
なかなか長いな……

………気長に待つか

こうして【俺】は入学式を無事に終えた

……………どうでもいいことだが

クラスでの自己紹介の時にクラス中が「？」となっただのはいい思い出だ

第6箱「はじめましてだよ」(後書き)

うる覚えなので原作に沿ったシーンが出てきたらキャラのセリフと  
か微妙に変えるかも。  
最悪ハシヨります。

第7箱「……………が！駄目！」

——入学式から1ヶ月後——

《戒名》の効果もあつてか友達はほとんどできなかった

そりゃ名前も呼べないような奴と友達になろうなんて物好きはいないだろう

なので昼休みになると決まって図書室に通った

教室にいるのは気まずいからな

……………はいそこ！ぼつちとか言わない！泣いちゃうよ！

そんな【俺】によく話し掛けてくれるのが袖ちゃん

ありがとう……………袖ちゃん……………

……………なんて感情はまったく湧いてこず、

ただただ彼女に対して物好きな奴だとか変わった奴という認識が深まった

変り者の心理は理解できんなまったく

「あれあれー？」

『今日も』図書室に行くの？」

「……………やけに『今日も』を強調するね袖ちゃん

キミは他人の心にズカズカと土足で踏み込むことをヨシとする人なのかな？」

「あひゃひゃひゃ まっさかー

あたしがそんな酷い奴なわけないじゃん

ただ心の傷に塩を塗りこむのが好きなだけの  
ピュアで可憐な乙女だよ」

「…………マジばねえッス不知火さん」

「…………なに漫才やってんだ？お前ら」

「あ、人吉」

「おいおい聞いてくれよ善吉っちゃん

ここにおわす不知火様が【俺】をいじめてくださるんだよ  
お前からもなんとか言ってくれない？」

袖ちゃんを通じて善吉っちゃんと知り合うのに  
そんなに時間はかからなかった

…………なんて言い方したらまるで狙ってやったかのように思われる  
だろう

だが【俺】はべつに自分から近づいていったわけではない  
袖ちゃんが善吉っちゃんと学食に行こうとしてるとき

たまたま居合わせた【俺】も誘われた……  
というような感じだ

最初の頃は善吉っちゃんは【俺】に多少不信感を抱いていたようだ  
名前が呼べないんだから無理もない

でもここ最近は普通に向こうからも話し掛けてくれるくらいにはな  
った

「…………いじめられてるのが全然嫌そうに聞こえないのは俺の気のせい  
か？」

「何言っただよ善吉っちゃん（棒）

この【俺】がいじめられるのが 好きな変態なわけじゃないじゃない

かー（棒）」

「……………」

「……………冗談だよ冗談

2人共マジに引くなって」

「冗談に聞こえなかったぞ……………」

「あひゃひゃひゃ

まあ笑えない冗談はさて置いて……………」

「さて置かれた!？」

「早く学食行こうよ2人共」

昼休み終わっちゃうよ？」

「まだ昼休み始まって5分しか経ってねえじゃねえか」

……………みたいなやり取りをしながら【俺】たちは足早に食堂に向か  
った

---

# 食堂

昼休みの食堂のこみ方は凄まじい  
ただそれだけ言っておこう

「……………で？」

「？」

「『？』じゃないよ善吉ちゃん、投票だよ投票」

「ああ……その話か」

そうなのだ

時すでに生徒会選挙の時期なのだ

いやはや『キング・クリムゾン』って怖いね（笑）

「ちゅちゅちゅ」

じつは人吉の分の票はあたしが勝手に入れました♪」

「なっ！？」

不知火！テメー何勝手なことを！？」

「えー？べつにいいじゃんさー」

どうせ誰に入れるか最初から決めてたんでしょ？」

「え？そなの？ダレダレ？」

知ってるが一応形式的に聞いとく

「憶えてる？」

あたしらと同じ1年生のくせにやたらとデカイ目標を掲げてた娘だよ」

「ああ！

全国模試では常に上位をキープしていて

偏差値は常識知らずの90を記録

スポーツでもあらゆる記録を総なめにし、手にした賞状・トロフィー数知れず！

しかも実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！

……………てゆーまるでチートを擬人化したような子だね？  
何？善吉っちゃんもやっぱりああいうのがタイプなわけ？」

「んなつ！？

バ、バカ言つてんじゃねえよ！

んなわけねえだろ！

誰があんな化け物女なんか！

「でも幼馴染みなんだよねー」

「不知火テメー！！いい加減にしろ！！」

「マジか善吉っちゃん！

はあくなるほどねえ……

あ、なら幼馴染みのよしみで生徒会に入ったりすんの？」

「カツ！

それはねえな

たしかに黒神とかは幼馴染みだが…

もつといい加減あいつに付き合わされるのはうんざりだからな」

「ふっふん……………」

そうは言つが善吉っちゃん

善吉っちゃんは生徒会に入るぜ

いや、入ってもらわなきゃならないんだよ

そっじゃなきゃ『物語』が始まらないじゃないか

『物語』が始まらなきゃ…

【俺】が安心院さんから頼まれた『例の件』が果たせないよ……

~~~~~第1箱にて~~~~~

ことの始まりは【俺】がこっちにやってくる直前に遡る

「『修正』？」

「そう『修正』」

まあ『矯正』でもいいけど

「はあ……………、っていきなり言われても意味がわかりません
一体全体あっちに行つて何を修正すればいいんですか？」

「ストーリーだよ」

「……………は？『すとおりの』？」

「そ」

「いやいや！『そ』じゃないですよ『そ』じゃ！
頼みますからちゃんと説明してくださいよ」

「実は【きみ】の知ってる『あっち』の流れと、
僕が知る『あっち』の流れにわずかばかりの差異が起こりつつあ
るんだよ」

………差異ねえ

「できることなら『こっち』の問題は『こっち』で済ませたい
まあ僕が本気になればこの程度の問題はチヨチヨイのチヨーさん
なんだけどさ

なにぶん今は『彼』の手によってご覧の有様だからね」

そう言つて螺子だらけの体をズイッと見せてくる安心院さん

………てゆーかチヨチヨイのチヨーさんて何？

「なるほどね……でも何で【俺】なんですか？

『あつち』には黒神めだかや球磨川楔みたいなキャラが大勢いる
んだから

彼らに頼れば――」

「駄目なんだよそれじゃあ

彼らはあくまで『あつち』の世界の住人だ

たとえ強烈で強力で強堅なキャラを誇つていても

やはり『奴ら』にねじ曲げられてしまうんだ」

「まるで試したような口振りじゃあないですか」

「試したさ

試しに試した

試しに試して更に試してみた

………が！、駄目！

試しに15532回ほど試してみたが同じことの繰り返しだった

よ」

「あなたはどこのヒューマノイドインターフェイスですか」

「僕は人外だぜ」

「知ってますよ

……で、原作のキャラが太刀打ちできないなら『こつち』から
援軍を

つてことですか」

「そうそう」

「なぜ原作キャラに頼らないのかはわかりました

……で？」

あらためて聞きますがなぜ【俺】なんですか？」

「べつに【きみ】に狙いを定めてやってきたワケじゃないぜ？

『この事態をなんとかできるかもしれない可能性のところへ』
つて念じながら《腑罪証明》を使ったら――」

「【俺】のところへ来た、と」

「そゆこと」

「なんか釈然としない」

「とにかくにも【きみ】のところに来たのは正解だったようだ」

え、どうしてそうなった

「あれ？てゆーか原作のねじれを修正するって言ってますけど

【俺】を送り込んだらそれこそ原作が歪むんじゃないですか？」

「その点は大丈夫、問題ないさ

『あっち』での修正（仕事）を終えて『こっち』に戻ってくれば修正（結果）を除いて、【きみ】がした行動はすべてなかったことになるから」

「……雑ですね」

「複雑なんだよ」

「まあおおまかな仕事内容はわかりましたけど……
肝心の修正方法はどうするんですか？まさかマンガだけに修正液をドバツと？」

「雑だね」

「雑です」

「だけでもつと雑でいいんだよ

【きみ】は『あっち』で普通に学園生活を楽しめばいい
そうすればおのずと『奴ら』から仕掛けてくるだろうぜ
『イベントの変化』っていう攻撃（形）だね」

「……さつきから聞いてて気になってたんですけど『奴ら』ってな
んですか？

【俺】はてつきり現象を相手に修正するもんだと思ってたんです
けど……」

「それで合ってるぜ

『奴ら』は現象でありながらも人の形をしているんだ

まるでカメレオンが使う擬態のようにカモフラージュしてる」

「……………まさかねじれの修正方法ってのはもしかして？」

「そう！元凶である『奴ら』を一人残らず倒せばいいのさ！
簡単すぎて笑っちゃうよね」

「やっぱりかー!!!
ってか一人じゃなくて組織なんですか！？むしろそこにビックリ
なんですけど！」

「いや、詳しい人数はわからないけどとりあえず言ってみただけ」

「……………雑ですね」

「この場合は『適当』が妥当だと思うけど？」

「とりあえずその……
現象だか人間だかよくわかんない『奴ら』を倒せばいいと？」

「ルート」

「へ？」

「『ルート』ってのはどうだい？呼び方がないと不便だろう？」

「……………そのころは？」

「物語の筋道を変える……
本来それは原作者のみに許された特権

しかしその権限を奪い、自分たちの好き勝手なIFにすげ替える
故に『^{ルート}侵攻役』さ」

「『^{ルート}侵攻役』……」

なかなか中二っぽくて【俺】好みのネーミングですね
少し無理がある気がしなくもないですけどいいと思いますよ」

「やっぱり？僕もそう思ってた」

マイナス
過負荷
ノットイコール
悪平等

そして^{ルート}侵攻役

……いよいよ数学じみてきたな

まあ大げさな名前を付けてみたところで『奴ら』はまったく知らないわけだが

「たぶん【きみ】が『あっち』に着いてもしばらくは大丈夫だと思うよ

さすがに『奴ら』が起こすねじれを片っ端から消していけば気付かれるけど」

「でもそれをやらなきゃなんないんでしょ？」

「よくわかってるじゃないか」

微笑む安心院さん

まあこの人のスキルを貸してもらえらななんとかやってけるだろ

~~~~~回想終了~~~~~

だから善吉っちゃん頼むぜ

まずは善吉っちゃんが生徒会に入るのがスタートなんだからよ

で、めでたく黒神めだかは生徒会長に当選しましたとさ

「「よかったね人吉くん」」

「俺に振るな!!」

第7箱「……………」が！駄目！」（後書き）

今、いろんなサイトを見まくってめだかボックスのストーリーを思い出しています。

いっそのこと単行本ほしいけど持ち合わせがないのです……………。

## 第8箱「すっかり忘れてたぜ」（前書き）

決めました。私なりのアレンジを加えて展開させていきます。

原作に沿っていこうか、オリジナルストーリーでいこうか迷いましたが……………。

今回主人公のテンションちょい高めです。

## 第8箱「すっかり忘れてたぜ」

### 1組教室

「いやーはっはっはっはっ  
本当に生徒会長になったね」

「カツ！昔からそういう奴だったんだよあいつは！  
やろうと思ったことでできなかったことなんかない  
できるのが当たり前  
むしろ他の奴ができないことが理解できない  
そんな奴なんだ  
生徒会長になれたのも至極当然のことだぜ」

「へえ〜」なんだかんだ言って信頼してたんじゃない  
」

「してねえ！  
あと語尾に　とか」付けんな！  
この小説読んでる奴らが不知火と間違っただろが」

「意識して付けてみました」

「…お前、不知火に似てきたな」

「いや〜それほどでも」

「誉めてねえ」  
ぺしっ

チョップされた

「あひゃひゃひゃ

男同士で何イチャついてんの？気持ち悪いよ」

噂をすればなんとやらだな

「いやね？善吉っちゃんがさ、常日頃から袖ちゃんの食いつぶりに  
憧れてて

よければ毎日でもメシを奢ってやりたいって話を聞いてたトコな  
んだよ」

「はあっ！？おまつ！？んなこと言っ——」

「へえゝ（にやり）

そうだったんだ人吉ィ」

なんなら今からでも見せてあげるよ？

さあ食堂に行こう！

……………もちろん人吉の奢りで」

ガシッ

「ちよっ！？」

ズルズルズルと引きずられ始める善吉っちゃん

「レッツラゴー」

「古っ！

じゃねえ！離せ不知火っ！」

「善吉っちゃん

困った時に備える心と書いてなんと読む？」

「ああ！？知らねーよ！」

「困憊」

「うるせえ！」

「君の瞳に困憊」

「覚えてろよテメーえええ……」

廊下の彼方へと消えていく二人  
南無三、成仏しろよ善吉っちゃん

「さて、今日はもう善吉っちゃんの顔は見れないな  
顔を合わせた瞬間に殴りかかれそうだし……  
……………帰るか」

まだ午後の授業があるが……  
たまにはサボるのもいいだろう

「ま、これも青春の１ページと思わなきゃね」

自分に言い訳して帰り支度を始める【俺】

「おい待て」

今から帰れば『ごきげんよう』には間に合うな

「おい……その【貴様】だ」

なにが出るかな、なにが出るかな、

「おい………」

ごきげんようを観終わったら昨日録画してあった魔女の宅急便を…

……

「『魔女の宅急便』はいいから私の話を聞けっ!!」

「…………モノローグにツッコまれたのはこれで二度目だよ」

教室の出口、つまり【俺】の背後に噂の生徒会長様……………  
黒神めだかが『凜ッ!!』と立っていらっしやった

……………ここはやっぱり自己紹介しなきゃだよな  
うん、自己紹介は大事だ

ちゃんと相手の印象に残るような自己紹介にしなきゃ

【俺】は思わせ振りに振り返り……………

『「はじめましてめだかちゃん。」』

『「俺だよ。」』

「!？」

「……………なんてね

ちよい括弧つけすぎました？

そんな怖い顔して睨まないでくださいよぉ

せつかくの美人が台無しになっちゃいますよん？」

「……………

(一瞬『あの男』とダブって見えたが気のせいか……………

よく考えてみれば私の知る『あの男』とは雰囲気違った……………

………ではなぜ【この男】と『あの男』がダブって見えた?)」

「会長さ〜ん？

聞こえてます〜？」

「このクラスに人吉善吉という者がいるだろう？どこにいるか知らんか？」

「おお……………いきなりですね……………

善吉つちゃんなら今頃袖ちゃんと仲睦まじく

食堂でメシを食ってると思いますよ？」

「ソデちゃん？」

「不知火半袖ですよ

『半袖』だから袖ちゃんです

……………それにしても

麗しの生徒会長自ら出向いてもらえるなんて……………

善吉つちゃんが羨ましいです」

「善吉の奴、また不知火と……………ブツブツ」  
「聞いちゃいねえ」

「……………まあいいところ……貴様は何をしている？  
午後の授業がまだあるのだから……………  
まさか帰り支度というわけではあるまい？」

「そのまさか……………だったらどうします？」

「学生の本分は勉学だ  
それを怠るといふのなら止める他あるまい」

「じゃあどうあってもそこをどいてくれないんですか？」

「そうなる」

「何を言っても？」

「ああ」

『「（のいへ。）」「』

「！……？」

「……………って言っても？」

「あ、ああ

（ま、またダブって……………

【この男】、一体……………？）」

「……………なら仕方ないですね

今日のところは諦めますよ…

あ、善吉ちゃんに用があるなら【俺】が伝言頼めますよ？」

「……………そうか

そうしてくれると助かる

なら『放課後、生徒会室に來い』と伝えてくれ」

「はいはい承りましたー」

「……………そういえば【貴様】の名を聞いていなかったな」

「あつ、【俺】■■■■っていいいます」

「そうか、いい名だな」

「ありがとうございます」

……………聞いたところで無駄だろうけどね

《戒名》がある限り誰も【俺】の名前を呼ぶことは――

「ではな、■■同級生」

「！――」

《戒名》が効いてない!?

そっぴや今名乗った時も聞き返さなかった……

……『完成』<sup>ジ・エンド</sup>の名は伊達じゃない……か

もしくは《戒名》を使いこなしきれてないだけ?

その後、食堂から帰ってきた善吉っちゃんに

ドロップキックをお見舞いされ保健室に直行した

………すっかり忘れてたぜ

第8箱「すっかり忘れてたぜ」（後書き）

やっと出ましたためだかちゃん。

さて、皆さんお気付きですか？

まだ原作の1話目にも辿り着いてないんですよ？

笑えちゃうね！（、、）

## 第9箱「普通の奴さ」（前書き）

今回はちょっとしたクイズ入れています

あと、ちよつとずつお気に入りにしてくださる人が増えるのは嬉しいですね（、、）

## 第9箱「普通の奴さ」

— 放課後・生徒会室 —

コンコン

「入るぜ生徒会長さん」

ガラッ

凜ッ！

「んなっ！？な、ななな……………」

「おお来たか  
待っていたぞ善——」

「凜ッ！じゃねえよ凜ッ！じゃ！  
なんで服を着てないんだよお前は！？」

「ああ、着替えていたものでな  
そこにたまたま……………」

「だったら少しは隠すなりなんなりしろよ！  
なんで堂々と仁王立ちなんだよ！？」

黒神めだかに背を向ける人吉善吉

「隠す？……………ふっ」

「なにがおかしいんだよ  
……………ってか服着ろ」

「この私に隠さねばならないような部分は微塵たりともないっ！！」

凜ッ！

「……………ああそうですかー（棒）」

ため息をつく人吉善吉

「時に善吉」

「なんだよ？」

「『生徒会長さん』などとはつれない呼び方はするな  
私とお前の仲ではないか  
昔のように『めだかちゃん』と呼ぶがよい」

「カツ！誰が呼ぶか！

……………で？俺になんの用だよ  
まさか『めだかちゃん』と呼ばせたいがために呼んだわけでもねえだろ」

服を着る黒神めだか

「うむ、貴様に一つ用が…」

いや、二つだったか」

「……………なんだよ

もったいぶらずに早く言えよ」

おそろおそろ黒神めだかが服を着たか確認する人吉善吉

「まず1つ目だが……

生徒会に入らないか？

今なら庶務の座が空いているぞ？」

「カツ！想定内の質問すぎて逆に笑えてくるぜ！

答えはNOだ黒神！

そもそも生徒会はお前以外いねえじゃねえか

勧誘するならせめて『副会長』クラスの座ぐらいちらつかせろってんだ

なんで庶務限定なんだよ？」

「何を言う

いくら幼馴染みといえど

なんの功績も残しておらん者をいきなり『副会長』にすることなどできない！

『副会長』の座が欲しいのならば這い上がって出世するのだな  
なんなら『会長』を狙ってくれても構わんぞ？（笑）」

「……………ふん

どっちにしろ入る気はねえから関係ないけどな……………  
で？2つ目はなんだよ」

途端に真剣な表情になる黒神めだか

「貴様に伝言を頼んだ男のことなのだが……  
一体何者だ？」

「は？伝言を頼んだ男って……」

…ああ【アイツ】のことか？

何者も何も俺や不知火と同じ一組生だぜ？

どこにでもいる普通の奴さ

誕生日は2月1日、星座はみずがめ座、酉年、血液型はAB型、  
身長は165cmと小さめ、体重は52kg、髪は黒、瞳も黒、  
足の大きさは25.5、若干猫背、たれ目で少しボーッとしてる  
だけの

どこにでもいる普通の奴さ」

「……………やけに詳しいな善吉  
少し気持ち悪いぞ」

「あ、いや  
俺もよくわかんねえけど  
急に【アイツ】のプロフィールを説明しなきゃいけない気がして

……………まあ唯一変わってるトコがあるとしたら名前が呼べないこと  
ぐらいだな」

「名前が呼べない？どういうことだ？」

「言葉どおりの意味だぜ

入学式の日にはクラスメイトの自己紹介があっただがよ  
一組生の自己紹介だからたまにひょうきんな奴がいたりするだけで  
これといって目立った奴はいなかったんだ……」

でも【アイツ】の番が来た途端不思議なことが起きてな」

「不思議なこと？」

「誰も【アイツ】の名前を聞いてなかったんだよ  
いや聞いてなかったってーよりも誰もわからなかった、  
の方が正しいな」

「……………」

「信じられるか？」

1人1人自己紹介してるんだからクラスは静まり返ってる  
だから聞こえなかったなんてことはありえない  
にも関わらずクラスメイト全員【アイツ】の名前がわからなかつ  
たんだぜ？

なかには『幽霊なんじゃ？』なんて言いだす奴まで出てくるくら  
いだ

俺もぶつちやけ最初は気味悪かったが……………  
話してみると意外と親しみやすい奴だったよ

…………… まあ俺が【アイツ】について知ってんのはそのくらいだ」

「それはおかしいな」

「だろ？名前が呼べないなんておかし——」

「そこではない

いや、それも十分おかしいのだが……………

…………… 呼べたのだ」

「なに？」

「私は呼べたのだ

【奴】の名を……」

「はあ！？どうやってだよ」

「私は特に何もしていない

だが昼休みに【奴】と話した時名前を呼んだら驚いていたな」

「俺がいない間にそんなことがあったのか……

あ、なら【アイツ】の名前をお前の口から教えてくれよ

自己紹介の時に名前を聞きそびれたからもう一度聞いたんだけど……

『【俺】自分の名前嫌いだから』の一点張りで教えてくれねえんだよ」

「ふむ、たしかに友人の名が呼べないというのは不便だな」

「だろ？【アイツ】自身は『おい』とか

『ちよつと』とかでいいって言ってるけど

友達の名前ぐらい呼びたい——」

「だが断る」

「な、なんでだよ？

てか最後まで言わせろ

……そしてなぜ岸辺露伴？」

「本人が『自分の名は嫌いだからあまり名乗りたくない』と言ってるのだ

それを無視する権利は私にはない」

「だ、だけだよ……………」

「そもそも一度は自己紹介しているということは

『名乗りたくない』という信念を曲げてでも

周りの者たちに自分の名を知るチャンスを与えたということだ  
そのチャンスを掴めなかった貴様たちが油断しすぎだ」

「そうは言ってもよ

ゃっぱ友達の名前は知つときたいだろうが」

「…………たしかにそれも一理ある

……………そうだな

ならいくつかヒントをやるう

ヒントをやるくらいならあの者の信念を曲げることにはならんだ  
ろうしな」

「……………カッ！

いいぜ…それで妥協してやるよ

クイズとかは嫌いじゃねーし」

「ではゆくぞ？

・ 名前は姓と名を合わせて漢字4文字

・ 姓は福岡県の地名

・ 姓が●▲だった場合、名の方は▲●という形になる

つまり『人吉』という姓なら名の方は『吉人』になるという具

合だ

・ 『あ』を数字の1、『い』を2、『ん』を46、『が』を47  
に置き換えた時

名前の総和は250になる

・名前をローマ字にすると子音は7、母音は5になる  
ただし『ん』は『nn』ではなく『n』

『し』などは『si』ではなく『shi』とする

・漢字で表した場合、名の読み方は厨二っぽい

・イニシャルはM・T

この場合Mは名、Tは姓

……………どうだ？これでわかりそうか？」

「……………」

「たしかに聞いただけでは女っぽい名前だと思うが…

キレイない名前ではないか

なあ！善吉！……………ん？

どうした善吉？これだけ大盤振る舞いしたのだ

まさか解らないなどは…」

「わかるかー！ー！！！」

---

まさか自分の名前がクイズになってるとは夢にも思わない主人公なのであった

「ヘエックション！ズズッ……」

……誰か【俺】の噂してるな」

## 第9箱「普通の奴さ」（後書き）

・文章読みにくいんだよボゲツ！

・があああはらくんよおおお！なんだああ？その思わせ振りな行間はあああ？

みたいなことがあつたら遠慮せずに感想に書き込んでくださいね。  
皆さんのアドバイスを反映させてこの作品は進化します！

Bキャンはなしです！

## 第10箱「デジャブ!？」（前書き）

買ってきましたブルオツコリー！

……じゃなくて原作コミック

原作独特の印象的なセリフは入りたい……けどオリジナリティが無くなりそうで怖い。

そんな葛藤の末、1〜3巻まで買っちゃいました。

## 第10箱「デジャブ!？」

——前回に続き生徒会室——

「そっぴゃクイズに氣をとられて聞き忘れてたが  
なんでいきなり【アイツ】のことなんか聞くんだよ?  
【アイツ】、なんかやつちまったのか?」

「…………ふっ」

「あ?なんだよ?なんかおかしいなと言ったか?」

「いや…」

【本人】も似たようなことを言っていたのでな  
思い出し笑いというやつだ

……………なぜ【奴】のことを聞いたか、だったな」

「ああ」

「【奴】と顔を合わせた時…

いや、顔を合わせた瞬間と言ったほうが正確か…

……………『あの男』に似た雰囲気を感じたのだ」

「『あの男』?『あの男』ってどのおと……………

……………!!?」

「……………思い出したようだな」

「お、おいおい!？」

ちよつと待てよ黒神!

【アイツ】が『アイツ』と似てるってどういうことだよ!？  
いくらなんでも突拍子がなさすぎるぜ!-!」

「落ち着け善吉

『似てる』などと言っていない

『似た雰囲気を感じた』と言ったのだ」

「どっちも似たようなもんだろぅが…

……… そもそも『アイツ』と同類ってんなら肌で感じる気持ち悪  
さがあるはずだろ？

たしかに【アイツ】は少し変わってるけど

そんな気持ち悪さは感じなかった……

さすがに『アイツ』と同類扱いはないんじゃないかねえか？」

「…………… そうだな

私が悪かった

この話は終わりにしよう」

「…………… 仮にも俺の友達なんだ

金輪際『アイツ』と似てるなんて言ってくれるなよ」

「…………… ああ

(善吉には悪いが……

■ ■ 同級生には気を付けておこつ……)」

「あいたたた……」

もう放課後だつてのにまだ痛みやがる

善吉っちゃんの奴おもいつきりかましてくれやがって……

ジョークってもんがわかってねえよなー」

おかげさまで今の今まで出番なしだぜチキショー

「……………そついや生徒会室に善吉っちゃんが呼ばれたってことは  
そろそろ目安箱に初めての投書がされた頃か？」

たしか一番最初の投書は剣道部がうんたらかんたらとかだったはず

「ちようど放課後で部活の時間だし……………」

ちよつと覗きに行つてみつかゝ ふふふ……………オラわくわくしてき  
たぞおー！」

『キング・クリムゾンー!!』

「つてことで剣道場に到着つと……  
ウォーカーホリック

《歩行者天極》のおかげで適当に歩いてても

目的地に着けるようになったのは嬉しい限りだな

…にしても『キング・クリムゾン』の使用率に定評のある作者だ」

さてと…ちよこーつと覗いてみましょうか

そつと覗いてみてごらん♪つと……

「……………でよーアイツなんて言っただと思っ？」

「なにになに？なんつったの？」

「『倍プツシュだ』だとよ！」

「ギャハハハハ！なんだそりや！  
狂気の沙汰ほど面白いつてか？」

……………あれ？

ピンピンしてるし…

まだ到着してなかったのかな？

「てつきりもう生徒会長にボコボコにやられちゃってるかと思った  
のに……………」

「誰が誰にボコボコにやられるって？」

「だからこの剣道場にたむろしてる不良共が  
生徒会長の黒神めだかにボコボコに……………」

……………へ？」

振り返ると木刀を持った『いかにも』な先輩がいた  
左頬に十字傷がある……………たしか門司三年生だったか

「へえ、俺たちが『あの生徒会長さん』にねえ……………  
ちよっとその話詳しく聞かせてくれないかなあ後輩くん？」

「……………オワタ」

——生徒会室・さつきの続き——

「ではべつの話題に変えよう」

「べつの話題？」

用は2つだけって話じゃ——」

「生徒会に入らないか？」

「今なら庶務の座が空いているぞ？」

「デジャブ!？」

べつの話題じゃなくて一歩手前に戻っただけじゃねえか!」

「ふむ、そうだったか？」

呆れ果てて背を向ける人吉善吉

「はぁ……」

そりゃ1人で会長、副会長、書記、会計、庶務の仕事をこなすのはキツいだろっけどな!」  
だからって俺を巻き込むな!」

又ギ又ギ

「お前って奴は昔からそうなんだ!」  
「ことあるごとに当然のように俺を道連れにする!」

フアサツ

「俺の気持ちとか迷惑とかちつとも考えてくれねえ！  
付き合いきれねーんだよ実際問題！」

凜っ！！

「大体お前なら一人で生徒会業務をやり続けることもできるだろ  
……ってうおおーっ！っ！  
あつ当たり前みてえに人の後ろで着替えてんじゃねえよ！！  
ってかさつき着替えたばっかだろーが！」

「あれは貴様を出迎えるために着替えていたのだ  
……ところで善吉

私は仕事を手伝ってもらったために貴様を引き込もうとしている訳  
ではないぞ」

「ああ？……とりあえず何か羽織ってくれない？」

「私は仕事がキツイと思ったことなど生まれてこのかた一度もない  
私に貴様が必要だからそばにいてほしいだけなのだ」

「！！」

あ、ああ！？」

途端に赤面する人吉善吉

「で、さしあたってはこの目安箱なのだが……」

『目安箱』と書かれた小さな箱をもってくる黒神めだか

「先ほど開いてみたところ早速第一号の投書があった」

「目安箱……？」

あーあつたな、そーいや」

赤面がまだ引いてない人吉善吉

「まさかあんなぶつ飛んだ演説本気にする奴がいるとは思わなかったぜ

で？どんな内容なんだよ」

「読んでやろう

『三年の不良達が剣道場を溜り場にしていて困っています  
どうか彼らを追い出してください』

だそうだ」

「……………もしかしなくても巻き込まれる流れだなこりゃ」

とか言いつつまんざらでもない人吉善吉

「うるせえ！」

## 第10箱「デジャブ!？」（後書き）

オリジナルアレンジと原作を上手く繋げるのに苦労中。  
どうやって他キャラに絡ませるか、

どこに主人公がいてもおかしくないかなどなど

課題大量生産中です。

第11箱「正常だぜ」（前書き）

やべー……（`Д`）

原作どおりに進めたら主人公のキャラがかすむ……

どうにかしなければ…

## 第11箱「正常だぜ」

### 剣道場前

露出度が高い剣道着（改造）に着替えたためだか

「このためにわざわざ着替えたのか…」

「さて、では生徒会を執行しに行くぞ」

ガララララ

「たのもー！………う？」

道場内を見て固まるめだか

「おいどうした？」

なに固まつ………て………」

めだかの後ろから道場内を覗き込み固まる善吉

「はあ………はあ………」

ぐっ………はあ………はあ………」

遅刻だよ………二人共………」

不良達の輪の中心にボロボロの主人公が倒れていた

「【お前】——！」

なんでここに………！？」

主人公に駆け寄る善吉  
と、同時に

「……あ？誰だぁお前ら」

主人公を囲んでいた不良の一人が口を開く  
リーダー格らしく、一際目つきが悪い

「……一年十三組生徒会執行部会長職、黒神めだかだ  
目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！」

「あー【そいつ】から聞いてんぜ  
今をときめくイカれた新会長つて奴だろ？

こんなところにお出でになれるとは驚きだな！  
支持率98%だか何だか知らねーが生憎俺らは残りの2%の方だ  
ぜ！ー！」

何が面白いのか取り巻きの男たちはゲラゲラと笑っている  
その緊張を破るように善吉が叫ぶ

「やってる場合かよ！

早く【コイツ】を保健室……いや病院に連れてかねえと！」

「待て善吉」

「待てるかよ！！

見てわかんたろ！？

俺は【コイツ】を病院に連れていく！

生徒会を執行するなら一人で――」

「大丈夫だ」

「……は？」

「【その男】のことなら大丈夫だ、問題ない  
いや…、【その男】『なら』大丈夫だ  
……そうだろう？【貴様】」

言葉の意味が理解できずに困惑する善吉

「お前何を言つて―」

「さすが生徒会長さん……」

「!？」

「【俺】みたいなモブキャラのこともよくわかってらっしゃる……」

「……【お前】  
本当に大丈夫なのか!？」

「うん…、大丈夫大丈夫……  
心配してくれてありがとね善吉ちゃん」

何事も無かったかのように立ち上がる主人公

「!？」× 8

その様子を見て驚く不良達

「（……大丈夫って言ったものの……  
『生氣者』が無かったらまともに立つこともできなかつたな……  
……ハハハ）」

善吉に向き直り自慢気に微笑むめだか

「言ったとおりだろう？善吉」

「お、おう……」

（こんだけボロボロで血まで出てるつてのに……）」

「……ケツ

イカれた新会長のダチはゾンビってか！？」

ビュンッ

悪態をつき、めだかに木刀を向ける不良

「さてと……では話を戻そうか

……貴様がリーダーの門司三年生だな

剣道か……懐かしいぞ、私も少しだけかじったよ

この木刀もよく手入れされておる

黒檀とは随分と張り込んだものだ」

そう言うめだかの手にはいつの間にか門司の木刀が握られていた

「！？」

（え……あれ！？いつの間に取りられた！？

感覚どころか気配もしなかったぞ!？」

「……やっぱり大丈夫じゃなかったよ善吉っちゃん……  
会長さんが門司先輩の木刀を取ったの全然見えなかった……」

「……いや、それで正常だぜ

『無刀取り』……

まあ剣道っちゃん剣道だが、かじった程度でできる技じゃねー  
技っっーかフツーに奥義だな」

「……っっっ!!」

かつ、囲めおめーらッ!!」

「おっ、おっっ!!」

ザザザッ

大きく広がり、めだか・善吉・主人公の三人を囲む不良達

「…制服改造に染髪、装飾…

校則違反のオンパレードだな

まあ私もあまり人のことは言えんが――」

「「（まっただ）」」

同時に心の中でツッコむ主人公と善吉

……なんてことをやってる間にジリジリとにじり寄ってくる不良達

「善吉っちゃん……

これってかなりヤバいんじゃないの？」

「いや…、心配する必要はまったくないぜ」

「？」

「まあ見てな——」

と、善吉が言い終わるやいなや…

ズツ…タタタタタタタタツツ！！！！

軽快な足音と共にめだかが複数人出現する

「！？

なつ、何いいつ！？」× 8

ふわっ　と柔らかく止まるめだか

いつ盗ったのか手には不良達のタバコが握られていた

「だがタバコは控えておけ

貴様たちの健全な成長を阻害するし

何より将来の楽しみがなくなるぞ！」

「……やっぱり【俺】はもう駄目みたいだよ善吉っちゃん……  
会長さんがいっぱいいるように見えた——」

「だからそれで正常だつて

分身の術かなんかに見えたんだろ？が今のも剣道の技だよ  
いや、技というか基本中の基本の動きなんだが——

まあ素人目には分身に見えても仕方ないな」

「……その言い方だと

『俺は素人じゃねーぞ！どんなもんだい！』  
って言ってるように聞こえるよ善吉ちゃん」

「あ？べつにそんなつもり——」

「——哀れなことだ」

「あ、……………始まった」

主人公と善吉が喋っている間にめだかと不良達が何かやっている

「貴様たちもかつては真つすぐな剣道少年だったに違いない  
何かしらの理由があつて道を踏み外してこうなつたに決まってい  
る」

「（これが上から目線性善説か……  
なかなかぶっ飛んでらっしゃる……）」

「親に見捨てられたか？

よき師に出会えなかつたか？

友に裏切られたか？

…安心しろ

私が貴様たちを更生させてやる

剣のこと以外何も考えられなくしてやる

矯正してやる強制してやる改善してやる改造してやる

二度とだらけようなどと思えぬように

泣いたり笑ったりできなくしてやる！！

まずは素振り千回からだ！

貴様たち今日は歩いて帰れると思うなよ！！！！」

「……イナバウアーしながらものすごく怖いこと言ってるよ善吉っちゃん

不良達がドン引きしてるよ善吉っちゃん

なんか【俺】も鳥肌たってきたよ善吉っちゃん」

「……見なかったことにしといてくれ」

そうして不良達は矯正されてしまいましたとさ

めでたしめでたし♪

「めでたくねえええぎゃあああああ！！！！」×8

第11箱「正常だぜ」（後書き）

いまさらですがスキルの能力を把握するスキルの名前は  
《拙迷書》（マニュアルマニア）とか考えてました

出すタイミングがなくなっちゃった（、、）

## 第12箱「もう何も聞くまい」（前書き）

感想でよく「文章が読みづらい」というのをいただきます。  
私なりに改善していつてるつもりなんですが、それでも「読みづらい」と言われるのでなんでだろうと思ってたんですが……

あれですね。携帯で閲覧すると読みづらいですねたしかに。

この小説の投稿は携帯でしているのですが（PC持っていないので）私は携帯のフルブラウザの状態で読みやすくなるように書いてるつもりです。

なのでどうしても携帯で普通に閲覧したら不自然なところで文が段になったりとか……カギ括弧が微妙なところで途切れてたりとか……

なら携帯に合わせた書き方すりゃいいだろうがってことなんです  
がそれだと今度はPCで閲覧した時に不自然にならないかが心配で……

で、妥協策として出たのが『携帯のフルブラウザに合わせる』です。

もっと効率的な書き方あったらお願いします。

## 第12箱「もう何も聞くまい」

翌日・昼休み

「あゝ」

昨日はヒドイ目にあつた……」

あのあとホントに不良達に素振り千回させた生徒会長  
信じられないのは何の関係もない善吉っちゃんや、

ケガをしてボロボロの【俺】にまで素振りさせようとしたことだ

「善吉っちゃんが止めてくれなかったら

マジにやらされてたなありや……」

……その代わり善吉っちゃんが二千回やらされてたけど」

ちなみに前回、【俺】はケガしてたので……」

モノローグの代わりにナレーターさんにナレーションをしてもら  
ってました

ありがとうナレーターさん

「一人でなーにブツブツ言ってるのさ」

「あ、袖ちゃん

聞いてくれよーじつは昨日カクカクシカジカでさー」

「なるほどなるほど」

で、マルマルウマウマだったわけだ」

「……………かぶせてきたね」

「あたしがまともにツツコむとでも思った？」

「さっすが袖ちゃん」

【俺】にできないようなことを平然とやってのける  
そこに痺れるあこが——」

「そんなことより学食行こっ」

「言わせてよっ！！」

「人吉が先に学食行つて待ってるよ」

早く行かないと今日のメニュー人吉が全部食べちゃうかも！」

「袖ちゃんじゃないんだからそれはないって」

それに【俺】もう昼飯食べたし行きたいところあるから」

「行きたいところ？」

「ちょっと剣道場の様子を見に行ってみよっかなーなんて  
ほら、聞いてない？」

生徒会が剣道場にたむろしてた不良達を追っ払ったって」

「知ってるよー」

知ってるけど、……………どうなっても知らないからねー」

「なんか言った？」

「いえいえなーんも」

「？」

—— 昼休み・剣道場 ——

……………いざ来てみたものの

「昨日の二の舞になったりしないだろうな……………」

おそろおそろ剣道場の扉を開く

昨日はここで門司先輩に見つかったんだっけか  
頭殴られたせいで記憶があやふやだけどそうだった気がする

「……………む？」

おお、【貴様】か」

「ありゃ？」

何やってんですか？会長さん」

道場には会長さんがいた

昨日まで廃墟みたいなトコだったのにだいぶ片付いてる…

「見てわからんか？」

掃除をしておるのだ」

「いやいやそれはわかってますけど……………  
なんで掃除してるんですか？」

「あんな状態の道場では気持ちよく稽古はできんからな  
あの者たちが少しでも精を出せるようにしているのだ」

「え？生徒会の仕事ってあの先輩方を追い出して終わりじゃないんですか？」

「何を言う」

それで終わってしまったては問題を先送りにしただけではないか  
根本的な解決にはならん

廃れてしまったあの者たちの剣に対する心を取り戻すまでが私の  
仕事だ」

どうやら本気である先輩方が昔は剣道少年だったと信じてるみたい  
だな

さすが上から目線性善説

「昼休みを返上してまで尽くすなんて見上げたもんですね

【俺】も見習いたいですよ」

「なら【貴様】にも手伝わせてやろう」

「……………は？」

えっと、今なんて？」

「見習いたいのであろう？」

だから掃除を手伝わせてやろうというのだ」

社交辞令って言葉知ってますか会長さん

「えと、あの、【俺】ってばまだ全快してないというか…」

まだ体の節々が痛いというか……  
そもそも掃除を手伝って【俺】になんのメリットがあるかわからないというか……」

「メリットならばある」

「え？」

「道場を掃除し清潔にすれば、

【貴様】も心地よく剣道に打ち込めるだろう！」

凜ッ！！

「ああゝなるほどぉ」

よしっ、それなら【俺】も掃除を手伝う氣に——  
ってなるかッッ！！」

「なんだ？嫌なのか？」

「嫌に決まってんでしょ！！」

そもそも【俺】剣道部に入る氣ないですし！」

「そうなのか？それは残念だ」

あれ？以外とあっさり？

てつきり『剣道はいいぞ』とか言ってくるかと……

「ま、まあわかってもらえたならそれで——」

「なら個人的に付き合え」

「わかってなかったー!!」

ダメだ……!!

これはもう完全に巻き込まれる流れだ……

「……わかりましたよっ!

手伝えばいんでしょ手伝えば」

「うむ

ありがとう、助かるよ」

うっ……

なんてキラキラした笑顔だ……

「……なんか善吉っちゃんみたくなってきたなー【俺】」

こうして【俺】は昼休みいっぱい道場の掃除をさせられた

……なんだかんだ言っただけ掃除ってやっぱり気持ちいいもんだな♪

「では放課後も待っておるぞ」

……………前モノログ撤回でお願いします(泣)

その後、疲れ切ってしまい午後の授業は舟を漕ぎっぱなしだった

「……なんで来ちゃうかなー」

手伝われるのが嫌なら約束なんて気にしなけりゃいいだけなんだけど……

……無理矢理させられた約束だし

「あんだけキラキラした笑顔見せられちゃなあ……」

ぶつくさ言いながら道場の扉を開く

「遅かったな ■ 同級生」

……また名前呼ばれた

……つてか会長さん割烹着だし！

………アリかも

「……随分とお早いお着きですね会長さん

【俺】ホームルーム終わってすぐに来たつもりなんですけど」

「来るように頼んだのは私の方だ

その本人があとから来たのでは申し訳がたたんからな」

あ、一応そついう礼儀はちゃんとあるのね

「………そんじゃあ早いとこ始めましょうか」

「うむ」

昼休みのうちにガラクタの整理は終えていたので  
ホウキで掃き掃除をする

それが終わったら雑巾がけだ

「昼休みと随分動きが違うな ■ ■ 同級生」

「はーはっはっはっはー！！！」

【俺】は最初からクライマックスですからねー！！！」

ワケのわからないテンションで雑巾をかけていく【俺】

午後の授業の時に気付いたが《眠れぬ檻の非情》を使えば掃除なんて楽チンだ

なんで昼休みの時点で気付かなかったんだろうか  
あっという間にピカピカだ

「ふむ…」

思ったよりも早く終わりそうだ

助かったぞ ■ ■ 同級生」

…………… もう気にするまい

「いえいえ、お安い御用ですよ

会長さん直々の頼みとあっちゃあ無下に断れませんかね」

皮肉をこめた言い方で言ってみる

「そうか…」

そう言ってくれると助かる」

「……ぷっ」

「なんだ？」

「昼休みといい今といい『助かった』って言い過ぎです会長さん」

「む？そうか？」

あまり意識してなかったが……」

「まあ意識せずに感謝の言葉を言えるのはいいことだと思いますけどね」

「……そう言ってくれると助かる」

「……今のはわざとですね？」

「うむ」

「アハハハ」

あ、そうそうお礼で思い出した

昨日はありがとうございます会長さん」

「なんのことだ？」

「名前ですよ」

善吉ちゃんから聞いたんでしょ？【俺】が名前を呼ばれるのが嫌いだって

だから昨日みんなの前で【俺】の名前を呼ばないでくれたんです

よね？」

「気付いていたか」

「ええまあ

名前を呼んだ方が自然に話が進むのにそうしようとしてませんでしたから

嫌でも気付きますよ」

会長さんに背を向けたまま雑巾で壁をふく

……………失礼かな？

「気にするな

べつに【貴様】に気を使ったワケではない

無意識にそういう会話の運びになってしまったただけだ」

「そうでしたか」

「……………■ ■ 同級生」

「なんですか？」

「一つ聞きたいことがあるのだがよいか？」

「……………かまいませんよ」

手は止めない

「じつは【貴様】を掃除に付き合わせたのも……………聞きたいことがあったからなのだが」

「だから……  
なんですかって言って――」

「【貴様】は何者だ？」

手が止まる  
壁をふくのをやめて雑巾をしばる

「……………どういう意味ですか？」

会長さんに背を向けたまま返事をする  
バケツに向かってしゃがんだ体勢だ

「……………言葉どおりの意味だ」

声の方向からして会長さんは

【俺】の背後2〜3メートルから立って話しかけてきている

「……………会長さんもよく知ってるでしょ？」

善吉っちゃん、袖ちゃんと同じクラスなんだから  
二人と同じで単なる『普通』ですよ」

喋りながらゆっくり立ち上がる

「……………『普通』？」

あれだけのケガをしていながら  
今日にはこれだけの動きをするのが【貴様】にとって『普通』な  
のか？」

【俺】は振り返らない

「……………あの時、私と善吉が剣道場に訪れた時  
【貴様】は『遅刻だよ二人共』と言ったな」

【俺】は振り返らない

「まるで私たちが道場に来ることをあらかじめ知っていたかのような口振りだ

……………なぜ知っていたのだ？」

【俺】は振り返らない

「それに、善吉に聞いたが  
どついうワケだか【貴様】の名は『呼べない』そうだな  
『呼ばせない』のではなく『呼べない』…  
一体どついうことだ？」

【俺】は振り返らない

「……………極めつけは昨日の昼休み、私と【貴様】が初めて顔を合わせた時だが

……………あの時の【貴様】からは——」

『俺は普通ですよ

だって

俺は普通なんですから』

【俺】は振り返り会長さんの目をじっと見つめて言った

「……………つつっ!」

驚いてる驚いてる

……………驚いてる顔もこれまた麗しいことで

「……………冗談ですよ

ってか聞きたいこと一つじゃなくなってますよ?

……………会長さんは少し【俺】を過大評価しすぎですよ  
いや、過小評価かな? まあどっちでもいいですけど」

「……………」

「そんなに警戒しなくてもいいですって

【俺】はどこにでもいる『普通』で『普通』な…  
ただの『普通』ですから」

「……………信じて……………よいのか？」

「ええ」

とびっきりの笑顔で答える

「……………わかった

もう何も聞くまい」

これで会話は終了した

…と、同時に

「なっ！

何iiiiiiii！？」

善吉っちゃんが道場の入り口で絶叫していた  
そりゃ一日でこうなってるや驚くわな

「それじゃあ会長さん

【俺】はそろそろ帰りますね」

【俺】はいそいそと掃除用具を片付け始める

「ああ

気をつけて帰るのだぞ」

善吉っちゃんとすれ違う

「あれ？」

なんで【お前】ここに？」

「んー…」

説明するのめんどいから会長さんに聞いて」

そのまま道場を出る  
すると

「……あ」

「あ」

昨日の先輩方とばったり

……道着着てるし

「………どうしたんですか？その格好？（にやにや）」

「うっ、うるせえ！」

「………会長さん待ってますよ？  
早く行ってあげてくださいね」

「余計なお世話だっ！！」

「うわぁ怖い！んじゃ【俺】はさっさと退散します  
頑張ってくださいね先輩方」

「…………お、おい」

呼び止められた

「なんですか？」

「き、昨日は…………あれだ…………その…………悪かった」

「…………ふふっ

気にしてませんよ

それじゃあ今度こそさよなら」

そうして【俺】は剣道場をあとにした

## 第12箱「もう何も聞くまい」（後書き）

主人公は基本的に平和主義者なのであんまり戦闘は好きじゃないです。

一応戦闘能力を引き上げるスキルとかも考えてはありますけどね。

《壊倒乱撒》（オールレッド）

攻撃力を超人的に高める。攻撃力のみ。

《至高柵護》（オールグリーン）

防御力を超人的に高める。防御力のみ。

みたいな

第13箱 番外編・読み飛ばし可（前書き）

13箱目ということで番外編です

この話はべつに読まなくても物語には影響しません………と思います  
す

### 第13箱 番外編・読み飛ばし可

この回はナレーターがナレーションを担当させて頂きます  
ふむ……番外編といっても何をお話すればいいのやら……

では主人公、■■■■の生い立ちについて少しお話いたしましょう  
か……

【彼】は一体どういう人物で、どういう過去を持ち、  
『めだかボックス』の世界に訪れる前はどのような生活をしていたの  
か……

興味がある方は是非……

0歳

【彼】は生まれて早々デンジャラスな目にあったことがある

電車の線路の上に捨てられたのだ  
それも裸で

この生い立ちについて【本人】は特に何も感じるところはないらしく  
面白おかしく過去の失敗談を語るかのように喋る  
………もちろん聞かされた方はドン引きである

捨てられたことについてなんとも思わないのか？という質問をされ  
ても

「んー…」

子供を養うつてのはそれはそれで大変なことだからねー…  
仕方ないんじゃない？

アハハハハ」

……というおおよそ一般の思想とはかけ離れた返答をしたこともある

1～5歳

孤児院に拾われた【彼】は他の子供たちと  
同じく健やかに育った

……だが少し変わったこともあった

こけて擦り剥き、血が出て大泣きしたにも関わらず  
次の日には傷は消え失せ、ケロツとした顔でおやつを食べていたり  
するのだ

そんな【彼】を大人たちは気味悪がった

そんな感じの5年間

6～11歳

小学校に入学してからは親がないことでよくいじめられていた

低学年のうちはからかい半分だったが

高学年にもなればいじめは過激になってくる

無視は当たり前、教科書には落書きされ、机は隠された  
だが【彼】はべつに困惑する様子はなく…

無視されるならまず話し掛けないし、  
教科書に落書きされるなら教科書の内容をすべて暗記、  
机を隠されたなら机なしのまま授業を受けた

そんな【彼】をクラスメイトは気味悪がった

そんな感じの6年間

12〜14歳

中学に入ってからその『奇妙さ』が顕著に表れ始めた  
勉強は普通程度、運動は苦手

人気者、いじめられっ子問わず誰にでも分け隔てなく話し掛けていた  
だがそういう人間をよく思わない輩もいる

中二の頃に三年に呼び出され袋叩きにされた  
三年曰く、「誰にでも調子がいいのがム力つく」からだそうだ

だが次の日には怪我はほぼ完治  
平気そうな顔で登校

三年は二度と【彼】と関わろうとしなかった

クラスメイトも三年に目をつけられたという噂を聞き、  
【彼】から遠ざかった

実際三年に呼び出されることはもうなかったのだが  
そんなことはクラスメイトにはわかるはずもない

しかし【彼】は  
友達がいなくなったことを別段悲しむこともなかった

そんな【彼】を先生、クラスメイト、先輩、後輩は気味悪がった

そんな感じの3年間

高校生になった【彼】は孤児院を出て一人暮らしを始めた  
そして今までの自分の人生を振り返り、こう言うのだった

「【俺】の人生ってホントに特徴のない人生だよなー」

第13箱 番外編・読み飛ばし可（後書き）

主人公がどういう人間なのか？

他人に対してどういう感情を持っているのか？

その片鱗を垣間見せる回ですた

## 第14箱「とりやつ!」(前書き)

新しいバイトがキツくて最近更新できてませんでした。

これからも今までのような早さでは投稿できないかもしれません。

物語中の会話の運びがおかしく感じるかもしれません。

それはたぶん作者が疲れてて正常な判断ができなくなってるからでしょう。

## 第14箱「とりやつ!!」

剣道部のいざこざから数日が過ぎた

善吉「っちゃんはいつのまにか会長さんを「めだかちゃん」と呼ぶようになった」

そしてこれまたいつのまにか生徒会に入っていた

本人曰く、「めだかちゃんには俺がついてないと」らしい

……えっ？

日向くんの剣道サンバルカン？

なにそれ？おいしいの？

………「ってゆーか【俺】、日向くんと面識ないんだよね

だからいきなり見ず知らずの人を殴り飛ばすワケにもいかないから

………

そこは原作どおりに善吉「っちゃんに譲りました

どこにでも原作介入するとは限らないのさ！

というワケで原作での第1箱の話は前回で終了なのでした

生徒会室

遊びにきました

「いやゝそれにしても似合わないねえ W W W W」

「うるせえ！芝、生やすな！！」

大体俺は黒い制服は似合わねえんだよ  
だから制服白のこのガツコ来たつてのに――」

「いや、そんなことはない  
善吉には黒がよく似合う」

「「どうわっ！！」」

びっ、びっくりした………！！  
会長さんいつの間に背後に？

「だからお前はなんでいつもいきなり後ろにいるんだよ！！」

「そうですよ会長さん！  
心臓に悪いからいるならいるって言うってください！」

「見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？  
きつと格好よいであろう」

「「え、シカト？」」

「………ったくよー  
ジャージの上から制服なんて何をバカな………」

とか言いつつつ着るんですね  
わかります

「って、うわ何だコレ！？

デッ、デビルかけえ！！  
反骨精神のカタマリみてーだ！！」

善吉っちゃんエ…………

「ところでなぜ【貴様】がここにいるのだ？」

「え？あ、ああ

べつにこれといって理由はありませんよ  
善吉っちゃんが生徒会に入ってたってんで  
ちよつと冷やか——様子を見に来たんです」

「今なんて言いかけたコラ！！」

「……………ソレ脱いだ方がいいと思うよ善吉っちゃん」

「話をそらすな！」

「……………まあよい

目安箱をチェックしてきたぞ  
善吉、明日から目安箱の管理は貴様の仕事だ  
本生徒会の最優先事項なのだからくれぐれも手を抜くでないぞ？」

「だってさ善吉っちゃん  
庶務の仕事頑張らなきゃね」

「カツ！わざわざ言われるまでもねえよ！」

「あははは！

それじゃあ生徒会の仕事の邪魔にならないように

【俺】はそろそろおいとましますね会長さん

「うむ

【貴様】も悩み事があれば遠慮なく目安箱に投書するがよい」

「ありがとうございます

じゃあ善吉っちゃん

初仕事がんばってねー」

「おう、サンキュー」

生徒会室を出る

………その直後に

「きゃっ!」

「うおっと!」

危ねー…

ぶつかるトコだった

「すみません、前方不注意でした  
生徒会に用事ですか?」

「え?あ、うん

目安箱に投書したんだけど…

ちよっと気になっちゃって様子を見るに……」

この人は陸上部の……

あり…あり…あり…ありありありアリアリアリアリアリアリア

リアリアリアリアリアリアリーヴェデルチ！  
じゃなくて有明先輩だったな、たしか

「気になって見に来るくらいなら直接悩み相談してみたらどうです？  
今ちようど目安箱の中を確認してるみたいですし」

「あ、そうなんだ

えっと……【君】は生徒会の人じゃないの？」

「【俺】？【俺】は違いますよ  
ほら、制服も白いでしょ？」

「あ、言われてみればそうだね」

「でしょ？」

なんかポヤツとした人だなあ…  
先輩って感じもあんまりしないし……  
……でもこういう人がけっこうタイプだったりして

「じゃあなんで生徒会室から出てきたの？」

「たまたま遊びに来てたんです  
………で？有明先輩」

「え？」

「入るんですか？  
入らないんですか？」

「あ！ごめんなさい！今入りますから」

……… かわいいなこの人

「失礼しまーす」

有明先輩が中に入るのを見送って

【俺】は今度こそ生徒会室を去った

「…………… あれ？」

私【あの子】にいつ名乗ったわけ？」

—— 学園内廊下 ——

さて……………と

「どうしようかな……………」

有明先輩が生徒会室に来たってことは  
会長さんの気持ち悪いまでの推理力が発揮される回まで来たってことだ

「…………… 絡んどいた方がよかったかしんないな」

今さらながら後悔

…………… あれ？

「ここどこだ？」

おいおいマジかよ……

学園内で迷子なんて方向音痴の範疇越えてるぞ

「仕方ない……」

《歩行者天極》使うか……」

あんましスキルを乱用すんのは好きくないんだけど……（ただし《戒名》は除く）

そうも言ってられないよな

「って、もうこんな時間かよ！？

観たいテレビがあるのにー！」

時計を見て焦り、小走り気味になる  
五分ぐらい走ったあと――

「あつ、一組の教室みつけ！  
早く帰ってテレビを――」

「待てコラ」

ガッ

「オンドウル！！」

こ、ころんだ……

変な声も出ちゃったよ……

……足を引っかけられたのか？

「随分とユニークな転び文句だなあオイ」

声の方向に向き直ると

やたらと目つきの悪い子供がいた

白い制服だが【俺】が着ている制服とは違う

たしかアレはダンプに轢かれても平気な

『白虎』（スノーホワイト）とかいう特別製なヤツだ

……それを着ているのはもちろん

「雲仙…冥利…」

モンスターチャイルドが【俺】を見下ろして…

否、見下していた

「あ？

なにいきなり呼び捨てにしてくれてんだ【テメー】

上級生には敬語が基本だろうがよ！」

「ぐほあ！！」

いきなり顔に衝撃が……！

あのスーパーボールか……

「……………すいません先輩

ちよつと驚いちゃって無意識に呼び捨てにしちゃいました

それにしてもいきなり制裁は厳しくないですか？

呼び捨てが気に障ったんならまずは注意してくれればいいのに」

「……（コイツ自分の顔に何が当たったのか気にならねえのか？）  
べつに呼び捨てされたのがムカついたからどついたワケじゃねえ  
まあその分も含めてあとでキッチリ清算するがな」

怖え…

ホントに10歳かよ雲仙先輩

……………10歳だったよな？

「んじゃあ今の一体何に対してなんですか？」

「走っただろ」

「……え？」

「廊下だよ廊下！」

廊下走っただろうがつつてんだよ！」

「そ、それだけ？」

「あ？それだけ？」

【テメー】今、言うに事欠いてそれだけつつったか？」

あ！やべっ！

「風紀委員長の前で堂々と校則破つといて  
よくもまあんなことが言えるもんだな

怒りも呆れも通り越して笑えてきちまうぜ！」

「あ、いや、今はえっと、言葉のあやっというか、その」

「今時『廊下は走っちゃいけません』なんて小学生のガキでも守れるぜ？」

それを仮にも高校生ができねーなんてよオ……

小学生に顔向けできねえよなあオイ！」

小学生でも守れる……

あ、だから雲仙先輩はちゃんと守ってんのか？

「……………今【テメー】かなーり失礼なこと考えたろ」

「うえ！？

い、いやいや！滅相もない！」

「その反応でバレバレなんだよ！ダボが！」

「ガッ！！」

また顔面に……

「くうっ……………！痛ってえ……………」

マジでこれスーパースーパールの衝撃なのか？」

「！

（【こいつ】……………二発食らっただけでもうタネを……？

……………いや、最初に当てた時もさして驚いた風な態度は見せてなかった  
った

っーことは一発目からいきなり見破ったってのか？）

……………へえー

よくスーパースーパールだってわかったじゃねえか

運動神経は悪くても動体視力はまあまああるみてーだな

これを見破ったのは【テメー】が初めてだぜ」

「え？動体視力？」

……あ、そうか

雲仙先輩は【俺】が攻撃の正体を『見破った』と思ってるんだ  
実際は『知ってた』だけなんだけどなあ……

「残念ながら動体視力で見破ったわけじゃありませんよ先輩  
最初からスーパーボールだって知ってたんです」

「……………知ってたただあ？」

「ええ、知ってました

先輩と会うずっとずっと前からスーパーボールのことは知って  
ました」

あんまりバカスカやられまくるのもヤダからな  
いっちょ意味深なハツタリかましとくかな

「俺と会う前から？」

……………【テメー】意味深なことほざいて

俺をケムにまこうって魂胆じゃねえだろうな」

「…だとしたら？」

「俺がケムにまかれる前に【テメー】を消し炭にしてやんよー!!」

瞬間、雲仙先輩は【俺】に向かって飛び上がってきた

『白虎』の袖口には大量のスーパーボール

たぶん今のセリフからして炸裂弾『灰かぶり（シンデレラ）』だ  
まったく……『普通』相手に容赦ないなあ

……仕方ないね

ここは《あのスキル》と《あのスキル》で乗り切るか  
《あのスキル》も使えるかな？

「すうー……」

息を吸って……

「ズンッ」

「うお!？」

途端に滞空中の雲仙先輩の体が廊下に落下した  
それこそズンッという感じで

「な、なんだこりゃあ……  
体が……クソ重てえ……!」

「あれえゝ？おかしいぞおゝ？  
急にどうしたんですかあゝ？雲仙せんぱあゝい」

「クッ……!  
何しやがったテメエ!」

「べつにいゝ？何もしてませんよあゝ?」

嘘だ

もちろん何かしたに決まってる

スキルの一つ

ボイステンジャー

《音欺話》を発動した

要約すれば

- 1、擬音を口で言う（メラメラとかビリビリとか）
  - 2、対象の耳にその擬音が届く
  - 3、対象の体に擬音に見合った現象が起きる  
（ただし対象がその擬音に対して抱いている概念によって起きる現象は変わる）
- みたいなスキル

ぶつちやけ都城王土の真骨頂である『言葉の重み』の擬音版だね

「…………クソがつ！」

見下してんじゃねえ！」

「見下してません

見下ろしてるんです

ってか先輩に言われたくありません」

《音欺話》を解除する

重みがなくなり立ち上がる雲仙先輩

「ケツ！俺は昔からこういう性分なもんでね」

見下し性悪説だったっけ？

「…………先輩、もう許してくれませんか？

今回は急いでたんで走っちゃいましたけど……  
普段はまったく走らないんですよ？廊下」

「つつざけんな!!」

『また今度ガンバル』だとか『もうしないから』なんて  
根拠のねえ言い訳で許すわけねえだろ!!ガキじゃなんだぞ!!  
つかそれで許したら風紀委員いらねえんだよ!!」

いきなり廊下に叩きつけられたからだろうか  
さつきよりも凶暴チック……

……《あのスキル》効くかな？

「……風紀委員の仕事をまっとうしようとするのは素直に感心し  
ます

でも……相手は選ぶべきでしたね……」

言葉に迫力がつくように気をつけて喋りながら《あのスキル》を使う

「あ？

何いきなり態度エルになってんだよ【テメー】

またスーパーボールのつぶてを浴びせられてえの………か……

………!!!？」

……『見え始めた』か

「どうしたんですか先輩？  
いきなり言葉を詰まらせて」

「……………なんでもねえよ、心配無用だ

（【コイツ】さっきからなんなんだ！？

最初はごくごく『普通』な雰囲気【ヤツ】だったってのに……  
スーパースーパールのことは『見破った』んじゃない『知ってた』な  
んてぬかすわ

ワケわかんねー力で廊下に叩きつけられるわ  
キャラも喋り方もコロコロ変わるわ……）」

「そうですか？

……………のわりには随分と震えてますけど？  
どこか体調でもすぐれないんですか？」

「……………」

（極めつけは『コレ』だ

体の震えが止まらねえ……

【ヤツ】から目が離せねえ……

まともに呼吸もできやしねえ……

頭で動こうと意識しても体が動くのを拒絶しやがる

……………まさかビビッてる？この俺が？たかが『普通』ごときに？

いや……………もういろんな意味で【コイツ】……………

普通じゃない……！）」

「……………」

たぶん今雲仙先輩の目には……………

【俺】は化物みたいな雰囲気醸し出してるように映ってるんだろ  
うな

まあ【俺】がそのイメージに見合った実力を備えているのか？とい  
うと……………

答えはノーだ

これもスキルの力

メガロマンニョアル  
《誇大妄操》によって

【俺】のありもしないイメージを今、雲仙先輩は見ている  
じつは会長さんに対しても何回か使ったことあるんだよね

「……………なんにもしてこないってことはどうやら  
お咎め無しで釈放ってことでいいんですか？」

「ああ！？んなワケねえだろ！！  
ただちにぶっ殺して——」

「無理でしょ今の先輩じゃ

……………  
じゃあ【俺】は帰りますね」

「~~~~っ！！  
待てゴルア！！」

「そんなにむきにならなくてもまた会えますよ先輩  
制裁はその時にきっちり受けますから  
……………とりやつ！！」

二つのスーパーボールを思いっきり壁と床に投げつける

「！？  
（さっき俺が【ヤツ】に放ったボール！  
いつの間にか回収してやがったのか！？）」

スーパーボールは床に壁に天井にとランダムに乱反射する

そして……

「ガッ!」

二つのボールは先輩の両目にクリーンヒット  
ちなみにこれもスキルの力  
《オーバーヒット七点八当》というスキルだ

投げた物、蹴った物が確実に的に命中する  
それも標的の弱点や急所に

投げる物によっては簡単に人を殺せる危険なスキルだ  
今回はスーパースキルだったからよかったが……

「それじゃ先輩、縁があつたら……」  
『縁が合つたら』……また会いましょう」

悶絶している先輩にそう言い残して【俺】はそそくさと帰宅した

第14箱「とりやつ!」(後書き)

というワケで登場しました雲仙冥利!

なぜ彼が一組教室前に?とかは深く考えずに流してくださいな。

めだかや善吉たちが有明先輩の依頼をこなしている裏でこんなことが起きてたんですね……。

オリジナルな展開なので雲仙の喋り方とか微妙に原作と違いかもしれませんが大目にみてください。

## 第15箱「ちよつとビックリ」(前書き)

特に何も思いつきませんのでパスでお願いします。

## 第15箱「ちょっとビックリ」

生徒会室

「…今日は三通も入ってやがる  
みんな色々悩んでんだなー  
しかも今回に関して言えば、どうやら異彩を放つ相談が一つある  
ようだぜ…」

「どれどれ？  
どんな依頼？」

「子犬探しだよ  
去年の冬休みに学園内ではぐれちまったってんで  
そいつを見つけてくれって——  
おわぁっ!?!」

「ヤッファー善吉っちゃん  
目安箱の調子はどうよ？」

「…………俺の後ろに立つな」

「怖ッ！  
あの殺し屋みたいな顔になってるよ善吉っちゃん!?!」

「……………つたく  
めだかちゃんみたいな真似してんじゃねえっつーの」  
「うむ、すまん」

「言つとくがまったく似てないからな？」

「バツサリだー！」

「……で？何の用だよ？」

「なんか用事があるからここに来たんだろ？」

「いんや、特にこれといって

たまたま善吉っちゃんが目安箱を回収してるのを見かけたからさ  
でもまあしいて言うのなら……

「善吉っちゃんに会いに来た……ってトコかな？」

「気持ち悪い」

「またまたバツサリだー！」

「あははは！いいねえ善吉っちゃん！」

「そのノリの悪さは善吉っちゃんにしか出せないよ」

「誉め言葉として受け取つといてやるよ」

「でも、ふーむ……そっかそっか……

「子犬探しねえ……」

「どうした？」

「いやいや、なんでもないよ

「んじゃ子犬探しがんばってね善吉っちゃん」

「？」

お、おう」

——学園内中庭——

「そつかそつか…

もう子犬探しの回か…

種類はボルゾイだったっけ？」

そつえばそんな回もあったななどと思いながら  
中庭に迷い込ん……散歩のため立ち寄った【俺】

えっ？また迷ったのかって？

やだなあ、自分の通ってる学校で道に迷うワケないじゃないかー（  
棒）

……まあ言い訳はこれくらいにしといて、だ

先日の雲仙先輩との一件……

原作には無い『流れ』だった…

アレは【俺】がこっちに來た影響？それとも『<sup>ルト</sup>侵攻役』の……？

「……なーんか嫌な予感がしないでもないような感じだね」

でもそんなに危惧する程のことでもないのかもな

安心院さんが言ってたように、いずれは向こうからやってくるんだ  
ろっし

そうそうエンカウントするワケもない——

ムギユウ

なにか嫌な感触のものを踏んだ気がした

「グルルルル……」

「……………」

嘘だと言ってよ、バーニィ……」

——学園内中庭・別の場所——

「ふーん意外だね！

あの無敵のお嬢様に『動物が苦手』なんて弱点があったなんてさ  
——」

「まあな

完璧超人みたいに言われてっけど、めだかちゃんにも色々あんだ  
よ」

子犬探しに出向いてきた善吉  
そしてそれに付き添う不知火

「あいつ小学一年の頃に飼育係やったことがあってさ  
その時々あったんだよ  
トラウマじみたことがな」

「へえ」

だけどき、そんなこと言ってちゃ業務に支障をきたさない？」

「だーから！

そういう時のために俺がいるんだろっが！」

どや顔でキメる善吉

「さあ不知火！わかつたら早く俺を案内するんだ！  
その心当たりの場所とやらになー！」

「ああ…うん…

いいんだけどね別に…

…そのテンションキモいな」

善吉を案内するため先行する不知火

「まあ心当たりっていうかさー  
ちよつと前から学園内に住みついている犬がいるらしいってだくな  
んだけど…

えーつと確かこの辺に…」

「ガガウツ！ガウツ！ガガガウウオオン！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおー！！  
チクシヨー！別のモノにエンカウントしちゃったアアアー！！」

善吉と不知火が茂みから出ると

【主人公】が大型犬に追いかけて回されていた

「つかいつまで追いかけてくるんだこの犬！？  
《眠れぬ檻の非情》使つてるとはいえ、かれこれ10分以上追っ  
てきてるぞ！？」

いい加減あきらめろよ……………って、ああ！  
善吉っちゃん！袖ちゃん！  
ちようどよかった！この犬なんとかしてくれー！」

「……………  
ね、あの犬そのイラストと模様とか一緒じゃない？」

「不知火さん、あれは違うよ  
あれは散歩中に飼い主とはぐれちゃった可哀想な犬とかじゃねーよ  
あれはあれだよ  
獲物を追いかけて回して疲れさせ、今まさに捕らえんとしている  
ヨーロッパの貴族とかが狩りの時に放つ猟犬だよ」

「少しは【俺】にも興味を示せよ！！そこの二人組！！  
って……………あっ」

「「あ、こけた」」

「ガオオオオウツ！」

「ギョワアアアアア！」

「「南無三」」

——中庭・また別の場所——

「……………酷い目にあった」

なんとか一命は取り留めたけど……  
オデノカラダハボドボドダー！

「オイオイ嘘だろ？」

俺今からあいつ捕まえるの？マジで？

くっそ……信じらんねえ

不知火、お前手伝ってくれるんだよな？あと、【お前】も」

【俺】はついでかい

「え！？あたしが！？やだよ！！なんで！？

あたしは親友のあんたが酷い目に遭うのを

安全圏から眺めていたいただけの人間なんだから！！」

「いや、お前は人間じゃねえ」

「【俺】に言わせれば、友人が猛犬に襲われているのにも関わらず  
助けずに眺めている二人が信じられないけどねっ！！」

「あんたの勇姿を写メで撮って待ち受けにするの！」

「……………」

お前今日中に天罰くだるぞ」

「……………ねえなんで二人共シカトするの？

【俺】なんかした？ねえ？」

「ガウガウツガウツ！！！」

「「「！？」」」

「……フシユルルル」

「…ほら

『お兄ちゃんこっちにおいでよ、一緒に遊ぼうよ』って言うてんじゃん」

「どうだろうな

俺には『ヒト共！次に俺様の眠りを妨げれば容赦なく食い散らかすぞ！』

って聞こえたけど」

「【俺】は『今度はその黒い制服のヒトと追いかけて何がしたいな』

って聞こえたよ」

「お前ら二人して俺を生け贄にするつもりか！？」

「やかましい！

こちら一足先にもう襲われててんだよ！

善吉っちゃんも同じ目に遭ってしまえ！」

「んだとコラ！！」

睨み合う【俺】と善吉っちゃん

「じゃあもう帰る？

すくすく帰っちゃう？

せっかく人吉がお嬢様にいいトコ見せるチャンスなの？」

睨み合う【俺】達を面白そうに眺めながら  
袖ちゃんが善吉っちゃんをけしかける

「ぐ…」

あーわかったよ！

行きやーいいんだろ行きや！」

会長さんのこととなると決断早いなー善吉っちゃん

「あつ待つて人吉！

行くんだったらこれを持っていくんだ！あたしのお昼ごはん！」

そついう袖ちゃんの手には魚肉ソーセージが握られていた  
某猫型ロボットが

ポケットから未来の道具を出す時のBGMが聞こえた気がしたが気のせいだろう

「あん？ソーセージ？

ああなるほど！こいつを餌付けに使うわけだな！？

冴えてんじゃない！」

「んーんそうじゃなくってさ

これをおなかのトコに仕込んで

『ぎゃああ！内蔵を喰われたー！…と見せかけて実はソーセージでした』

ってギャグやってほしいの」

「あははは！いいねそれ！

【俺】もぜひぜひ見てみたいよそのギャグ！」

「……そのギャグさあ

やった二秒後に本当に内蔵喰われるよな？

てゆーか【お前】に至ってはただ単に俺を巻き込みただけだろ  
うがー!!」

「なに言ってるのさ善吉っちゃん

巻き込むもなにも、そもそもあの犬を捕まえるために来たんでし  
よ？

だったら多少のリスクは覚悟しないと」

「笑いを堪えながら言ってるから全然説得力がないね」

袖ちゃんにツッコまれちゃった

ちよつとビックリ

「…クソッ

やっぱ俺がやるしかねえのか

とりあえず貸せ！」

袖ちゃんの手からソーセージをひったくる善吉っちゃん

雄叫びをあげながらボルゾイに特攻していく

漢だぜ善吉っちゃん

………プププッ

「グルルルル…」

あっ

善吉っちゃんに気付いたみたい

「え？」

あっ

犬が飛びかかった

「ぎゃああ！内蔵を喰われたー！と見せかけて実はソーセイー…  
ってマジでぎゃあああっ！！」

「ああステキ！ステキ！  
人吉くんてば超ステキ」

襲われてる人吉を見て

恍惚とした表情で写メを連写する袖ちゃん

………の横で腹を押さえて大爆笑しながら転げ回っている【俺】

「あははは！あははは！  
イテテ…笑いすぎて傷が…  
あははははは！…アイテテ」

「やっぱり【お前ら】人間じゃねえ！  
ぎゃあああああっ！！」

## 第15箱「ちょっとビックリ」(後書き)

犬の回前編です。

思いついたスキルは一発モノじゃなくて何回かは使いたいですね。  
使えるかどうかは物語の作り方次第なんです…。

第16箱「……いゃん」（前書き）

かなり間が空いてしまいました。  
ストーリーを考えてたのと日頃の疲れが原因かもです。

第16箱「……いゃん」

——翌日・生徒会室——

「えー、というわけでございまして  
不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗  
その後の逃走を許してしまいました」

ボドボド…

もといボロボロになった善吉が任務の進行具合を報告する

「……そうか

まあなんというかアレだな

とりあえず貴様達の仲の良さは不愉快だな」

報告を聞き若干不機嫌になるめだか

「要するに行方知れずになっていた半年間に  
子犬は成犬になってしまったというわけか？  
犬の成長は早いからな」

「あー…まあそんなトコだ  
いやそれどころか、ありゃあ完全に野生化しちまってるよ」

気まずそうに頭を掻く善吉

「一応投書主にもあってみただけど  
それがいかにも感じよさそうな娘さんでさ……まあ先輩だけど  
とてもじゃねーが現状は報告できなかったよ」

「ボルゾイとはロシア語で俊敏を意味しているな  
もともとは狼狩りのための狩猟犬なのだ  
生半可な猛獣よりよほど獣性が高いぞ」

「カツ！どつりで手も足も出ねーわけだよ！（内臓は出たけど）  
まあつつてもほっとくわけにはいかねーよな  
このままじゃ保健所が動きかねねーし」

「……………保健所？」

ピクリと反応するめだか

「ま、心配しなくていいよめだかちゃん  
俺もやられっぱなしじゃ収まりつかねーし  
こっちは俺と不知火で何とかするからさ」

「……………不知火と？」

ピクピクリと反応するめだか

「ああ

まああいつは絶対嫌がるだろうが頼めば協力くらいはしてくれる  
はずだし

めだかちゃんは知らないと思うが不知火はあれで結構頼りになる  
奴なんだぜ？」

「……………」

「そんなわけでお前は自分が担当してる案件にだけ集中して――」

「待て善吉

やはりその件私が動こう!」

「……ああ?

いや別にいいけど…

っ—かいなのかよ

相手は動物だぜ?」

「構わんさ

私の方の案件は既にあらかたカタがついておるし

何より!

私の不甲斐なさが原因で貴様が他の誰かに頭を下げるなど我慢ならん!!

ゆえに改めて!

目安箱への投書に基づき生徒会を執行する!!」

——その数分前の中庭A——

ある生徒達が野生化した犬のもとへと足を運んでいた

「えーと……メールじゃこのあたりらしいんだけど…」

「…疑ってるワケじゃねーんだけどよオ

そのメールは信用に足りえるもんなのか?

送り主が不明だったんだろ?」

「私も最初は気味悪くて無視しようと思ったよ?

でも『添付してある地図の場所にとってもワンダフルな動物を見かけました』

あなたが担当してる動物園の実験動物の一匹にいかがでしょうか？  
キュートでプリティーな謎の美少女より』

…なんて書いてあったんだもん  
気にならない方がおかしいよ」

「まあたしかに怪しいな……」

特に自分のことを謎の美少女って言っちゃまうあたりとか」

「いやいやそこじゃなくってさ」

「『あなたが担当してる動物園』ってトコだろ？」

「そうそう！そこだよ！

私が時計塔の地下研究所で動物園を担当してるって知ってるの  
理事長とか十三組の十三人ぐらいしかいないのに……」

「よしんば地下に施設があると知ってたとしても

『誰』が『何処』を担当してるかまで把握してるとはな……」

「こんなことにわざわざ付き合わせちゃってゴメンね名瀬ちゃん  
べつに私一人でもよかつただけどなんか寂しくて……」

「いーっていーって

大親友の古賀ちゃんの頼みは断れねエよ」

十三組の十三人のメンバーである名瀬天歌と古賀いたみが  
中庭でそんな会話を繰り返している……

またかチクシヨーーー！！！！

叫び声があたりに響いた

「……今の聞こえた？」

「……ああ

あっちの茂みの方からだな」

「行ってみよう！」

声のした方へと急ぐ二人  
茂みの中へと入ってゆく  
そして茂みを抜けるとそこには……

「あ！誰か猛獣に襲われてる！」

「いや、猛獣に見えるがやはりボルゾイっつー種類の犬だぜ古賀ちゃん

狼を狩るための狩猟犬だ」

「へえー…博識だね名瀬ちゃん」

「見たところ今あの犬の標的はあの【男子生徒】みたいだな  
……ん？あいつは………」

「？」

「いやはや…なんか最近ケガする機会が増えてきたような気がするな【俺】」

昨日のケガはもう治ったけど

「もうあの犬捕まえたのかな？  
ちよつと善吉っちゃんたちの様子見に行くか」

ヴィーン、ヴィーン

「ん？」

メールだ…

誰からだ？【俺】のアドレスは誰にも教えてないのに…  
ってか【俺】自身も自分のケータイのアドレス知らねエ  
……………機械って苦手なんだよね

「えーと…なにになに？」

『昨日の場所でもた生徒会が面白いことやるってさ  
興味があるなら来てみれば？』

……………文面から察するに袖ちゃんからかな？」

昨日の場所か…

あんましあの犬には会いたくないんだけどなア…

「見つからなきゃ大丈夫かな？  
……………うん、大丈夫だ問題ない」

独り言をブツブツ呟きながら中庭へと向かう

---

中庭 B

---

「生徒会みんなはどこかなー」

あの野獣に見つからないように気をつけながら善吉っちゃんたちを探す

「あるえー？いないじゃんかー」

まだ来てないのかな？

……そういえばなんかこんなこと前にもあったな

もう善吉っちゃんたちがいるもんだと思って剣道場に忍び込んだら先輩方に見つかりフルボッコ

「もしかして【俺】ってトラブルに巻き込まれやすい体質？  
なんちゃってー、あははは」

「グルルルルルル……」

「………………スーパーウルトラグレートデリシャスワンダフル  
やばい」

「ガガアウガウツガアアツツ！」

「またかチクシヨーーー！！！！」

間違いない！【俺】は確実にトラブル体質だ！

「クソ！怪我してもすぐに治るが痛いのは痛いんだぞ！」

ジリジリと迫ってくるボルゾイ

「ガウガウガウアツツ！！」

「『今度は仕留める』ってか？

ははっ、そうかそうか逃がしてはくれないみたいだな——  
だったら仕方ない！【俺】も男だ！潔く諦め——  
る！ワケ！には！いけないイイイ——！！！！」

命をオオオオ……………

燃やせエエエーッッッ！！！！

「ウオオオオオオツツッ！！！！」

ロケットスタートで逃走を開始する【俺】  
頭の中で『クリアマインド』が流れ出す  
全速前進DA

「ガガアウガウアアアツツ——」

しばらく追いかけていると突然……

「！！？」

クーン……クーン……」

「？」

「なんだ？急に追ってこなく……」

急ブレーキで止まる

「クーン……クーン……」

何かに……怯えてる？

「ひっさしぶりだなオイ

前に会ったのは……入学式前ぐらいだったか？」

！！

この、女声なのに男っぽくてどこか気だるそうな喋り方は……

「……たしかに久しぶりですね

あの時は殺されるかと思いましたよ名瀬先輩」

「殺される？もう死んでただろ？あれは」

「じゃああなたの目の前にいるのは一体全体誰なんですか？」

「……双子？」

「……本気で言ってるワケじゃないですよね？」

「たりめーだろーが」

「……ボソボソ

（ねえねえ名瀬ちゃん、誰【あの子】？知り合い？）「

「いや、知り合いっつー程でもない――」

「やつほー古賀先輩  
はじめまして！」

【俺】は■■■■！名瀬先輩の元彼でーっすー！」

「！！！？」

「えっ、元彼！？嘘！？」

「――というのはもちろん冗談なんですけれど…  
あはっ！今の冗談信じちゃいましたか？」

「なッ！？」

「…ったく

初対面の奴に対するジョークにしちゃちょっと重すぎだろ  
っーか【お前】そんなキャラクターだったんだな」

「そーですよー？【俺】ってばこんなキャラだったんですよー？」

「…何故だろう名瀬ちゃん

【あいっ】見てるとイライラしてくるんだけど」

「そういう風に振る舞ってるんだろうよ

…ところで、だ

…えーと名前はなんだったか

…まあいーや」

いいのかそれで？

「いろいろと聞きてーことはあるんだが…  
なんであの時の【お前】がこんなトコでボルゾイに  
追いかけて回されてんのが気になるな」

「あー…」

それには深いような深くないようなワケがありまして…」

「なんだそりゃ？」

『謎の美少女』からのメールでも来たのか？」

「え」

「「え？」」

「なんでメールのことを…」

え？てゆーか『謎の美少女』って何ですか？」

「私のところに『キュートでプリティーな美少女』って奴からメー  
ルが来たんだよ

【あんた】は違うの？」

…………… たぶん袖ちゃんだな

まさか袖ちゃん【俺】とこの二人を引き合わせるために……………？

「…………… どうした？」

なんともいえないような表情になってんぞ」

「…………… 気にしないでください

【俺】のメールは友人からのものですから古賀先輩のメールとは無関係ですよ」

「じゃあ【あんた】がここにいるのはあくまで偶然なんだね？」

「ええまあそうですね……」

「ならその犬と【お前】は無関係なんだな？」

「???」

はい、それで――」

そこまで言っただけだった

『この二人』がここに来た理由、そして『今の質問』まさかこの二人……

「じゃあその子、こっちに引き渡してくれない？  
実は私たちその子に用事があるんだよね」

「――ツツワケだ」

やっぱりそう来たか  
当のボルゾイは【俺】の後ろで小さくなっている  
……いつの間に？

「……わかりました」

「じゃあそういうことで決まりね  
さあ私と一緒にいこう？  
仲間もたくさんいるよー？」

古賀先輩が笑顔でボルゾイに近寄ってくる

顔はにこやかだが雰囲気は怖い

ボルゾイは震えながら【俺】に助けを求めてきている

まったく、さっきまで【俺】を追いかけて回してたのに調子のいい奴だな……

「怯えなくていいんだよー？」

怖いことはなーんにもしないから――」

「だがその調子のよさ……」

「……」

危ない！古賀ちゃん！」

「え？」

「嫌いじゃあないぜツツ！！」

力一杯の蹴りを繰り出す！

……が、もちろん空振り

「……なんのつもりだ？」

その犬は【お前】と無関係なんじゃなかったのか？」

「ええ、『俺』とは『無関係に等しいですよ

でもそいつには先約があるもんで連れていかせるわけにはいかないんですよ」

「何よそれー！さっきと話が違っじゃない！

大体いきなり女の子を蹴り飛ばそうとするなんて――」

「あー、なんだ先約がいたのか  
なら仕方ねえ潔く諦めるぜ」

「え？ いいの名瀬ちゃん？」

「さっすが名瀬先輩！話が早くて助かりますよ」

「その代わりに【お前】を拉致らせてもらうことにする」

「……いゃん」

やたらすんなり諦めてくれたと思ったら……

転んでもタダでは起きないというかなんというか

「何言ってるの名瀬ちゃん！

【あんな奴】連れてたってどうしようもないよ！」

【あんな奴】………

「………… 古賀ちゃんは知らねーだろうけど

【あいつ】と俺はちよつとした因縁があるんだよ」

「い、因縁？

ってどんな？」

「詳しくはあとで話す

とりあえず今は【あいつ】捕まえてくんねーか？」

「むう………わかった

私も名瀬ちゃんに無理言っついてきてもらったんだもん  
お返ししなきゃだしね」

あつ、古賀先輩戦闘態勢に入った

「さてさて……

地上戦最強の改造人間にどこまでついていけるかな」【俺】  
「

第16箱「……いゃん」（後書き）

この小説で初めてまともな戦闘に入るかもしれません。

第17箱「言わずもがな…」（前書き）

古賀先輩のキャラが若干ブレ気味かも？

ブレブレブレブレ

## 第17箱「言わずもがな…」

——前回のあらすじ——

『いやん』

以上。

——中庭——

「気をつけるよ古賀ちゃん！」

【そいつ】は俺たちのことを知ってる風だ  
なんの策も用意せずに向かってくるはずがねえ！」

べつに策なんてないんだけどなあゝ  
どこかの策士…

いや、『策師』じゃあるまいし

「大丈夫だよ名瀬ちゃん！」

どんな策だろうと正面から粉碎してあげるんだから！  
もちろんライダーキックで！」

「ライダーキックですか……」

どうでもいいことですけど【俺】はアギトが一番好きです」

「聞いてないよッ！」

「！！！！」

あんな離れた場所から一気に……！！

「うお………ツツ危ねー！」

ギリギリかわせた……

目測でも4、5mは離れたのに……どんな脚力だよ

「威勢のいいこと言っただわりには随分余裕がないんじゃない？」

「……今のは不意をつかれたからですよ」

そろそろあのスキルたちの出番かな……

「『不意をつかれた』って……そんなの言い訳にもならないよ？」

「なら試しにかかってきてくださいよ

今度は目を瞑っていても避けてみせますよ？」

「（カチン）」

………ふーん、そんなこと言っちゃうんだ  
手加減するつもりだったけどやめた！！  
もうギッタギタにしてやるんだから！！」

「………あり？もしかして怒らせちゃいました？」

何がスイッチで怒りだしたんだ？

「不意をつかれるのが嫌なら今度は予告してあげる！

どこかのスタンド使いやゴム人間もビックリの拳のラッシュ！  
避けられるもんなら避けてみてよね！」

言い終わるや否やまた一氣に間合いをつめてくる古賀先輩だが今度は慌てない

「ダリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤ  
リヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤ  
リヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤ  
リヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤリヤ」

「あはははははははははは！  
どうしたんですか古賀先輩？  
全然当たりませんよ？」

# 《生氣者》

このスキルがあればいちいち目で見て判断：反応する必要すらない  
体が勝手に危険を察知し、避ける

「嘘……ホントに一発も当たらない……  
かすりもしないなんて……」

「どうしたんですか？もう終わりましたか？」

「！〜」

「落ちて古賀ちゃん！  
攻撃が当たらないからってイライラするな！  
まんま相手のペースだぜ！」

「名瀬ちゃん……」

それはわかってるけど……ホントに何発打ち込んでも当たらないんだもん」

「無理に『当てようとしなくていい』んだよ

相手に『避けさせない』

相手が『避けられない』攻撃をすればいいんだ」

「？」

それってどういう——

……

あッ！そういうことね！なるほどなるほど」

「……作戦会議は終わりましたか？」

「にははは！

うん、もう終わったよー」

「？」

「どうやら【あんた】に何発パンチを繰り出しても無駄みたいだからさあ……」

標的を変えることにしたッ！」

言い終わらないうちに上空高くジャンプする古賀先輩  
ライダーキックでもかますのか？

「だからアゝどんな攻撃しようと【俺】には当たらないって——」

……ん？

今、古賀先輩『標的を変える』って言ったか？  
『標的を変える』って……  
今この場には【俺】しか――

「！！！！」

しまった！そういうことか！」

「にはははは！

今さら気付いても遅いよ！」

あの二人、標的を『【俺】』じゃなく『ボルゾイ』の方に換えやがった！

そっぴやあのボルゾイどこ行っただんだ！？

「クーン……クーン……」

あんなトコで縮こまってやがる！

「クソツ！間に合え！」

ボルゾイに向かって走りだす

「（やっぱりな…」

何でかは知らねーが【お前】はボルゾイを守りたいらしい  
ボルゾイを狙えば【お前】が守りにくうと思つてたぜ」

「にははは！

名瀬ちゃんの作戦は世界――イイイイイ――！」

「させるかアアア――！」

直後、耳障りな鈍い音が両腕から響いた

「グウツツ……!!」

「!!?」

「キャインキャイン!!」

危険を察知したのかボルゾイは逃げ出した  
つたく…逃げるの遅エっつの

「あちゃーやっちまったなー

今の音は完全に骨がいつちまった音だぜ」

言われなくてもわかってます

「…【あんた】馬鹿じゃないの？

べつに盾にならなくてもボルゾイを抱えて回避すればいいだけの  
話じゃん…

受けるにしてももっとうまいやり方が――」

「なんですか？心配してくれてるんですか？

優しいんですね古賀先輩……

惚れちゃいますよ？」

「なっ!？」

し、心配なんかしてないッ!」

動揺なんかしちゃって

古賀先輩ったらかわいいんだからもう

「また【そいつ】のペースに巻き込まれてるぜ古賀ちゃん」

「はっ！？危ない危ない……」

遠巻きに見ていた名瀬先輩が近寄ってくる

「どうしたんですか？名瀬先輩？

近寄ってきたってことはまさか勝利を確信しちゃってたりなんかしてます？」

「いやいや確信はしてねーが確実ではあるだろ

【お前】、今両腕の骨が折れてんだぞ？」

「……わかってませんね名瀬先輩

両腕の骨が折れてる『だけ』ですよ」

「強がってんじゃねーよ

少年ジャンプじゃあるまいし、

『骨が折れても気合いで勝利』なんて展開には間違ってもならねーぞ」

「……すみません

言葉が足りませんでしたね

【俺】『一人』の両腕が折れただけですよ」

「……………あ？」

「何言ってるの【あんた】？」

「……ほら、お前ら

いや、【俺たち】……

お二方に自己紹介しなきゃ」

「だからア！

【あんた】さっきから何ワケわかんないこと――」

「ギヤーギヤーうるせえ女だなア

ちったあ黙って人の話を聞けねーかよ」

「……？

（……二人に、増えた？）」

「な、何？やっぱり双子？

え？てゆーか今どこから――」

「口が悪いですよ【俺様】

相手は『仮にも』先輩なのですから」

「（今度は三人……！）」

「み、三つ子……？」

「そーゆー【ワタクシ】も『仮にも』の部分を経らく強調しとるや  
ないか

ケラケラケラケラケラッ」

「……………」

「よ、四つgg――」



ヨロシクな先輩方、【俺様】は【俺様】ってんだ

仲良くしてね」

「遅ればせながら……」

【ワタクシ】は【ワタクシ】と申します

仲良くしてね」

「え、え」と……

ぼ、【僕】が――」

「ハイハイ……」

ほんでもって太陽のように明るく朗らかな【オイラ】が  
【オイラ】いいますー！！

仲良くしてね」

「うう……まだ【僕】が喋ってたのに……」

あ、あの……それで【僕】が【僕】っていいます

仲良くしてね」

「……………そして言わずもがな

この【俺】が■■■■です

仲良くしてね」

第17箱「言わずもがな…」（後書き）

突如現れた四人の男！

果たして正体は！？

（たぶんみなさんお気づきでしょうけど）

第18箱「しますよそりゃあ！」（前書き）

今回ちょい長めです。

話の運び方が変になっちゃってるかも。

古賀＆名瀬VS主人公編決着？です。

第18箱「しますよそりゃあ！」

「……にしても、だ」

「……！」

いだだだだだ……！」

ちよつ、何いきなり腕つかんでんだよ【俺様（お前）】！！  
見てわかんねーのか！？折れてんだぞ……！」

「ケツ！」

あんな女の蹴り一発で骨折たあ……情けねえ限りじゃねえかよ  
なあ？【僕（お前）】もそう思うだろ【僕】？」

「ぼ、【僕】に振らないでよオ」

「おやめなさい【俺様】、【僕】が困っているでしょう」

「へいへい」

「う、うう……ありがとう【ワタクシ】」

「そもそも、いつもウジウジオドオドしている【僕】に話題を振ったところで

まともな返事が返ってくるはずがないのですから話しかけるだけ無駄です」

「う、うえええ……ん……！」

「【ワタクシ（テメー）】のがよっぽどひどーこと言ってるじゃね

えかー!!」

「ケラケラケラケラッ!!」

ほんまに【ワタクシ】はドSやなあ〜

でもあんまし【僕】いじめたらアカンで

【僕】は一度泣きはじめてたらなかなか泣き止まへんのやから  
ケラケラケラケラッ!!」

「そう思うのならケラケラ笑ってないで少しは【僕（彼）】を慰めては？」

【オイラ（あなた）】の『馬鹿みたいな』明るさがあればすぐに泣き止むでしょ」

「まゝた『馬鹿みたいな』を強調してしゃべる〜

ほんまに人の神経を逆撫ですんのが好っきやな【ワタクシ（自分）】」

「【オイラ（あなた）】にはまったく通用しないようですがね……  
チッ」

ギャーギャーワーワー

「……………なんてゆーか」

「一気に賑々しくなったな……………」

「ちょっと【あんた達】……いつまでじゃれあってんの!!」

ギャーギャーワーワー

「……聞いちゃいねーな」

さて、標的が増えちまったところでどうする古賀ちゃん？  
やっぱ『五つ』も運ぶのは骨が折れるか？」

「名瀬ちゃん…私の験体名忘れちゃったの？」

「？」

『骨折り指切り』だろ？

それがどうしたって——」

「験体名に入ってるくらいなんだよ？多少の『骨折り損』なんて朝飯前だよ！」

「……いろいろツツコミたいところはあるが

とりあえず『骨折り損』の使い方間違ってるぜ古賀ちゃん」

---

数分後

---

「ストップ、ストップ！

いい加減にしろ！

マジで収拾つかないから！

とりあえず今は目の前の敵に集中すること！いいな？」

「ハイ」× 4

「……終わったか？」

「あ、名瀬先輩

「お待たせしました」

「あらためて聞くけど【その子達】は誰なの？  
見た目がそっくりだけど五つ子かなにか？  
てゆーかどっから湧いて出てきたのよその4人は」

「質問の多いやつちゃな」

「まあ何の前触れもなく突然増えたのですから  
疑問に思うのも無理はありませんが」

「え、えーとですね…」

【僕達】はなんなのかっていうと――」

「いちいち説明なんざする必要はねーんだよ【僕】！！  
【俺様達】を呼び出したってことはアレだろ？  
ピンチだったから呼んだってことだろ？【俺】」

「まあピンチなことには変わりないけど…  
……そうですね、待っててくれたお礼に【こいつら】のことを  
ざっくりですが説明します」

「あア？おいおいマジかよ【俺】  
ンなことする必要ねーだろ！」

「まあまあ落ち着きーや【俺様】  
楽しみはあとにとつといた方がええやろ？」

「……………わーったよ、サッサと終わらせろよ」

「んじゃあらためて……」

【こいつらは言うなれば【俺】の分身ですよ」

「……分身だア？」

「分身って……そんな漫画じゃあるまいし——」

「ところが実際に目の前にその漫画みたいな現象が起きちゃってるんですよ」

「……ますます【お前】を拉致りたくなってきたぜ」

「ふ、ふん！【あんた達】程度の奴が何人に増えても関係ないもんね！

一人はもう戦闘不能なんだ！あと四人を確実に仕留めれば——」

「一人はすでに戦闘不能……？」

「はて？彼女は一体誰のことを言っておられるのですか？」

「さあ？もしかして……【僕】？」

「【オイラ】やないとは思うけどー？」

「【俺様】なワケがねえ」

「【俺】でもないな」

「な、何言ってるのよ！

【あんた】よ【あんた】！

両腕が明後日の方向にひん曲がっちゃってる【あんた】！

「そんな腕で闘えるワケがないでしょ!？」

「さっき自分でもピンチだったってただろ」

「ああ！」

それはこの腕で古賀先輩を相手にするのは難しいと思ったからで別に戦闘不能になったからピンチって言ったワケじゃありませんよ……脚はまだ無傷ですしね」

「……………ッ!！」

どっちにしろそんな腕じゃまともに――」

「【ワタクシ】、【オイラ】、やってくれ」

「わかりました

【ワタクシ】が左腕をやりますから【オイラ】はそっちを」

「ホイホイ、うわちゃ〜これまたえげつないことになったんな」

「？」

「お、おい【お前ら】何を――」

ゴギン

ボギン

「!――」

「う、嘘……折れた腕を無理矢理元に……!」

「……………あの人達何をあんなに驚いてるの?」

「【俺様】に聞くな」

「何を驚いてるって……！」

両腕が折れてんのよ！？

それを無理矢理元に戻すなんてそんなの――」

だろ」

でしょう」

「『普通』だよ」

ですよ」

やろ」

「ふ、普通って……！」

「よく言うじゃないですか

『突き指したら引っ張ればOK』だって

それと同じですよ」

「……突き指と骨折じゃ症状が違うし、そもそもその治療法は迷信だぜ

突き指した時は患部を冷やすのが適切な処置だ」

「へーそーなのかー」

「おい、その態度は先輩方に失礼だろ【俺様】」

「あーうるせーうるせー！

なあもついいだろうが！さっさと暴れさせろってーの！」

「これだから単細胞バカは…」

「なんか言ったか【ワタクシ】」

「いえ、なにも」

「さてと、それじゃそろそろ再開しましょうか古賀先輩  
どっかの単細胞バカがウズウズしっ放しみたいですからね」

「五人対一人……古賀ちゃんが仮面ライダーなら  
さしずめ【お前ら】は戦隊ヒーローってか？  
なかなかウィットに富んだジョークじゃねーか」

「でしょ？」

そういう意味も込めて【こいつら】を呼んだんです」

「えっ！？」× 4

「？」

どうした【お前ら】」

「そ、そんなくだらない理由で【ワタクシ達】を……？」

「呆れてものも言えへん……」

「あはははは！  
まあまあいいじゃないの  
ほら、さっさとやるよ」

「もうすでに一人で突っ走っとるのがおるで」

「え？」

「だーはっはっはっはっは！  
やっとなぐられるぞゴルァ！」

見てみると【俺様】が古賀先輩に向かって突進していた  
猪か【俺様<sup>あいつ</sup>】は

「ダラアッ！ドラアッ！デヤアッ！ウリヤアッ！シャアッ！」

掛け声は威勢がいいけど……

「へーんだ 一発一発が大振りすぎ！全然当たらないよーだ！」

「ウギギギギ……！  
ちょこまかしてんじゃねー！」

「……完全に遊ばれていますね」

「せやな」

「て、手伝わなくていいの？」

「そだな、ほんじゃそろそろ【俺達】もいくか」

その一言を合図に各々が各々のタイミングで戦闘に参加していく  
最初に【俺様】、次に【オイラ】、【ワタクシ】、【俺】といった  
順番だ

【僕】はなんかそこら辺をあたふたしてる

……【僕（お前）】が「手伝わなくていいの？」って言ったんじゃないかった？

「クッ……！」

さすがに四人相手は……」

額に汗が見え始めた古賀先輩

果たしてあの汗は疲労からか？焦りからか？

「そろそろ降参しますか？」

「しない！してたまるか！後輩にナメられっぱなしで終われるワケないでしょ！」

「片意地張つとつたってええことあらへんよ先輩？」

「うるさい！意地なんか張ってない！」

気のせいかな古賀先輩、ヒートアップしてらっしゃる

そんな会話をしてる間ももちろん交戦中だ

気付いたら【僕】からかなり離れてしまっている

どうやら戦闘に参加するかしらないか迷った結果、参加しないことにしてみたいだ

…弱虫なくせにこういう時は神経図太いんだよな【僕<sup>あいつ</sup>】

「……………」

名瀬先輩は沈黙……

かと思いきや突然口を開いた

「かーっ！古賀ちゃんも性格悪いなまったく  
ピンチのフリして敵の意表をつく！

いやはや、戦闘においてはセオリー中のセオリーだろうけどよぉ…  
おおよそいたいけな【後輩】にとる戦法じゃあねーぜ」

……は？

いきなり何を――

「（ニヤリ）

もう駄目だよ名瀬ちゃん！

せっかく演技してたのに――

バレたら元も子もないんだ………よっ！――！」

瞬間、大跳躍で【俺達】から遠ざかる古賀先は……

………いや違う――！

【俺達】から遠ざかったんじゃない――！

確かあっちには！

「にやははは

ほら、私ってばマメな性格だからさ――

夏休みの宿題とかも最後の日に一気にやるんじゃないく

毎日コツコツやる派なんだよね

だ・か・ら！

まずは潰せる奴から潰す！

それが闘いのセオリーってモンでしょ――！

「アカン！あっちには【僕】が一人や！」

「ハンッ！

今さら気付いたって遅いぜ！

【お前ら】の足じゃ古賀ちゃんには追い付け――」

「何を呑気なことを言ってるんですか先輩！」

「……何？」

「【ワタクシ達】が心配しているのは【僕】ではなく古賀先輩の方です！」

「………どういうことだ？」

あの【オドオドしてる奴】がそんなにヤベーってのか？」

「ヤバいのは【僕】じゃなくて【俺様】です！

特にイラついてる時はとんでもないですよ！」

「ああ？」

【俺様】ってのはいの一番に古賀ちゃんに向かってきた【野郎】だろ？」

そいつなら今ここに――」

と、名瀬先輩が【俺様】を指差す

それとほぼ同時に

「【ばああおく】――！今！すぐに！【俺様】と『代われ』えええええ！――！――！」

【俺様】の怒号が轟く

「『代われ』？」

代われっとういう——」

「び、びっくりした」

いきなり【俺様】ってば怒鳴るってくるんだもん  
心臓止まるかと思ったよ」

「！？

なんだ？急に怒鳴ったかと思ったら今度は雰囲気……」

「遅かった……！

とりあえず名瀬先輩もついてきてください！走りながら説明しま  
す！

【ワタクシ】！」

「わかっていきます！」

【ワタクシ】が名瀬先輩をお姫さま抱っこする

——数分前・【僕】の場所——

「あゝあ、【みんな】もう見えないとこまで行っちゃった」

手伝わなくていいの？って自分から言っではみたものの……

【僕】なんかが役にたてるとは思えないしな……

「どうしよう……木陰で昼寝でもしようかな？

でもそんなことしたら後で【みんな】になんて言われるか……」

やっぱり【僕】も【みんな】のところに……あれ？  
誰かこっちに来る……？  
あれは………

「にやははは  
みーつけた！

まずは一番弱そな【あんた】から撃破だよ！」

「う、うわわわああ〜〜！！」

こ、古賀先輩だ！ど、どうしよう！？どうしよう！？どうしたら！？

【ばおおく】！！今！すぐに！【俺様】と『代われ』ええええ  
！！！！

「ヒヤアアアア！？」

お、【俺様】？

か、『代われ』って……でも……」

「はい！まず一人目え！！」

「うわわあ！！」

拳が目の前に迫ってくる！！  
ええい！もう、どうにでもなれえ〜！！

バシッ！

「!？」

（止められた!？）

「やっと捕まえたぜ……」

（ニ、イイイイ）」

---

回想終わり

---

「……で？どういふことなんだ？」

まずは、なんで【お前ら】がそんなに焦っているのかを教える」

【ワタクシ】にお姫さま抱っこされながら名瀬先輩が問い掛けてくる

「問題は古賀先輩が【俺達】に『向かってきた』ことです」

「向かってきたことが問題？」

「なんだそりゃ？普通敵がいたら立ち向かうだろ」

「そうさせないために【オイラ達】は五人おるんや」

「普通五人から一斉に向かってこられたら逃げるか、

もしくは攻撃を避けることで精一杯になるでしょうからね」

「もし敵が『五人の誰かに向かってきたら別の一人が迎撃、その攻

撃を阻止』

それを繰り返して敵の体力を削り、降参させるのが【僕達】のやり方なんです

……ど、怒鳴られた拍子にびっくりしてつい代わっちゃったけど」

「それだよ

『代わった』ってのはどういうことなんだ？

【お前】さっきまで鬼のような形相で古賀ちゃんに向かってたじやねーか

全部かわされてたが」

「そ、それは【俺様】ですよ

【僕】は【僕】です……」

「……………え」と

「…………それは【ワタクシ】から説明します」

ため息をつきながら【ワタクシ】が説明を始める

「先程も言いましたが【ワタクシ達四人】は【俺（彼）】の分身です  
一人一人は特に大した力は持つてはいませんが  
ですが少々特殊な技術を備えていましてね」

「特殊な技術？」

「『意識の交換』です」

「意識の…………交換？」

「【ワタクシ達】は見ての通り外見がまったく一緒です  
外見だけじゃない

視力、聴力、体調、その他もろもろが寸分変わらず同じなのです  
性格と喋り方を除いてね」

「そりや分身だったら普通だろ  
むしろ分身なのに性格と喋り方がバラバラなのがおかしいんじゃないか？」

「……………」

「ケラケラケラケラッ  
ツッコまれてやんの」

「（ギロツ）」

「サーセン」

「……………とにかく！」

【ワタクシ達】はどれだけ離れていようとお互いの意識を交換でき  
るんです！

容器の中身を別の容器の中身と取り替えるような  
そんなイメージが一番わかりやすいでしょうかね」

……………そう

お互いの意識を交換し、まるで別人に『代わる』  
そこにいると思わせて実はいない  
故に、『誤認識』の『五人式』  
クインデット

…………五人の意識を交換なんて芸当

どこの殺し名序列第一位にでも入れそうだな

「なるほどな……」

だからさっきまで暴れ回ってた【お前】が  
急に借りてきた猫みたいにおとなしくなったのか  
これで合点がいったぜ

……でもまだわからねーことがある  
いや、根本的なところがわかってねー  
なぜ【お前ら】はそこまで焦るんだ？」

「……【俺達】の闘い方の説明はしましたよね？」

「ああ、敵に『立ち向かわせない』んだろ？」

「そうや

せやけど【オイラ達】の中で一人だけごつつ好戦的なメンバーが  
おる

いや、あれはもう戦闘狂言つてもおかしないで」

「……………それが【俺様】です」

「あの【猪突猛進野郎】か…………」

「そもそも『立ち向かわせない』ってやり方は…………」

【俺様】の相手への攻撃を抑えるために編み出したんです

【俺様】自身はめったに攻撃を当てられません

攻撃のほとんどがさっきみたいな大振りばつかですからね  
だから【俺様】から向かっていく分には別に構わないんです」

「……………だがもし

『メンバーの一人が離れた場所にいて』、

『その一人を敵が狙った場合』は、

『意識の交換によって入れ代わりが行われ』、

『立ち向かせないやり方は無効果しちまう』……………ってことが

……………ハンツ！

俺も敵のパラメータを無効果する策はいくつか知らねーでもねー

がよー

『味方』を無力化させる闘い方なんざ聞いたことねーぜ」

「そうでしょうね」

「でもよー、それならなんで【こいつ】が離れた時に

そこに気を付けなかったんだ？

まさか気を付けなかったんじゃないやなくて気が付かなかったとか言う  
なよ」

「言いませんよ

それは、まさか古賀先輩がピンチの演技をしてるなんて思わなくて  
本当にすぐに降参してくれそうな雰囲気だったから……………

降参まではしなくとも逃走ぐらいはしてくれるかと……………

まんまと騙されちゃいました」

「……………つまり古賀ちゃんは、勝つためにやった演技で負ける羽目にな  
るってことか」

「負けるだけならまだいいんですがね……………」

そんなこんなでやっとなさっきの場所に到着



「……………」

「…おい」

「……………」

「（ブチッ）」

あーハイハイ

そーかそーですか

名瀬先輩も一緒にブチ殺されたいんですねわかります！！！！」

「……………」やり過ぎだ「……………」

【俺様以外の四人】で【俺様】を羽交い締めにする

「！？」

【テメーら】…何してんだ？」

「それはこちらのセリフです

何をやっているんですか【俺様<sup>あなた</sup>】は？」

「さすがの【オイラ】もこれはちょっと笑われへんよ」

「い、いくらなんでもひどい」

「勝手に暴走してんじゃねーよバカタレ」

「……放せ

……おい、聞こえねーのか！  
放せて言つて——！！」

バギン

ベギン

ゴギン

ボギン

「ガアアアアツツ！！？」

う、腕がア！脚がアアア！！」

「頭、冷やしとけ

……あの、すみません名瀬先輩  
古賀先輩がそんな風になったのは【俺様】の……  
いや、【俺】の責任です」

暴れる【俺様】をあとの【三人】に任せて

【俺】は名瀬先輩と古賀先輩の下に歩み寄る

「謝るな

……謝つて済む問題じゃねー」

「……名瀬先輩」

怒ってる…

これ以上ないくらいに

そりゃそうだ

大事な大事な友人がボロ雑巾みたいにさせられちまったんだ  
怒らない方がどうかしてる

「本当にすみません名瀬先輩

【俺】にできることならなんでもします」

「……本当か？

本当になんでもするんだな？  
なら、おとなしく拉致られる  
もちろん嫌とは言わせねー」

「うぐ!?!」

やはりそうきたか  
でもここまでやっちゃったからには何らかの責任は果たさなきゃな  
らないし……

「……………わかりました

【俺】も男ですから覚悟を決めます」

「やったね名瀬ちゃん  
験体が増えるよ」

「おいやめろ……………って  
え?…………あれ!?!古賀先輩!?!あれ!?!ケガは!?!」

「ん？」

にやははは

あの程度のケガ、よーん十秒もあれば完治できるよん」

「んなあつ！？」

そ、そういや古賀先輩って複雑骨折程度なら

十秒で治るぐらいの凄まじい回復力なんだった……

「いやはやハリウッドも真つ青な名演技だったぜ古賀ちゃん

『分身の術』や『意識の交換』なんつー隠し芸にや驚いたが  
なんとか目的は達成だ」

「いやー私もまさか一年坊にあそこまでやられるとは思わなかった  
よ」

め、目眩がしてきた……

いや、でも……

「……………よかったあー」

「え？」

「何がだ？拉致られるのか？」

随分と特殊な性癖をお持ちじゃねーか」

「じゃなくて！！

古賀先輩のケガですよ！

大事にならなくてよかったってことです！！

てか名瀬先輩！

一応女の子なんだから『性癖』とか軽々しく言わない!!」

「お、おう…（一応って…）」

「…………私のケガ、心配してくれたの？」

「しますよそりゃあ!!」

「…………ふーん」

「はあ…なんかドツと疲れましたよ……」

おーい!【お前ら】ー!もう戻っていいぞ!」

【四人】に声を掛ける

【三人】が頷いた後に戻り、残りの【一人】を強制的に戻すと、同時に『五人式』のデメリットを受ける

バギン

ベギン

ゴギン

ボギン

「うおっ!?!」

「な、何?どうしたの?」

「グウツ……………ッッ!!」

はあはあ…………、『分身の術』の…副作用です……」

「副作用？」

「はい

『分身を戻す時、分身が負っている傷や病気はすべて本体に還元される』

それが『分身の術』の副作用なんです

さつき【俺様<sup>あいつ</sup>】を止める時に両手両足をへし折りましたからね

それが還元されて…、【俺】は今合計六ヶ所骨折していることになります」

「……使い勝手の悪い術」

「はははは……」

それじゃあ【俺】はこれで失礼します……」

「待てコラ」

「あぎゃあー!!」

お、折れた腕を掴まれた……

「今折れてるって言ったばかりなのに……」

「なに当たり前のように立ち去ろうとしてんだよ  
俺に拉致られる約束だろうが」

『拉致られる約束』って……

そこだけ聞いたらすごいインパクトあるな……

「いや、でもそれは、アレですよ、アレ

古賀先輩に取り返しのないことをしたお詫びとして  
結んだ約束であつてですね……」

「その言い方やめて  
変な誤解生むから」

「あ、すいません」

古賀先輩に真顔で注意された

「ほー、そーか……」

【お前】はアレか、『約束は破るためにある』とか  
そんなことを言っちゃうような連中<sup>ワルモノ</sup>つてことか」

「う」

「そもそも【お前】覚悟を決めたつて言つてたよな？  
男の覚悟つてのはそんな安上がりなもんなのか？」

「……………」

「古賀ちゃんとはしかに今はこうしてピンピンしちゃいるが  
一度ボロボロにしちまったことは事実だろーが  
違うか？」

「……………」

「乙女の柔肌をあれだけ傷つけておいて……  
今さら『約束はなかったことに』なんて、そんな虫のいい話が――」

」

『生気者』発動！！！

「あ、逃げた」

「あ、待ちやがれコラ！！

クソッ！脚、折れてるんじゃないのかよ【あいつ】！

古賀ちゃん！ケガが治りたてで悪いが追ってくれねーか！？」

「……………やめとく」

「ど、どうした？

やっぱりまだどっか完全に治りきってねーとか？」

「違うよ

ケガはもう大丈夫」

「じゃあなんで…………？」

「んー…………なんていうか…………

疲れちゃった」

「……………」

そっか

疲れちゃったならしょーがねー

帰るか」

「うん 帰る 帰る

あ、ゴメンね名瀬ちゃん

今日はこんな面倒ごとに付き合わせちゃって」

「いーってことよ

ボルゾイは手に入れられなかったが……

代わりに【面白い奴】に会えたからな

メールをくれた『謎の美少女』様様だぜ」

「そういえばあの『謎の美少女』って一体誰なんだろうねー？」

そんな雑談を交わしながら

『十三組の十三人』、名瀬天歌と古賀いたみはその場をあとにした

まさかそんな出来事があつたなどとは知る由もない生徒会はそのあと、きつちりボルゾイを捕獲致しましたとさ

第18箱「しますよそりゃあ！」（後書き）

どうでしたか？

不自然じゃありませんでした？

名瀬の古賀に対するしゃべり方とか感情の起伏とかには気を付けたつもりです。

## 第19箱「……関係ないか」（前書き）

繋ぎ回でありフラグ回です。会話の運びが早いです。不自然に感じるかもです。

あと、めだかボックスのキャラ達は共通して九州地方に存在する『市の名前』があてがわれていますけど……

この作品の主人公の名前は『市の名前』から取ってはいません。もっと小さい区分です。

なんか『市の名前』ってルールよりも『かつこよさ』を優先しちゃいました。

でも『九州地方の地名』には違いなからギリギリセーフだよね？

第19箱「……関係ないか」

食堂

ズズズズズズ…

昼休みの食堂は本当ににぎやかだ  
食堂に来るたびにそんなことを思う

「えーっと

昨日ボクシング部行ったから…格闘技系はこれでコンプリートか  
じゃあお次は趣向を変えて格闘球技攻めてみっかなー」

ズズズズズズ…

「……お前どうしてそんなあちこちで暴れてんだ？  
そんなスポーツ好きだったっけか？」

ズズズズズズ…

「別に

ただ俺の中のルールでな  
一日五リットルの汗をかくって決めてんだ  
お、ラクロス部あるじゃん」

「……脱水症状起こすよ善吉っちゃん」

「その分ちゃんと補給してるからいんだよ」

今【俺】は善吉っちゃん、日向くん、袖ちゃんの四人で食堂に来ている

何げに日向くんとはこれが初対面だから気まずい

ズズ… チュルンッ

「ぶっはあああああ

あーわかるわかる

あたしも一日五リットルのラーメンを飲むって決めてるし似たようなもんだよね♪」

「不知火

ラーメンはドリンクじゃない」

「『カレーは飲み物』以来の衝撃発言だね」

「シーザーサラダって野菜ジュースだと思っただよねー♪」

「ま、それくらいしないとあの黒神<sup>バケモン</sup>には付き合いきれないってのはわかるけど……もうやめといた方がいいかもな」

日向くんのスルースキルばねえ

「お前噂になってるぜ

生徒会の『部活荒らし』だとよ入る気もないクセにつて」

「（じーっ）」

なにお前

俺のこと心配してんの？」

「バツ！？」

お前の心配じゃねーよ！！」

…しかしこの男、ツンデレである

「いーんだよ

こちらら最初から名前を売るつもりでやってるんだから  
っ！か、お前なに仲間みたいな顔して一緒に飯食ってんだよ」

さらっとキツイこと言う善吉っちゃん

「……………」ごちそうさまでした」

「あ？

なんだもう食っちまったのか？ 随分早いな」

「ああうん…

ちよつと野暮用があるからさ  
悪いけど【俺】もう行くね」

「お、おう」

サッサと食器を片付けて食堂を去る

「……………」なんかよオ

【あいつ】って思ったより暗い奴なのな  
お前と不知火とでつるんでるのをたまに見かけてたから  
もっと印象深い奴かと思ってたんだがよ」

「いやまあいつもはもうちょつと生き生きとしてはいるんだけどな…  
今日は特に元気がねーみたいだったな  
日向、お前がいたからじゃねーか？」

「俺のせいだよ」

「人見知りなんだよ、たぶん」

「ふーん」

「あたしには『先輩達とケンカしちゃって気まずい』って感じに見えたなー」

「？」

「なんか知ってんのか不知火？」

「いやいや」

「あたしはなんも知らないよ？」

「にやりん」と微笑む不知火

「その顔はなんか知ってるって顔だぜ不知火  
教えるよ」

不知火の肩を掴もうと手を伸ばす善吉  
……だが

バシッ

その手を払う不知火

「『教えるよ』？」

「教えてください…だろ？」

「教えてください」

「よろしい

って言いたいところなんだけど

あたしは本当になんにも知らないんだよねこれが（棒）」

「嘘だっ！！」

「……………とりあえずお前らの仲が良すぎて気持ち悪い」

---

中庭

---

ただいま人目につかなそうな所で会議中…

「だからアー！」

「反省してるって！」

「してるだけではダメなのです

それを次に結びつけなくては何の意味もないのですよ？」

「相手が古賀先輩やったからよかったものの…

他の先輩方やったらアウト必至やったで」

「そ、そんなに【俺様】ばかり責めないであげてよ…

そ、そもそもあの時【僕】が代わったりしなければよかったんだし……」

「庇う必要はないぞ【僕】」

【俺様<sup>こいつ</sup>】が暴走せずに抑えていればああならなかったんだからな」

「だってよー！」

あんだだけやって一発も当たんねーんだぜ？

ブチ切れもするだろ！」

「【俺様】のパンチなんて何発も食らってられへんで

骨が何本あったかて足りひん

最悪ミンチやな ケラケラ」

「どこに笑うポイントがあつたのかはわからないけど……  
次からは気をつけるようにな【俺様】」

「善処はする」

「よし！この話はこれで終わり！  
いつまでも引きずってたって仕方がないからな」

「そやそや、悩んでる暇があつたら青春を謳歌した方がええで  
部活にいそしんだりとかな」

もっと具体的に言うなら柔道部とかがオススメやな」

「……やけに柔道部をプッシュしてくるな【オイラ（お前）】」

「え？【オイラ】？」

何も言つて入んで?」

「は?

……じゃあ今のは?」

「こつちや、こつちこつち」

「ん?」×5

振り返るとそこには『柔道界の反則王』こと

「鍋島先輩……でしたか」

鍋島猫美先輩が立っていた

「ん?ウチのこと知つとんの?」

「そりや知つてますとも  
チームトクタイ  
特待生で

柔道界の反則王とも呼ばれるあなたを知らない奴なんていませんよ  
いたとしたらそいつはモグリですね」

「ククッ

それは誉めすぎやってジブン」

反則王なんて言われてるのにそれを誉め言葉として受けとめるとは…

「で、その反則王（鍋島先輩）がどうしてこんな場所に?」

「いやな?」

たまたまこの近くを歩いたら随分と親近感のわくしゃべり方が聞こえてきたもんやから気になってちよつとな

「『親近感のわくしゃべり方』って…」

「もしかして【オイラ】のことやったりします?」「そうそう!ジブンやジブン!」

「『しゃべり方が気になったからちよつと立ち寄ってみた』って…そんなに珍しいですか?」

「少なくともウチが知つとる中で

関西弁しゃべつとる生徒はこの学園にはおらんな」

たしかに『めだかボックス』で鍋島先輩以外に関西弁キャラっていなかったな

「んで、声のする方に来てみたらこんなところで五つ子ちゃんが――  
――」

「じゃねーよ」

「ではありません」

「五つ子じゃないよ」

「ちゃうわ」

「じゃないです」

「な、なんや急に…」コワイ顔して声まで揃えて…  
「ウチなんか気に障るようなこと言つてもうた?」

「あ、す、すみません」

気にしないでください」

「？」

……『五つ子』

『兄弟』や『双子』とかの単語を聞くと嫌でも「あいつ」の顔が浮かぶ……

今頃どこで何をしているのやら

「……関係ないか」

「ん？」

なんか言った？」

「いえいえ独り言ですよ」

「ふん、あつそ」

見事に興味なしっすね

「まあそれは置いて……や

(じい~~~~~)」

「な、何？」×5

「ふむふむ、なるほどな……

なかなかどうして……」

【俺達】をまんべんなく隅々まで見る鍋島先輩

「なあ【キミら】

さっきの話、ちょっと本気にしてみいひん？」

「さっきの話？」

「青春を謳歌するために柔道部に入るー！！  
っちゅう話のことや」

「か、勧誘ですか」

「まあぶっちゃけそうなるな」

「でも【俺達】スポーツとかはあんまり得意な方じゃ……」

「いやいや、そんなことない！  
ウチが見たところ【キミら】には才能がある！  
これはもう運命や！【キミら】は柔道部に入るべきやつて！」

「そ、そうですかね？」

「ああ！間違いない！ウチが保障する！  
今すぐ柔道部に入りい！さあ今すぐに！」

「ちよちよ……！」

さすがに今すぐは……ちょっと

「そうか？」

……：そうやな、ほんなら【キミら】の気が向いた時に柔道部に見  
学に来てや

その時に柔道部の雰囲気や練習風景なんかを見て……

あつ！体験入部も大歓迎やからヨロシク」

「は、はあ……」

すごいな…この人…  
いろんな意味で

「ならそういうことで！柔道場で会えるのを楽しみにしてるで」

そう言つて鍋島先輩は去つていった

……嵐のような人だったな

「おい、いいのかよ」

「……何が？」

「柔道部に入部の件ですよ」

「ほんまに入る気いなん？」

「んなワケないだろ？」

「……でも見学は行くつもり」

「な、なんでさ？」

入部するつもりがないなら行く必要はないんじゃない？……」

「なに言つてんだ

阿久根高貴と善吉っちゃんの勝負の回があるだろ？」

「あ、そつえば」×4

「見学はその日に合わせて行くつもりだよ」

「ですが…」

「もし本当に入部させられそうになったらどうすんだよ？」

「ああ、それなら心配ないよ

あの人【俺達】を本気で勧誘したワケじゃないから」

「なんでわかんのか？」

「【俺達】を勧誘する時に鍋島先輩、『【キミら】には才能がある  
！』  
って言ってただろ？」

「た、たしかに言ってたけど…」

「あの人『才能がある！』なんて口説き文句を使うと思うか？  
あの人は才能がある天才を嫌っているからこそ、  
その天才に汚く勝つためにこそ、柔道をやってるんだぜ？」

「ああ…なるほど」× 4

「大方、新入生の一年坊に片っ端から声かけてるんだろっさ  
『それで入部してもらったら儲けもん♪』ぐらいの気持ちでね」

【俺】は大きく伸びをしながら考えてみる

善吉っちゃんと阿久根高貴の勝負回は重要なイベントだ

侵攻役が何か仕掛けてこないとも限らない

……まあ何もなくても見に行く価値はある

気付くと【俺】は、期待と不安

そして武者震いと鳥肌と寒気と疲労感を感じていた

「……それは病院行け」× 4

さらに、愛しさと切なさで心強さも……

「いい加減にしろ!!」× 4

第19箱「……関係ないか」（後書き）

ちなみに、

【俺様】：短気。しゃべり方は乱暴だがさつだが不良というワケではない。上から目線で命令されるのは嫌いだが頼まれると断れない。注意は素直に聞く。

【ワタクシ】：ドS。基本的に丁寧な口調でしゃべる。【みんな】をまとめるサブリーダー的なポジション。けっこう根に持つタイプ。

【僕】：気弱。しゃべり出しがほぼ、どもる。一度泣き出すとなかなか止まらない。被害妄想がひどい時がある。猫背気味なのが最近の悩み。

【オイラ】：楽観的。基本的に笑顔が絶えない。笑い方が特徴的だけど、実は意識してやってる（キャラを立てるため）。関西弁と一人称が噛み合っていないのは自覚済み。

っていう設定です。一応。

第20話「微塵も思ってません」（前書き）

善吉と阿久根の勝負の回です。

見なくても物語にはなんら影響しないので飛ばしても大丈夫です。

この回からかなり話を飛び飛びにする予定です。

## 第20話「微塵も思ってません」

「鍋島つて…、特待生チームトクタイの鍋島猫美さんか？

あの有名な？柔道界の反則王と呼ばれたあの人？」

生徒会がいつものように目安箱の投書をチェックしていると、珍しい人物からの投書があった

「あの人今部長だったのかよ

知らなかったな

けど話を聞くかぎり、あんま悩むってタイプにゃ思えねーぞ？」

なにせ『柔道界の反則王』などという仰々しい呼び名だ  
悩んでいる姿をイメージするのは難しい

「まあ何にせよ行ってみようではないか

柔道部といえば懐かしい顔にも会えるだろうしな」

「……………」

（それは知ってたよ

だから俺は柔道部には近寄りたくなかったんだ）」

すでに柔道着に着替えやる気満々なめだかとは裏腹に、  
急に『柔道部に出向く』という事実を突き付けられた善吉は  
ただただ気が重くなる一方だった

「で？」

「なんで【お前】がここに？」

「いやいや奇遇だね！むしろ奇遇としか言いようがないね！

まさか『たまたま』柔道部に見学しに来たら生徒会と合流するとは！」

柔道部への道すがら、生徒会メンバーは主人公と合流した

が、もちろん偶然ではない

来る日も来る日も柔道場の影にひっそりと隠れて生徒会が来るのを待っていたのだ

主人公はイベントが起こる具体的なタイミングを把握していません

「ふむ

【貴様】は柔道部に入るつもりなのか？」

「いえ、あくまで見学です

『どっかの誰かさん』みたく入部する気もないのに体験入部だけを繰り返して

部を引つ掻き回すようなことはしたくありませんから」

「……………」

「ん？

なに善吉っちゃん？

【俺】の顔に何かついてる？」

「……………なんでもねーよ」

「あー！ひよつとして勘違いしてる？

【俺】が善吉っちゃんのことを皮肉ってるとか！

善吉っちゃんのことをバカにしているとか！さ！

うわ恥ずかしいー

自意識過剰ー

どんだけ自己中な考え方してんの善吉っちゃん！

自分のことをそーんな重要人物だと思いながら日々を生きてるんだおもしろーい」

ゴスツ！

「痛い！」

「悪い、手が滑った」

「ぼ…暴力をふるった…

冗談だったのに……………」

「だから謝っただろ」

「いつまで遊んでいるのだ  
着いたぞ」

柔道場に到着した

中から物凄い轟音がする

それだけハードな練習をしているんだろうな

「やーやー、ようこそいらっしやいませ！

ウチが差出人！柔道部部長の鍋島猫美です！

本日はどーぞよろしく！」

道場に入ると鍋島先輩がお出迎えしてくれた  
もちろん【俺】ではなく生徒会をだ

「生徒会長の黒神めだかだ

今日はできる限りのことをさせてもらうぞ」

「うんうん、頼りにしとるで黒神ちゃん！」

がつしと握手を交わす鍋島先輩と会長さん

……の横を我関せずと通りすぎる善吉っちゃん

……のあとについていく【俺】

「いやーウチは部長ゆーても名前だけみたいなもんやったから  
誰に後継がせたらえーんかなんか決めきれんぞなー！」

「……………（意外なキャラだ）」

「なんか意外なキャラだよな  
鍋島先輩って」

「え？」

「いやさ、噂では反則王とか言われてるから  
もっと薄汚いようなオーラを纏ってるかと思ってたんだよ  
でも実際に会ってみたら全然そんなことはなかったなあってゆーか

――

「……………今回は初対面ってワケじゃないみたいだな」

「え？なんでわかんのか？」

「言葉の端々に出てるっつーの」

マジでか

全然意識してなかった

「やーやー、その一年坊諸君！

そーんな隅っこの方でなにを話したんの？」

会長さんとの話を切り上げたのか鍋島先輩がこっちに来た

「【ジブン】は……」

たしかこないだ柔道部に入るゆーてくれた子やろ？

【ジブン】も生徒会のメンバーやったんか？」

生徒会のメンバーじゃないし

そもそもそんなこと約束した覚えはない

「今日はとりあえず見学のつもりで来たんです

そしたらたまたま生徒会と鉢合わせたので………というワケで」

「なんだ

やっぱ【お前】知り合い？」

【俺】と鍋島先輩のやり取りを見て気になったのか  
善吉っちゃんが入る

先輩と【俺】は顔を見合わせ…

「先日柔道部に勧誘されました」

「先日柔道部に勧誘しました」

「「とりあえずそんな感じ？」」

「……あつそ」

「あからさまにスルーしたね

そこは『にしては息ぴったりじゃねーか』とかツッコんでほしかったな」

「べつにツッコミ入れるほどでもねーだろ」

……あれ？もしかしてさっきのこと怒ってらっしゃる？

「そーいえば…

今日は見学だけやゆーてたけど【ジブン】一人なんか？  
あとの四人はどないしたん？」

「え！？」

「ん？『あとの四人』？『あとの四人』って誰ですか？」

「いやいや、誰て決まってるやん

五つ子の残りの四人——」

「わーわーわー！……！」

「うお!？」

「なんだよ急に!？」

「い、いや!なんでもないよ!？うん!全然なんでもない!」

「？」

「鍋島先輩!!」

「な、なんや？」

「今日は会長さんに挨拶がしたいって人がいるんじゃないんですか!？」

「いいえ、いるはずですよ!いるに決まっています!」

「あ、あー」

「そーやそーやそーやったわ(なんで知ってんの?)」

「黒神ちゃん!実はジブンに挨拶したいゆー奴おんねん!

阿久根!おーい阿久根クン!」

あ、焦った…

善吉「っちゃんや会長さんは【俺】に兄弟がないことを知ってる  
だから【アイツら】のことを知られたら不自然に思われてしまいか  
ねない

まだ善吉「っちゃん達には、【俺】が妙なスキルを持つてることは知  
られたくないしな

鍋島先輩は……

アレが初対面だったからギリギリセーフってことで

「……………堅苦しい真似はよせ阿久根二年生  
他の者がみておるぞ」

「……なんてモノローグやってる間に阿久根高貴の登場シーン飛ばし  
ちまったＺＥ

「……マジでイケメンだなー阿久根高貴  
……とりあえず爆発すればいいと思います

「私に感謝していると言うのなら頭を下げるな！胸を張れ！！」

「は、はいっ！めだかさんの御心のままにっ！！」

ふと横を見してみる

「……………」

善吉っちゃんスゲー顔になってる

「おっと……それはそれとして生徒会を執行せねばな  
後継者、つまりは新部長の選定だったか  
とりあえず貴様は特別枠だ阿久根二年生  
善吉と談笑でもしておいてくれ  
貴様達は貴様達で積もる話があるだろう」

あ、こっち来た

「……………久し振りだね  
えーっと

キミ名前なんだっけ？」

「人吉善吉クンですよ  
ところで

あんた一体誰ですか？」

「虫が！相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出しているらしいな

言っておくがめだかさんの支持率が100%に達しなかったのは  
キミのせいだぞ！！」

「カツ！あんま意地悪言わないでくださいよ

人格者で通ってる柔道界のプリンスが

下級生いじめなんてファンの女の子が知ったら泣いちゃいますよ  
？」

……………なんでこの二人【俺】を挟んでケンカしてんの？  
見えてないの？  
気付いてないの？

「さて、私に言わせれば柔道は教わるものではなく学ぶものだ  
それゆえに！

まずは鑑定してやろう

貴様達の値打ちをな

我こそはと思う者から名乗り出よ

全員まとめて一人残らず！

私が相手をしてやろう！！」

道場内がざわつく

まあ天地魔闘の構えで下級生からんなこと言われたらざわつきもす

るか

「よし！

だったら最初は俺からだ！！」

あの人の名前はたしか城n――

グシャツ

「私は全員まとめてかかってこいと言ったつもりだぞ？」

……名前を思い出す間もなかった

「おいしいなあ城南くん」

「さすがだなめだかさんは

中学生の頃より更に輝きを増している！」

「……なあ人吉くん

人吉くんはどう思う？」

「別に

あいつは中二で赤帯取得するようなバケモンなんですから  
今更何しても驚きませんよ」

幼なじみにバケモン呼ばわりされる会長さんって……

「ククク

そーかいそーかい

実はウチもおんなじ意見でな

化物言われようと天才呼ばれようとあのコはできることができるだけやる？ 不可能を可能にしとるわけやない  
極端な話、あんなんウチらが普通に歩いとるんと変わらへんで」

「……………」

「それに比べたら凡人のクセに天才にバケモン  
付き従つとうジブンの方がよっぽどスゴイヤんなあ？ 部活荒らしの人吉善吉クン？」

ずいずいと善吉っちゃんに近寄る鍋島先輩  
さりげなく逃げる善吉っちゃん

見ていてちよつとおもしろい

……………にしても会長さんスゴいなー  
現役の柔道部員をちぎつては投げちぎつては投げ……………

……………

そろそろ善吉っちゃんと阿久根高貴の勝負が始まる頃だと思っただけど……………

もし侵攻役が仕掛けてくるんだつたらそこだろうな

「…鍋島先輩アンタ  
ひよつとして最初からそのつもりで投書したんですか？」

「うん！人吉クンみたいながんばり屋さんがウチはめっちゃ好きなんよ」

おっ、始まった

数十分後

ズダアンツ

凄まじい音を打ち鳴らして善吉っちゃんが投げ飛ばされた

「ハア…ハア」

若干ふらつきながら善吉っちゃんが立ち上がる

無制限十本勝負

対

無制限一本勝負

先に阿久根高貴が十本取れば阿久根高貴の、  
善吉っちゃんが一本取れば善吉っちゃんの勝ち、  
という特別ルールで始まったこの勝負だけど……

「おいおいあつという間に九本取っちゃったじゃねーか！

阿久根の野郎容赦なさ過ぎ！」「当然だろ

他の格闘技と違って柔道にラッキーパンチはねーからな」

「ほとんど素人みたいなヤツと阿久根とじゃ勝負になるわけないんだよ」

がやがやざわざわと柔道部員が騒ぎ始めてきた

………ここまでは原作どおり

もしかして今回はハズレかな？

「（……そうや

それが才能ゆうもんや

天才はおる！

しかもうじゃうじやとそこかしこに！

ウチはそういう綺麗な天才に汚く勝つのを生業にしてきた

まあ今日は素直に負けとけや人吉くん

半年もあれば阿久根クンに勝てるようにウチが鍛えたるわ」

「……先輩、鍋島先輩ってば」

「ん？

おお、なに？

どないしたん？」

「【俺】そろそろ帰ります」

「へ？

もう帰んの？

まだ勝負ついてへんで？

（ま、そーゆーてもほぼ阿久根の勝ちが決まりやろーけどな）

「ええ、結果が見えてる勝負事ほどつまらないものはありませんから  
ね」

「ひどいなー【ジブン】

飯にも人吉クンの友達やろ？

少しは友達の勝ちを信じてやったらどうなん？」

「…先輩、何言ってんですか？」

「は？」

「【俺】は善吉っちゃんが負けるなんて微塵も思ってません  
あんまり【俺】の友達を甘く見ないでくださいよ  
じゃあそーゆーことなんで」

そう言い残し【俺】は道場の出口に向かって歩く

「なにゆーてんねん……」

今から人吉クンの大逆転なんてあるわけが――」

「善吉！」

「！」

「いつ如何なる場合においても  
決して私は貴様に負けるとは言わん」

あはは

きたきた

「だから勝つてー！」

貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ！

困るぞ！

泣いちゃうぞー！」

会長さんの応援を最後に道場を出る【俺】

「あつ…ダメだ！倒れるっ！」

応援の甲斐なく善吉は崩れ落ちる……かに見えた

「あーっもうっ…

お前が泣くところなんか見たことねえし見たくもねえよ!!」

ふらつき倒れる、と見せかけ阿久根の足めがけて善吉が突進する

「!?

うっ! うおおっ!

しっしまっ……………」

咄嗟のことに面食らい、一瞬判断が遅れる阿久根  
そして……

「がっ……………!!」

背中から激しい音をたて、阿久根が倒れる

「もっ、双手刈り!

珍しい! なんだあいつあんな技知ってた!？」

まさかの出来事に部員達が沸き上がる

「はぁ… はぁ…

文字どおりアンタの足も引っ張ってみました——  
ってところで何を認めてくれるんでしたっけ? 阿久根先輩」

「……………っ!

負けを認める!

一本取られたよ」

その言葉を聞き、嬉しそうに微笑む善吉

「信じられへん……」

阿久根クンにほんまに勝ってしもた……

（あのコ……こうなるのがわかつとったゆーんか……）」

---

道場・外

---

「うーん……」

一応、阿久根高貴の生徒会加入イベントだから絡んどいたけど……  
肝心の阿久根高貴とまったく会話しなかったな……」

侵攻役も今回はなにもしてこなかったみたいだし……  
無駄足だったかな？

てゆーか、今回【俺】の出番自体あんまりなかったなー

……ホントに主人公か【俺】？

＼アツカリ／＼ン／な感じにならなきゃいいが……

「はぁ……帰ろ」

ため息をつきながら帰宅する

第20話「微塵も思ってません」(後書き)

わかってたことですが原作に沿わせると主人公が……………。

## 第21箱「秘密です」(前書き)

今回は大幅にキングダムゾンしてます。

キングダムゾンで飛び越した話を

見てみたいって方がいたら(たぶんいないだろうけど)

感想で言ってください。番外編、もしくは回想編として書きます。

## 第21箱「秘密です」

いきなりだが善吉っちゃんと阿久根高貴が勝負した次の日から二週間ほど時は飛ぶ

その間に阿久根先輩とあらためて知り合い、もがにゃん（喜界島さんのこと）ともそれなりに話すようになったこの二人と友達になれたのは善吉っちゃんのおかげだ

ただいま教室で善吉っちゃんと談笑中

「扉を開けたらもがにゃんが善吉っちゃんを押し倒してたのは驚いたなー」

「その話はもういいだろ！」

「あははは、ごめんごめん」

「ったく…、んじゃあ俺は生徒会あるからそろそろ行くわ」

「あ、じゃあ【俺】は特にやることないからついて行くわ」

「来なくていい」

「つめたーい」

「人肌程度には温かいつもりだよ  
じゃあまたな」

斬新な返しですこと

「……さてと、そろそろ行くか」

善吉つちゃんが生徒会の仕事に向かって数分後に【俺】は教室を出た  
今からの時間なら充分間に合うだろう

---

数分後

---

迷った

---

その数分後

---

やっぱり便利だな《歩行者天極》  
ずっと発動してよっかな

「…にしても、まさか音楽に行くのにこんなに時間がかかるなんて  
思わなかった」

そう、【俺】は今音楽室に向かってる  
え？なんでかって？

もちろん原作介入のためですよ  
『めだかボックス』で音楽室が出てきたイベントなんて一つしかない  
そのイベントに関わるために今足を運んでるわけだ

「だったらオレのスタイルは見下し性悪説だ！  
テメーが花を育てる側ならオレは芽を摘む側なんだよ！！」

お？もう始まつてる？

雲仙先輩の声が音楽室の外に響き渡っている

……さすが防音設備に問題がある音楽室だ

「失礼しまーっす」

扉を開けると

「…… ■ ■ 同級生！？」

「…… テメーあの時の！？」

「あれ？ 意外な人物が登場」

「え？ 誰？」

音楽室の中には会長さん、雲仙先輩、袖ちゃん、そして鬼瀬針金がいた

……あとオーケストラ部の部員達らしきモノ

……そういえば鬼瀬針金とは初対面だ

とりあえず自己紹介をば

「はじめまして鬼瀬さん

【俺】、一年一組の ■ ■ ■ っていいいます

仲良くしてね」

「え？ あ、はい……」

（なにこの人…なんでこの状況で自己紹介なんてできるの？

……え？てゅーか何で私の名前知ってるの？」

「なに言ってるのさ鬼瀬さん！」

風紀委員会の『手錠メリケンの鬼瀬』といえばそれなりに有名なんだよ？」

「え！？あ、なんで考えてることがわかって……」

知らない奴から名前を呼ばれたら誰だって『なんで自分のことを？』と考える

その思考に合わせて発言しただけであって、べつに心を読んだわけじゃない

「オイ、テメー！ 登場早々ナンパなんてしてんじゃねーよ！！」

雲仙先輩が吠える

「自己紹介しただけでしょ…」

てゅーか【俺】のことは気にしないでいいですから  
ほら、話進めて進めて」

ジェスチャーでストーリー進行を促す

「あア？ 勝手に仕切ってるじゃねーぞテメー！！」

と、雲仙先輩が言った瞬間

バシッ と【俺】の手が何かをキャッチする

「なっ！？」

「危ないじゃないですかいきなり……  
当たったらかなり痛いんですよ？コレ」

いつの間にか手の中にスーパーボールが握りこまれていた

《生氣者》のおかげで助かったな

「会長さん」

「……なんだ？」

「……そんな警戒しないでくださいよ、傷ついちゃいますよ？」

おどけながら言ってみる

「だから『なんだ？』と聞いているだろう」

…怖いなあもう

「……すぐに善吉っちゃんたちのトコに行つてあげてください  
風紀委員が生徒会メンバーを狙ってますから」

「「「！？」」」

驚いたのは会長さんと雲仙先輩と鬼瀬さんだ

「テメーなんでそれを――」

「それは本当か ■ ■ 同級生」

会話に割って入る会長さん

「ええ」

「……………やれやれ 愚かなことをしてくれたものだ」

「……………あ？」

雲仙先輩を一瞥し、なかば呆れたようにため息をつく会長さん

「不知火 ここは任せたぞ」

「はい？なんであたしが？」

「今度私が手ずから満漢全席を振る舞ってやるから  
頼むよ」

一方的に頼み事をして駆け出す会長さん

「あ！？どこ行こうってんだよ黒神！お仲間を助けに行こうってか  
！？」

今からこつから間に合うワケねーだろが！  
ムダな悪あがきしてんじゃねーよボケ！！」

スーパールールのつぶてをくらう会長さん

……………だが

ボウン

「あり？」

……… 変わり身の術で回避とか  
会長さんマジ忍者

「チツ… 甲賀正谷の忍者かよあのバケモン女…」

会長さんを追おうとする雲仙先輩  
そしてそれを阻む袖ちゃん

「何のつもりだ？エアオツパイ」

……… 二人が会話している間に音楽室の中を見回してみる

「……… ひでえなこりゃ」

部員達はボロボロ、そもそも元が人間だったのかを判別するのも難しい

壁には一面返り血が飛び散り、さながら殺人現場のよう

楽器はただの鉄屑と化してしまっている

「『やり過ぎなきや正義じゃねえ！！』……… か」

でもこれじゃいくらなんでもオーケストラ部員が可哀相じゃなから  
うか？

……… 《あのスキル》を使えばどうだろう？  
《この間見つけたあのスキル》を使えば………

「いや、ダメか……」

《あのスキル》は『すでに起こり終わったこと』を対象にはできない  
それこそ『この惨状』をなんとかするには《大嘘憑き》でもない限  
り……

「ならばこの際高みの見物って奴をさせていただこうぜ  
バケモン女の文字通りの悪足掻きをなあ!!」

ん？

どうやら会話が一区切りついたみたいだな

「さてさて？とりあえずこっちはそういうことにしておいて……だ  
お次はテメーだ！

……ああ……えーと、一年!!」

「……名前がわからないなら聞くくらいしましょうよ」

「つるせー！

テメー随分と久しぶりじゃねーかよオイ！こんなところに何しに来  
やがった？」

「ええ！？ ひどいなあ忘れちゃったんですか？雲仙先輩」

「……あ？何をだよ？」

「あの時の約束ですよ！  
言っただじゃないですか 『廊下を走った罰は今度受けます』 的な

ことを

覚えてませんか？」

「…………… ああ、そういえば言ってたような気がすんな  
…………… は？まさか、テメー……」

「はい！今その罰を受けに来ました！」

「……」

ん？何この空気？

なんで先輩も袖ちゃんも鬼瀬さんも  
そんな変態を見るような目で【俺】を見るの？

「…………… ケケケケケ！なんだよなんだよ！テメー以外と優等生クンな  
んだな

あれか？テメー読書感想文とかの類いは最後の行までビッチリ書  
く派か？」

な、なぜそれを！？

「いいぜ！わかった！テメーのその心意気に免じて……………」

『リハビリ三年』程度で許してやらあ！！」

リハビリ三年って学園生活終わるっつの……………」

——三分後——

「……………」

「ケケッ！まあこんなところか？」

…三分間、滅多打ちにされた

スーパールで打たれ、炸裂弾で撃たれ……

我ながら生きてるのが不思議なくらいにスタボロだ

《生気者》は……使わなかった

特に理由はない

「やっぱりやり過ぎ過ぎます委員長！」

このままじゃその人本当に死んでしまいますよ！！」

今まさに死の一手手前状態の主人公を見て鬼瀬が叫ぶ

「ケケケッ！だーかーら！保健室には連絡済みだつて鬼瀬ちゃん  
まったく、敵の身を心配するとか優し過ぎるぜ？」

「で、でも……いくらなんでも——」

「……ずいぶん派手にやりますねー風紀委員長」

黙りこくって仁王立ちを決め込んでいた不知火が突然口を開く

「なんだよ急に？文句あんのかエアオツパイ？」

「いえいえ文句なんてとんでもない

ただ『終わった気にいる』のは時期尚早な気がするだけです」

「……？」

「まあ意味深なことを言ってみたりしてますけど……  
要は『あたしの友達はかなりしぶといですよ』ってことを言いた  
いワケです」

「急にしゃべり出したかと思ったらいきなり何言って——」

「人をゴキブリみたいに言わないでほしいなー袖ちゃん」

「「！？」」

「あひゃひゃ ごめんごめん」

……まあ昔はよく言われたけどね  
悪口としても、誉め言葉としても

「……どうということだ？」

「……その言葉の意味を計りかねますね  
どうということってというのはどうということですか？雲仙先輩」

「まんまの意味だよ！  
どうしてあんなだけスタボロにしてやったのに平気な顔して立てる  
！？」

いや、そもそも……「テメー」傷はどこいった『！？  
なんで『制服まできれいさっぱり元に戻ってやがる』！？」

「……んー  
秘密です」

「……はあゝ？」

うわ…露骨にイラツとされた…

「いやまあ…それはアレですよ…

わかんないことをいつまでも引つ張ってたらダメですよ先輩！」

「…さつき『わからないなら聞くくらいしろ』つつったのはどこの  
どいつだ」

「あははは……」

「笑って誤魔化すな！」

「うわっ!？」

ピリリリリリリ

「チツ…誰だ、こんな時に」

完全にスーパーボールを投げる体勢だった…

先輩のケータイが鳴ったおかげで助かったよ

……え？ケータイじゃなくてアイフォン？

……細けえこたあいーんだよ!!

「ああ？任務失敗？

どいつがよ!？全員!？」

……どうやら会長さん間に合ったようだ

「それじゃ【俺】はそろそろ…」

「あれ？もう行くの？」

「しーっ！」

声がかいよ袖ちゃん！

…まあ目的も果たしたから  
長居は無用って奴だよ」

「ふーん」

「……そういえば【俺】が立ち上がった時、袖ちゃんだけ驚いてなかったよね？」

……なんで驚かなかったの？」

カマをかけてみる

「あひゃひゃ そりゃアレだよアレ！」

『私は仲間を信じてる！』的な？漫画でもよくあるじゃん」

「はははっ、さいですか」

「さいですさいです」

善吉っちゃんが言うとおり、喰えない奴だなー袖ちゃん

「んじゃ【俺】はもう行くね袖ちゃん バイバイ」

「じゃーねー」

そして【俺】は先輩と鬼瀬さんに気付かれないようにそつと音楽室をあとにした

「この後のショータイムのために特等席を探さなきゃな」

## 第21箱「秘密です」(後書き)

「先輩から罰を受けるために音楽室に来たと言ったな……ありや嘘だ」

というワケで主人公は本当に罰を受けるために音楽室に出向いたんじゃないありません。

その時、主人公が思いついて口から出たデマです。

ちなみに、『どこかへ行った傷』と『きれいさっぱり元に戻った制服』は

《大嘘憑き》でなかったことにしたものではありません。

《大嘘憑き》に近い、『主人公のスキル』です。

そのうち説明するつもりです。

ヒントは『起こり終わったことは対象外』ってことと、『主人公がズタボロになる前の状態』になったこと。

## 第22箱「知ってるか？」（前書き）

この作品をお気に入り登録してくださってる方がもう少しで300に届きそうです。

こんな作者の痛い妄想みたいな話を200人強の方々が楽しみにしてくれてると思うと胸が熱くなりますね。

あ、今回「あいつ」についての描写が少し具体的に描かれます。つて言ってもザッと一気に書いたので少々不自然かつ不愉快な出来になってしまっているかもしれませんが、ご注意をば。

## 第22箱「知ってるか？」

廊下

音楽室でのイベントを終えた【俺】は  
その後控える『黒神めだかVS雲仙冥利』に向けて特等席を探し  
ていた

「やっぱり生徒会室に近い方がいいかなあ？」

原作では音楽室のあとに、生徒会室に乗り込み生徒会メンバーを襲  
う雲仙先輩

だったやはり生徒会室近辺の方がより面白いモノが見れそうだ  
というワケで…来ちゃいました生徒会室

「またまた失礼しま——」

ドガッ！

「あべしっ！？」

「あ」×4

生徒会室の扉を開けた途端、顎に衝撃が走った

「お、お、あああ…」

「…大丈夫か？」

「だ、大丈夫大丈夫…… ってんなワケねえだろええええ！？  
何が起こった！？

何で生徒会室に入った瞬間にタイガーアッパーカット並の  
一撃をもらわなきゃなんないのさ！？」

「いや… 風紀委員長の正体不明の武器の説明をしてる時に  
ちょうど【キミ】が入ってきたから…」

ああ… スーパーボールね…  
てか、そんなタイミングで入ってくる【俺】って……

「ちょうどよかった■ ■ 同級生  
さっきは言いそびれたが生徒会の危機を伝えてくれてありがとう  
助かったよ」

「ああ、いえいえとんでもない  
当然のことでした嘛ですから  
…にしてもいきなり顎にスーパーボールを食らうとは思いません  
でした」

顎をさすりながら返事をする

「え…？  
なぜそれを知ってるんだい？」

「はい？」

「いやだから、風紀委員長の武器の正体がスーパーボールだってこ  
とをだよ」

「……………」

やっべー…

そついや原作で雲仙先輩の武器の正体が明かされたのは  
この時が初めてだったな……

「私も気になるな ■ 同級生

さつき音楽室で【貴様】は雲仙二年生の一撃を受けとめた  
それは武器の正体を知っていなければできないだろう  
一体どこでスーパーボールだと気付いたのだ？」

「あー、いやそのー、それはですねー、なんというかそのー」

まさか

『原作読んでるから知ってるに決まってるでしょー』  
とは言えないしな…

「？」×4

「あー、えー、それはー…」

目がバタフライで泳ぎまくり、  
全身から冷や汗吹き出してるのが自分でもわかる  
うあぁっ、みんなの視線が一気に【俺】へと…

「邪魔だボケ」

「どうわっ！」

突如後ろから衝撃が襲う

派手に前転をしながら生徒会室の中央まで転がる【俺】

「!?!」×4

パチパチパチ

「いやーお見事お見事!

一年以上そのテクでやってきたけど

タネを見抜いたのはテメーが初めてだぜ黒神!」

生徒会室内に緊張が走る

「う、雲仙先輩…

お早いお着きで…」

「ケツ、またテメーかよ

いつのまにかいなくなつたと思つたらこんなトコにいたのか  
神出鬼没とはテメーのためにある言葉なんじゃねーか?」

【俺】って知らずにいきなりケツトバシタの?  
風紀委員長としてどうなのそれ?

「まあ今は【テメー】のことはどーでもいーんだよ  
今オレが用があるのはテメーだよ黒神」

言いながらスーパールールをザラザラと袖口から出す先輩  
あれ?そつえばこの後生徒会室って……

「……………」

何このヒネてそーな子供

全然可愛くないんだけど」

もがにゃん空気読んで!!  
いやー！てゆーか思い出した！  
この後に生徒会室爆破されんじゃん！  
すっかり忘れてた！

「あのー…重要そうな話みたいなんで【俺】はこの辺で…」  
慌てて出ようとする……けれども

「まあ待てって！そんな急いで出てくこともねーだろ」

先輩が立ちはだかる  
うう……

「手品の解説に来てくれたわけでもあるまい  
何の用だ雲仙二年生」

会長さんが話を進める  
あらためて会長さんに向き直る雲仙先輩

「用がなくちゃ来ちゃいけねーってのか？  
冷てーことおっしゃるなよ悲しいなあ！  
学年は違えど同じ十三組の仲間じゃねーか」

会話が始まってしまった  
どうしよう…もうすぐ爆破が…  
隠れようにもロッカーは三つだけ  
ということは善吉ちゃん、もがにゃん、阿久根先輩の三人で埋ま

つてしまう

「ならせめてダメージが少なく済みそうな場所は……」

キヨロキヨロと室内を見回す

ただいまの生徒会室内状況

・生徒会メンバー四人

・風紀委員長一人

・拳動不審の男一人

……なにこの状況

「いや実際テメーが入学してきた時から思っちゃいたんだよ  
テメーとオレは鏡写しさながらによく似てるってなあ！」

「……でも左右逆なんだろう？」

「おうよ

そっくりだから相容れねえ」

二人の会話が耳に入る

……『鏡写し』

……『そっくり』

……『相容れない』

「チツ、どれもこれも「あいつ」を連想させやがる言葉だな……」

思い出したくなくても思い出してしまう記憶は誰にだってある

【俺】にとっては……「あいつ」がまさにソレだ

『あーあーまったくもう、■ ■ってばしょうがないなあ』

頭の中で「あいつ」の姿がフラッシュバックする……

~~~~~13年前~~~~~

主人公には両親というものが存在しない
いや、存在しないというより主人公が個人的に顔を知らないだけな
のだが……
たぶん探せば世界のどこかで幸せな家庭を築いて暮らしてはいるだ
ろう

そんな自分を捨てた……

『自分達』を捨てた両親を、

『彼ら』は特に何とも思っではないなかった

彼らは絶対的に似ていた
それこそ鏡写しのように

だが鏡は鏡

左右は対称

もちろん二人は絶望的なまでに仲が悪かった

いつも二人いつしよのくせに目が合えば喧嘩ばかり
そんな二人をまわりの大人たちはたかが子供の喧嘩と
微笑ましく眺めていた

しかし当の本人達は本気で相手を疎ましく思っていたし
うっとおしく思ってもいた

そして『ある事件』を境に□□□□は■ ■ ■ ■と決別し、孤児院を
出た

もちろん□□□□の行方を主人公が知るわけもないし
知りたいとも思っていないだろう

□□□□がまだ生きているのかも不明だ

忘れないでいてほしいが、この時二人は共に弱冠3歳なのだ

……そんな二人だが唯一一致する部分にはある
その一致する部分というのは

『もし両親に会えたらまず何がしたい？』という質問に対しての返
答だ

もちろん一人ずつ質問した
二人いっしょに聞くと『自分が最初に聞かれた』などと喧嘩に発展
しかねない

通常ならば『一発殴ってやりたい』や『もう一度いっしょに暮らし
たい』が
普通の答えだが……

その二人の望みは『一つだけ質問したい』だった

『何を聞きたいの？』と問われると

かたや満面の笑みで、かたや面倒くさそうにこう答えた

【俺】を捨てる時どんな気持ちだった？

「俺」を捨てる時どんな気持ちだった？

~~~~~現在~~~~~

「「あいつ」と同じ答えてあとで知った時はトリハダだったぜ」

「貴様達離れろ！さっきこやつがバラ撒いたのはスーパーボールではない！

火薬玉だ！！」

……「あんな奴」のこと思い出してる間にだいぶ会話が進んだな

………てゆーか

「おつとバレたかい？ダメだなーオレって本当にダメだ！手品下手過ぎ！

だがまあ遅い

仕込みはギリギリ終わってる」

もう隠れる暇なんてくない！？

「……………密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃ  
すまないよ」

「そうだ！子供っぽい脅しはやめろ！悪ふざけにも度をこしている  
！」

知ってるか？

『やり過ぎなきや正義じゃない』って言葉があつてだなあ……

「テメーらニュースとか見てねーのか？ダッセエな  
最近のガキは何考えてつかわかんねーんだぜ？」

自分でガキつつっちゃったよこの人

「どーするよ黒神

こつからオレを見事改心させてみせるんだろ？  
それともやめてくださいってお願いしてみるか？」

「……………やめてくだ」

「おせエよボケ」

そして爆音と共に【俺】の視界は真っ白になった

## 第22箱「知ってるか？」（後書き）

やっぱりお気に入りの方をもっと増やすには宣伝しないと駄目なん  
でしょうか？

ブログとかツイッターとかやってないのでまったくしたことないん  
ですが…

それともこの話が処女作で作者の知名度が足りないせい？

単純に面白くないせい？

あつてほしくないですが最後のが一番可能性は高いですね…。

## 第23箱「【俺】の名を叫んだ」（前書き）

今回で主人公の本名が明らかになります。

前にも言いましたが、九州地方の地名ではありますが市名ではありませんので！

この話を見る前に注意です！

活動報告のトコでも書きましたが、物語の内容を大きく変更しました。

書き直した1、2、7、9、15、19、20箱を見なおさないとこの回ワケわかんないことになります。

最低でも→に挙げた回だけでも見なおしておいてください。

ちなみに9は主人公のプロフが変わっただけです。

第23箱「【俺】の名を叫んだ」

「…ん？」

「…どーしたよ日向？」

「いや、なーんかあっちの方から爆発音みてーなのが聞こえた気がしまして——」

「あっちの方って…確か生徒会室があるんじゃないかったか？」

「だったらまーたぞろあの生徒会長が何かしでかしたんじゃないのかよ

おお、ケムリが上ってら

「あーそっかそうですね

そんなところでしょ！」

「そうそう！驚くにはまったくあたらねえ」

「「いっつもどーりの普通普通」「」

——生徒会室だった場所——

「……………ゲホ」

あーくそ

ちよつと意識飛んじまつたじゃねーかよ

爆発の衝撃でこんな離れたところまで吹っ飛ばされたし

「ケガはまあ《あのスキル》があるから大丈夫だけど…」

痛いのはやつぱり慣れないなあ…

ドンッ！

「うわっ…嫌な音が…」

音のした方向を見てみると

「ダンプにはねられてもへっちゃらな制服だつて？

それを聞いて安心した

つまり三発までなら大丈夫ということだよな

私が本気でなくつても！！」

ダンプと三発でイコールになるパンチつて……

ちよつとのつもりが結構長い時間意識飛んでたみたいだ  
もうこのシーンとはな

「実際、このバトル間近で見てみたかったんだよな」

我ながら呑気なもんだ

「たいしてダメージがあるとは思えないが  
そのまま立ち上がれない振りをしておけ  
今ならまだ許してやれるかもしれん」

「…ケケケ、冗談！

痛くも力ユクもねーっつーの！  
ノーダメージだよボケ！」

…本当に十歳児なのかあの人？  
『白虎』を着込んでるにしてもキャノン砲ばりのパンチを受けたってのに…

「そうかあくまでも戦争を選ぶか  
私も同じ気持ちだがならば私の理性がわずかでも残っておるうちに忠告しておこう

空手・柔道・合気道・日本拳法・ジークンドー・骨法・ムエタイ

私はありとあらゆる格闘技の指南を受けておるが  
その技術を貴様相手に使うことはない  
何故ならそれらは人間が練り上げた崇高なる技術だからだ  
衝動的な怒りに任せて使うようなものでは決してない  
だから私はただの衝動的な怒りに任せて  
暴力に訴え人間ではなく獣のように貴様を撃つ！！」

どんだけ武道を究めてんだこの人は…

“史上最強の弟子”の師匠の一人になれるレベルだぞ

「いいだろう！テメーが獣のように戦うのなら！オレは人間のように戦ってやる！

テメーの大好きな！オレの大嫌いな人間のようにな！！

そしてテメーからのありがたい忠告に対して

オレはありがたくなえ忠告をしてやるぜ！

黒神めだか！正しい正しくないにかかわらず正義は必ず勝つんだ  
よー！！」

『正しい正しくないにかかわらず正義は必ず勝つ』……かなかなか重たい言葉だよな

「ぐ……！ぐふうっ！」

ドテツ腹にモロに会長さんのパンチをくらい、校舎内に吹っ飛ぶ雲仙先輩

確かこれって会長さんをおびき寄せる作戦だったよな？  
結局失敗してたけど

「……………どうやら何か企んでいるらしいな  
しかしまあとどめを刺さずにいられる気分でもないか」

完全に悪役のセリフですね、わかります

そして崩れた校舎の中に先輩と会長さんは消えていった

……あれ？なんだろう？なんか違和感が……

……まあいつか

……………  
何が起こってるのかまったくわからなくなったな

「ちょっと近寄ってみよう」

少しずつ校舎に歩み寄ってみる

「攻撃……………理由はもう……………ろ！それ……………オラ！……………もん……………  
みる……！」

うーん……………

微妙に聞き取りづらいな……

でもこれ以上近づいたら巻き込まれそうだし……  
……なんて考えあぐねていると

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……

「おわ！な、なんだ？なんの音だこれ！？」

ビキッビキビキビキッ

ドズウウンッ

ドドドドドドドドド

「そ、そうかこの音！会長さんが校舎を引っ張ってる音！」

雲仙先輩の切り札である『スティングボール鋼糸玉アリアドネ』

その切り札で校舎の瓦礫にがんじがらめにされながらも、それを無理やり引きずって動かしてる音だ！

「いよいよ黒神めだかVS雲仙冥利の対決もクライマックスだな……  
あっそうだ！善吉っちゃんたちは？善吉っちゃんたちがいないと  
会長さんが……」

辺りを見回す

「あ！あんなトコに！

おーい！みんなー！そんなトコで何やってんのさー？」

小走りで善吉っちゃんたちに駆け寄る

「早く会長さんを止めないと大変なことに………」

………！！？」

嘘だろ……？

氣い失つてる！？

善吉っちゃんも！阿久根先輩も！もがにちゃんも！

「はっ！そうか！

さっきの違和感の正体は……！」

原作では、校舎の中に吹っ飛んだ雲仙先輩を会長さんが追う時に善吉っちゃんがそれを呼び止めるシーンがあつたはず！

さっきはそれがなかつたんだ！

「クソッ！

今までなにもなかつたくせにここにきて侵攻役が手を出してきやがつたか！」

なんて言つてる場合じゃねえ！

早くみんなを起こさないと雲仙先輩が……！

あの人にはまだそれなりに活躍するシーンがそこそこあるんだから……！！

「起きろよ！早く起きろつてみんな！いつまで寝てんだよ……！」

「……うゝん……」「」

ダメだ起きない！

爆破の衝撃で脳震盪でも起こしたのか！？

「クソッ！どうする！？

さすがにあの状態の会長さんの相手はゴメンだぞ！？

せめてみんなが目を覚ますまで時間が稼げれば――」

……時間が稼げれば？

「そうだ………時間稼ぎだ」

絶対に『勝つことはできない』が『時間を稼ぐだけ』なら  
《あのスキル》がピッタリだ！

「いや、でも《あのスキル》の発動条件は………」

………ううゝ

「えーーーーい！ままよ！！」

悩んでる時間はねえ！

【俺】は急いで半壊した校舎の中へ駆け出す

――校舎内――

その頃校舎内では……

「？、何か言ったか？」

「いやあ、オレは十歳のお子様だけど人生経験じゃあテメーより上だからよ

わかつちやうんだよな

テメーが遠からず人間に絶望しちまうってコトがよ  
その時テメーがそんな細い神経で耐えられるのかどうか心配にな  
っちまってさ」

いよいよ決着がつきそうな雰囲気になっていた

「……いらん世話だ

私は人間に絶望などしない」

「あつそ、そいつは失礼

(確かにいらん世話だろうな

しかし黒神、オレはこれでも面倒見のいい先輩なんだ  
だから……オレがテメーを改心させてやるよ)

だったらもうトドメを刺しな

大好きな人間を守るためにオレを排除してみせな」

「……………そうする」

「(ああそうしろ

だけどあとでよくよく思い返してみるんだな

テメーが潰そうとしているこのオレもれっきとしたひとりの人間  
なんだ

オレもオレでひとつの人間のありようなんだ

人間を守るために人間を排除するんじゃない

それはもうやってることはオレと一緒になんだぜ？

オレに勝ち

オレを潰して

オレになれ

絶望の末にやり過ぎの正義を受け継ぎやがれ

やり過ぎなけりや正義じゃねえ!!」

ゆっくりと瞼を閉じる雲仙

ズドオオオオン

「……………」

なにも起こらない

「（なんだ？なぜ何もしてこない？）」

確かに凄まじい打撃音が聞こえたのに雲仙の身には何も起こっていない

「【貴様】……なにをしている」

めだかが言う

雲仙を相手にしての発言ではないようだ

「（一体何が……」

……………!?!）」

うつすらと瞼を開くとそこには…

「おっ…ぐっ…ふう…」

「テ、【テメー】！なんで！？」

「い、いやあ…ハハ

なんででしょうねえ？」

雲仙の目の前には【あの一年生】が立っていた  
雲仙の身を守る盾となって立っていた

「……………腕を離せ■同級生、巻き込まれたいのか」

めだかの拳は主人公の腹に深く埋まっていた  
その腕を主人公はガツとつかんでいる

「なーに言っちゃってるんですか会長さん……  
巻き込ませてもらうためにこんなことしてるんですよ」

腕を離す主人公  
腕を引くめだか

「ごふっ……と、とりあえず生きてますか雲仙先輩？」

「一体何のつもりだ【テメー】！  
邪魔してんじゃねーぞ……！」

「邪魔って……あと少しでやられてたじゃないですか雲仙先輩」

「だから何だっつーんだ！？オレはテメーらの敵だぞ！！  
助けてもらう義理も守ってもらういわれもまったく――」

「そんだけ騒げるなら大丈夫そうですね……えい」

ドガッ

「ガッ！？」

「ちょっと気絶しててください雲仙先輩」

雲仙の腹を蹴り気絶させる

弱った先輩なら【俺】でも気絶させられる

「そこをどけ ■ 同級生

私はそいつにトドメ刺さねばならん」

「残念ながら会長さんの頼みでもそれは無理ですね  
ある理由があつて雲仙先輩にここでリタイアされると困るんです  
よ」

「……ある理由？」

「まあ個人的な理由です  
というわけで会長さん、雲仙先輩にトドメを刺したいんなら  
まず【俺】をこの場から排除してくださいな」

「……【貴様】と――」

「『闘う理由が無い』ですか？

いやいやこんな時でも会長さんは会長さんですねー  
まったく恐れいっちゃいます

……でも本当にそうでしょうかね？」

「なに？」

さてさて……ここからは会長さんの敵意を【俺】に向けなきゃ

『立てば嘔吐き座れば詐欺師、歩く姿は詭道主義』の彼を見習って  
もっともらしい嘘を吐いてみようかな

「……考えてもみてください

あの時なんで【俺】が音楽室に現われたのか？

なぜ【俺】が雲仙先輩の武器の正体を知ってたのか？

そして今なぜ【俺】が雲仙先輩の前に立ち、

会長さんの前に立ちはだかつているのかを」

「……………」

「まあ二つめの『なぜ武器の正体を知ってたか？』は簡単ですね  
以前から雲仙先輩と知り合っていれば武器の正体を探ることなん  
て造作もない」

「……………」

「問題は一つめと三つめです

『なぜ音楽室にいたのか？』と『なぜ雲仙先輩を助けたか？』」

「……………」

「この二つの問題を一気に解決する答え……」

それは『実験台の観察と保護』ですよ」

「……『実験台』？」

ここからかなり現実離れた空論になる

「ええ、実験台です

……ところで話は変わりますがね会長さん

【俺】って実は催眠術が得意だったりするんですよ」

「？」

「……わかりませんか？

ならこう言えばわかります？

『【俺】の催眠術は人の凶暴性を高めることができます』」

「……………」

！！？

ま、まさか【貴様】ッ！！」

「やっと理解できましたか

なかなか鈍いですね

そう、『雲仙先輩は【俺】の催眠術によって操られていた』んですよ

……そもそもありえないでしょ？

いくら風紀委員会だからってこれは明らかにやり過ぎです

でも実際雲仙先輩はなんの躊躇いもなくこんな凶行に及んでる」

「……それは【貴様】が催眠術で、雲仙二年生の凶暴性を高めた結果だと？」

にわかには信じられんな」

でしょうね

【俺】も自分で言っつて恥ずかしいです

「信じられんって……会長さん

あなたさつき雲仙先輩に

『貴様もかつてはウンタラカンタラドータラコータラ』言っつたでしょ？」

「……しかし、そうなると

【貴様】は友人である善吉たちまで巻き込んだことになるな」

「ええ、そうなりますね」

「……つまり【貴様】は自らの手も汚さずに、

雲仙二年生を使って善吉たちを傷つけたワケか」

「ええ、そうなります

まあ実験は成功みたいです

実は自分の催眠術に自信がなかったもんで……

まさかここまで上手くいくとは思いませんでした」

「（ピクッ）

……上手くいく、だと？」

「はい、大成功でし——」

ズドンッ！

「！！！！??？」

ゴボツ！ゲツハアツ！！」

ドゴオオン

「ガッ……、ガハッゴホッ」

み、見えなかった……！全然！  
気付いたらパンチを食らって  
気付いたら吹っ飛ばされてた！

「なぜだ？

友人を傷つけておいてなぜヘラヘラしている？  
なぜこの状況を見て平然としていられる？

【貴様】には感情というものが存在しないのか？

【貴様】には罪悪感というものが存在しないのか？」

……どうやら成功したみたいだ  
標的を雲仙先輩から【俺】に！

「前々から【貴様】のことを怪しく思ってたはいた  
だが善吉が【貴様】を友達だと言うから信じようとした  
しかし！【貴様】は！

私の信頼と善吉たちの友情を踏みにじった！  
そんな【貴様】を私は絶対に許しはしない！」

さあて……

ここからはマジで歯ア食い縛らなきゃだな……

……《戒名》を解除して  
《あのスキル》を発動する

準備は……………調った

あとは会長さんが【俺】の名を呼ぶだけでいい

「どうやら私は間違っていた！

いや、間違っていないかった！

真に討つべきは雲仙二年生ではなく【貴様】だった！」

そして……

会長さんは【俺】の名を叫んだ

「てんじんみそら  
天神神天！

【貴様】に明日は来ない！」

|           |
|-----------|
| 天神 神天     |
| (てんじんみそら) |
| 所属：一年一組   |
| 血液型：A B型  |
| 備考：主人公    |

[

第23箱「【俺】の名を叫んだ」(後書き)

主人公！

天神神天って名前だったんです！

にしても、神天って書いてみそらって読むのは自分でもどうかな？  
と思いました。

第24箱「負けられない！」（前書き）

お待たせしました。

やっとこさ新話投稿です。

最近忙しくて全然筆が進んでませんでした。  
申し訳ありません。

あ、いや、違いますよ？

別に録り溜めしてたアニメを観てたとか  
積みゲーを処理してたとかでは断じてありませんよ？（汗）

## 第24箱「負けられない！」

~~~~~前回のあらすじ~~~~~

| |
|----------|
| 天神 神天 |
| 所属：一年一組 |
| 血液型：A B型 |
| 備考：主人公 |

なにげに→の枠線作るの時間がかかります。

~~~~~

「天神神天！」

【貴様】に明日は来ない！」

「（ついに……、ついに呼んでくれたな……。フルネームで！【俺】

の名を！)

……明日は来ない、ですか。

……プツ、アハッ、アハハハハハハハハハハハハハハハ！  
ガハッ！ゲホッゲホッ！

ハ  
ア  
ハ  
ア  
L

狂ったように笑う主人公。

めだかに殴り飛ばされたダメージで咳き込む。

「……何かおかしい。」

離れた所から様子を伺うめだか。

「何がおかしいって……」

そりやおかしくもなりますよ。

だって会長さん……、

明日つてのは来るとか来ないとかじゃなくつて――」

!!

グハアツツ!？」

突如、めだかの腹部に電流……もとい鈍い衝撃が走る。

「……明日つてのは迎えるものなんですよ？」

自分から、ね

目測でも5、6メートルの距離を瞬時に詰めてきた主人公。

「今の黒神めだかを相手に、

『主人公の身体能力』で、

まったく気取られることなく詰めることは可能だろうか？

答えはNO。

『主人公の』身体能力では『今の』黒神めだかには近づくことはおろか

怪しい動きをした瞬間に一撃を貰うのがオチ。

あくまで主人公の身体能力は一般人と変わらないのだ。

ならばなぜ？

今まさに主人公はめだかの腹部に拳を叩き込めているのか。

「う、うぐ……」

「よっ、と」

そのままめだかを校舎の外へ放り出す。

しかし、さすがは黒神めだか。

空中で体勢を立て直し着地する。

「……………」

はじめは驚いたような表情をしていたが

主人公に対しての認識をあらためたのか、

すぐに厳しい表情に戻り校舎の方に向き直る。

めだかの視線の先、半壊した校舎の瓦礫の山をかき分けて主人公が出てくる。

「……………」

「……………」

睨み合う乱神と、もう一人…。

「……………ん？」

校舎の割れたガラスに主人公の顔が映る。

「……………はははっ。

すげーなこりゃあ……………」

目は釣り上がり眼光は鋭く、

髪は逆立ち変色、

もう一体の乱神が割れたガラスの中にいた。

《今発動中のスキル》の影響か？

『インスタント乱神モード』といった状態である。

「…よそ見とは、随分余裕だな」

「……………《異名》」

「……………なに？」

「いやなに、【俺】がこんな風になっちまった理由を  
ちよつと説明してあげようかなーと思ひまして」

「いらん」

「……………そうですか。

ならさっさと始めましょう。」

「ああ、  
そうしよう。」

主人公が呟いた一言、《異名》  
それは《戒名》と、ある意味対局に位置するスキル。

読みは《異名》<sup>イコール</sup>

名前を呼ばれると、名を呼んだ者のありとあらゆるすべてのパラメータから

-1した数値のパラメータに自らを強化するスキル。  
先ほどめだかが主人公の名を呼んだことで効果が発動したのだ。

つまり今、

めだかのパラメータが攻撃力999・耐久力999・体力999だとするならば

《異名》発動状態の主人公の名を呼んだことで主人公は999-1の強さ、

攻撃力998・耐久力998・体力998に強化されているということになる。

「……………まさに時間稼ぎにはもってこいなスキルだよな。」

言いながらめだかに歩み寄る。

「なにか言ったか？」

めだかも主人公に向かって歩く。

「いえ、なにも。」

更に近づく。

「そうか。」

更に近づく。

「はい。」

気付けばお互いがお互いの攻撃範囲の中。

「……………」

何も言わずに目の前の『敵』を睨み付ける両者。  
……………そして。

「…………ハアアアアアッ！！」  
「…………ウオオオオオオッ！！」

地の底から響くような雄叫びを同時に上げる。  
拳と拳とのぶつかり合い。

そうとしか表現できない状況。

両者とも相手の攻撃を防御する気も回避するそぶりも見せない。  
お互いの拳をもろに浴び続ける。汗が散り、血が飛び、砂埃が舞う。

~~~~~5分後~~~~~

顔面、首、腕、胸、腹、脚。

おおそ名称がついている部位はあらかた殴り終えた頃。

「……会長さん!!」

突然、殴り合いながら主人公がめだかに話しかける。

「……………。」

「知ってますか！」

一流の格闘家や剣士ってのは！

お互い拳や刃を交えるだけで！

相手の考えてることがわかるらしいですよ!!」

「……………」

「会長さんは!今!

【俺】の考えてることが!

わかります——かつ!!?」

言い終わらない内に主人公の腹部に一撃を打ち込むめだか。
まるで『さっきのお返しだ』といわんばかりに。

「知らん、知りたくもない。」

「ゴホッゴホッ!

あ、あつれえ……？

おかしいなあ……ははは

（今の【俺】の実力はほぼ会長さんと同じな筈なのに……
どうしてここまで差が……？）

予想以上の重い一撃を受け、思わず距離を取り膝をつく。

《異名》が正しく発揮されているのならば

お互いの攻撃力、防御力、ましてやダメージ量などに大した差は無いはず。

だがめだかは先の雲仙冥利戦での負傷があるにもかかわらず、
ほぼノーダメージで戦闘を開始した主人公と互角……。
いや、主人公とは圧倒的なまでの差を見せ付けている。

「……どうした？」

その姿は見せ掛けだけか？」

まるでダメージなんてなかったかのように悠然と歩み寄ってくるめ
だか。

困惑する主人公を見下ろす。

「立ち上がらないのであれば、
トドメを刺させてもらおう。」

弓を引き絞るかのようにギリギリと拳に力を込めていくめだか。

「……やっぱり、

……そう……ですよね。」

「………？」

オリジナル
「原作の主人公に

二次創作の主人公がかなうワケがない。

………そんなことは分かり切ってましたが。

……まさかここまでとはね。」

主人公が膝をついて俯いたままブツブツと喋り出す。

「……………」

なおも力を溜め続けるめだか。

「やっぱり会長さんはスゴい…」

そんなにボロボロなのにまだ闘い続けるなんて、まさに主人公の鑑ですよ。

若干チート気味ですけど。」

「……………」

力を溜めるのをやめないめだか。

主人公の髪や目が徐々にもとの状態に戻っていく。

「そもそも【俺】に『主人公』なんて肩書きは重すぎたんですよ。

肩書きの重さに潰されちゃったってゆーのか、

はなっから【俺】に『主人公』は向いてないってゆーのか……。

大体、『あの人』直々の頼みだから引き受けちゃったけど

【俺】って世界を救ったりする『主人公』ってのよりも

その主人公に関わる『謎の男』みたいなポジションのが合ってる
と思うんです。

ぶっちゃけそっちの方がカッコいいですしね。

……あゝあ、『あの人』もよく【俺】なんかこんな無理難題を任せたもんだ。【俺】なんてごくごく普通の一般ピーポーなんだからさあゝ。

もつと他の奴に頼めばよかったんだよなあ…。

後悔してもし切れませんよ。

まったく……。」

「言いたいことは……、
それだけか？」

「……………」。

「それだけか？」

「……………」。

「……………」どうやら言いたいことはすべて吐き出したようだな。
これで【貴様】も思い残すことはないだろう。」

ついに限界ギリギリまで引き絞られた拳を打ち出す。
スピード、威力、重さ、タイミング、すべてが絶大な一撃を。

……が、しかし！！不発！！
絶大な威力を誇る一撃、不発！！
主人公に受けとめられる！！

「……まだ喋ってるでしょうが。」

【俺】のターンは終了してませんよ。」

「……………!？」

(止められた……………。)

いやそれだけではない。

動かない。

掴まれた拳がまったく…。」

「……………『言いたいことはすべて吐き出した』？

『思い残すことはない』？

何、勘違いしてるんですか？

言いたいことも、

思い残すことも、

おいにアリアアリーヴェデルチですよ。」

ザワザワと、主人公の髪がまた逆立ち始める。

ミシミシと、掴んだ拳に力を込めていく。

「……………【俺】は主人公なんてキャラじゃないし、

この『仕事』は【俺】には荷が重すぎる。

そう言いました……………。

たしかに……………。」

閃光。

主人公が発言し終わるとほぼ同時にめだかの視界に閃光が走る。
いや、『走ったように見えた』。

「……………っ??？」

『顔面に攻撃を受け、吹っ飛ばされたのだ』とめだかが自覚したのは校舎の壁に激突してからだった。

『哀れなことですね。』

「!？」

『会長さんもかつてはどこにでもいる普通の一般市民で、なんの特殊能力も持たない無個性で無価値で無意味な、そういうとても楽チンな生き方をしていたに決まっています。』

「【貴様】……………!!」

『だけど、ある時ある瞬間から何かしらの運命を背負ってしまい、そして何かしらの地獄の特訓的なものを経て、そして何かしらの犠牲を払うことによって!!
その他を圧倒するまでの絶大なパラメータを手に入れ、《普通》とは縁遠い存在になってしまったんですね。
そうとしか考えられません。』

「【貴様】…。」

そのセリフ…!その喋り方!」

「しかし!

だからと言って!

【俺】は

あなたに負けられない！」

そう叫ぶ主人公の姿は『インスタント乱神モード』でも、
ましてや普段のそれとも違うものになっていた。

第24箱「負けられない！」（後書き）

今回新たに出てきたスキル！

《異名》！

どうでしたか？説明はわかっていたただけでしょうか？

ちなみに音楽室での雲仙冥利の攻撃を無効化したスキルとは別のスキルです。

てゆうーかー！！

前話投稿＆全話編集しただけで軽く90近くお気に入り件数が増えたのはなぜ！？

そして、さりげなくいつの間にかユニーク3万突破。

Ωくおめでとう

Ωくおめでとう

Ωくおめでとう

Ωくおめでとう

（エヴァンゲリオン風に）

第25箱「さすがだと」(前書き)

サーセン!!

更新遅くなりました!!

こんだけ遅くなったくせに今回ボリューム少ないです。

そんだけ紆余曲折したんです。

マジで。

ちなみにお気に入り登録数が400件に到達しました。

やったね作者!!

読者が増え(r y

第25箱「さすがだと」

~~~~~前回のあらすじ~~~~~

「しかし！

だからといって！

【俺】は  
あなたに負けられない！」

→のシーンは、イメージ的には黒神めだかの

「しかしだからといって！  
私は貴様を許さない！」

と、同じ感じです。

~~~~~

「.....」。

壁にめり込んだままめだかは主人公の姿をまじまじと見つめる。

「どうかしましたか？

会長さん？」

「……………あまりこういうことは聞きたくはないのだが、

【貴様】、本当に人間か？」

「え？」

その言葉を聞いて、落ちていたガラスの破片を拾い自分の姿を確認してみる。

驚いたことに、髪の毛はスーパーサ。ヤ人よろしく逆立っており目からは黒目が消え去り白目のみに、そして、体は筋肉で膨れ上がっている。パツと見はもはや完全にブ。リーである。

「……………もちろん。」

これが【普通】ですよ。」

言いながらバキバキとガラス片を握り潰す。

粉末と化したガラス片が主人公の手からこぼれ、風に舞っていく。その光景を見ながらめだかが口を開く。

「……………そうか。

だったら——」

途端、脳に直接響くようなとてつもない轟音が周囲に響き渡る。

「——だつたら私は！
【異常】でいいよ！！」

「ハハハッ、さすがだと誉めてやりたいところだァ！！」

今の轟音の正体が
主人公とめだかの拳と拳がぶつかった音だと言われたら、
果たして何人の人間が信じるであろうか？

・
・
・
・
・
・
——半壊した校舎内——

「……う、ううん？」

一人の生徒が目を覚ます。
雲仙冥利だ。

「ぐう！そ、そうだ……、

確か【あの一年】がオレを…。

【あの野郎】……！

今すぐに殺戮してや——」

立ち上がろうとする雲仙。

そのとき……！

雲仙の体に電流（激痛）走る……！

「~~~~~ツ……！

……クソッ

まともに動けやしね……。」

ゆっくりと、ゆっくりと、

体に走る激痛に耐えながら半壊した校舎の中から這い出す雲仙。

「あいつら……、

どこに行きやがった……？」

辺りを見回す。

遠くに気絶している生徒会メンバーが見える。

「生徒会の奴等がいる……

つーことはまだ黒神は遠くには行ってねーようだ。

なら、一体どこに——」

視線を生徒会メンバーから外した瞬間。

雲仙の頬にポタリと雫が落ちる。

「あ？

雨か？」

雫を拭う。

赤い。

!!

「これは、血か？」

反射的に空を見上げる。

!!

……オイオイ、なんだアレ。

ドラゴンボールじゃあるまいしよォー……。」

『オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオ
ラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！！！！』

[illegible]

見上げた先、雲仙の頭上50メートルあたりの空中。二つの人影がぶつかっていた。

○

一人は黒神だな。

もう一人は……【あいつ】か？
黒神はともかく【あいつ】のあの姿はなんだ……？」

さっき見た主人公とはまるで別人で判別が不可能だったが、
気絶する前の状況と今の状況を考えてみればそれが一番納得がいく
答えだった。

「あの黒神と渡り合ってやがる。
何モンだ【あいつ】……。
……いや。」

空中で拳を交す二人を見て雲仙がつぶやく。

「どっちもバケモンか……。」「

~~~~~

しばらく雲仙は見物していた。

二体の化物の闘い……、

否、殴り合いを。

とても闘いと言えるものではなかった。

が、とてつもなかった。

とてつもないレベルの殴り合い。

一方が殴れば、まるで爆発でも起きたかのような爆音が響く。  
一方が蹴れば、まるで落雷でも落ちたかのような雷音が轟く。

どちらも一歩も退かず、

どちらもまったく勢いが衰えず、もしかしたらこの殴り合いは永遠に続くのではないか？

……そう雲仙が思った時、  
『それ』は突然訪れた。

---

主人公視点

---

「ハアッ……ハアッ……」

「ゼエッ……ゼエッ……」

「どう……ハアハア……  
しました？……ハアハア  
もう限界ですか会長さん？」

「ゼエ……ゼエ……ああ。」

どうやら……ゼエゼエ  
そう……らしい。

だが……それは【貴様】とて  
同じだろう？」

「……ええ。」

素直にお互いが限界を認める。  
虚勢を張る気力ももはや残ってないのだ。  
そんな状況の中、  
主人公が息を整え口を開く。

「……………会長さん。」

「一つ提案があるんですけど。」

「……………何だ。」

「このままじゃ埒があきません。  
両方が潰れるのがオチです。」

「…………『何だ』と聞いている。」

「ジャンケンで  
決着つけませんか？」

「……………は？」

主人公の唐突な提案に一瞬、思考が遅れるめだか。  
シリアスな場面に似合わないすつとんきょうな声が出てしまう。

「【貴様】ッ……………！！

何をふざけたことを！！

ここまでのことをして…………

今さらジャンケンなどで決着をつけられるわけが——」

「ストーップ！！

話は最後まで聞いてくださいよ会長さん。」

ジャンケンで決着をつけるといふ提案に対して激昂するめだかだが、  
主人公は軽く諷める。

「たしかにジャンケンって言いましたよ、たしかに。  
でもジャンケンって言っても、小さな子供たちが  
おやつを取り合いの時なんかにはやるお遊びじゃない。」

そう言つて主人公はゆっくりと、  
しかしがっちりとして、  
右手で拳を作る。

「……………正真正銘。  
お互いの最後の力を振り絞つた一発勝負、ですよ。」

「……………なるほど。  
得心いったよ。」

めだかも息を整える。

「……………ルールは？」

「そうですね…………。」

再びお互いの攻撃範囲内で近づく両者。

「心理ジャンケンはどうです？」

「心理ジャンケン？」

「あれ？知らないんですか？  
心理ジャンケンは事前にお互いの出す手を宣言するんです。  
で、相手の宣言した手の裏をかくて違う手を出すか。  
もしくはそのまま宣言通りの手を出すか。」

その駆け引きが最高に盛り上がるジャンケンなんですよ。」

「なるほどな。」

「それ以外のルールは……………」

掛け声は『最初はグー』。

後出しはなし。

シンプルなことこの上ないポピュラーなルールで。」

「……………わかった。」

「……………それじゃあ、

準備はいいですか？」

「ああ。」

「…それじゃあ【俺】は『グー』を出します。」

「ならば私も『グー』を出そう。

……………実際に手を出すときは違う手を出してもよいのだったな？」

両者が構える。

「……………ええ。」

（『違う手を出しても』ですか。

ははは、会長さん（あなた）がそんなことする筈ないじゃないですか……………。

グーと宣言したならば必ずグーを出すのが会長さん（あなた）でしよう？）「」

ゆっくり目を閉じ、物思いにふける主人公。

「…………行くぞ。」

「…………いつでも。」

（まあ、だとしても…………ね。）「」

くわっと目を見開く。

「（ここは【俺】も素直にグーを出さなきゃ面白くならないですよ  
ね！！）」

「最！」

「初は！」

「「グー！！」」

お互いの命運を決めるジャンケンがここに幕を開ける。

## 第25箱「さすがだと」（後書き）

オリジナルの作品も書いてみたいなと思う今日この頃なのです。

一応、いろいろ思いついてはいます。  
どれもありきたりな設定ですけどね。

活動報告に載せときますので

「この作品読んでみたい」って方はこの作品の感想か、  
活動報告に直接コメントください。

あ、この作品の感想も随時受け付けてますよ。

指摘でも、単純に面白いという感想でも甘んじて受けます。

## 第26箱「お好きにどうぞ。」（前書き）

滞ってましたが一気に書き上げました。めだかVS神天戦決着です。決着ですけど、閉幕じゃありません。もうちつとだけ続くんじゃない。

あ、ユニークが四万突破しました。お気に入り登録が400突破しました。

サンキューでいーす！

第26箱「お好きにどうぞ。」

~~~~~前回のあらすじ~~~~~

「最！」

「初は！」

「「グー！」！」

「最初はグー」って掛け声考えたのって志村けんさんなんだってね。
本当かなあ？

~~~~~

「最！」

「初は！」

「「グー!!!」」

拳を同時に突き出す。

けんこんいつてき  
乾坤一擲。

まさにその言葉通りの状態。

「「ジャン!!」

(この勝負で

すべてが決まる!!!)」」

両者共にこれが最後の一撃になるであろうことはわかっていた。  
だからこその一撃必殺。  
全気力を拳に込める。

「(本当は、万が一にも【俺】なんかが  
会長さんに勝ったりしちゃいけないんだろうけど……  
こればかりは、

この勝負ばかりはどういう結末になるかわからない!!!)」

命懸けの勝負。

命懸けのジャンケン。

相手は自分に敵意をむき出し。

しかもその相手はチート並の超強敵。

「(だっていうのに……、

やっぱり【俺】も立派な男の子なんだな……。」「

主人公の顔がゆっくりほころぶ。

「（勝ちたくって仕方がない！

使命だとか、役目だとかそんなこと気にせずに！  
会長さんに勝ちたい！）」

「「ケン！」「」

同時に拳を振りかぶる。

あとは――

「力一杯殴り抜けるだけ……！」

――ドクンッ

「――……」

動かない。

体が。

まったく。

「おいおい嘘だろ……。

『今』なのかよ……。」

めだかの拳が迫ってくる。

まるでスローモーションだ。

はつきりと目で追える。

しかし、体が反応できないのならいくら目で追えようと無意味。

めだかの拳が顔面にヒットする。

まるでスローモーションだ。

はつきりと目で追える。

しかし、食らってしまったては無意味。

感覚も強化されているため攻撃を受けてもすぐには吹っ飛ばない。  
吹っ飛ばない。

「（ああ、なるほど……。

感覚だけが鋭敏に研ぎ澄まされ体がその感覚に追い付かない…。

ゴールドエクスペリエンスに殴られたブチャラティは

こんな感じだったのかな？」

自らの顔が歪んでいくのをしっかり感じ取りながら、  
的はずれな感想を抱いて主人公は校舎内に吹っ飛んだ。

「やっぱり……。」

【あの一年】は負けたか…。

ケツ！まあ予想どおりの展開ではあったけどな。

そもそも十三組ジュウサンのオレが勝てなかったのに

一般生徒が勝てるワケねーんだよ！！あんな化物！！

……………。」

言いながら雲仙は最後のジャンケン勝負を思い返す。

「【あいつ】……………」

最後の一撃の瞬間、拳を止めたように見えた……………」

もし、あの一撃が決まっていたならば……………」

ふとそう思った雲仙は頭を振り、その考えを払う。

「あークソ！

何考えてんだオレは！

血イ流し過ぎたか！？」

過ぎたことをグチグチ考えても仕方がない。

【あの一年】は負けた。

それが現実。

『もし』、『たら』、『れば』なんてものに意味はない。

「……………とにかく様子を見に行つてやるか。」

なんだかんだ言いつつ『後輩思いの』雲仙は【あの一年】のもとへと歩きます。

「……………」。

（ヒュー……………ヒュー……………」

虫の息。

さっきの姿の面影はまるでない。  
まるでボロ雑巾。

「（負けちゃったか……………」

当初は《異名》だけでこの場を乗り切るつもりだった主人公。  
しかし、それでも主人公に勝てないと理解した彼は  
ある一つの手段をとった。

「（やっぱり『スキルの重ね掛け』は無茶過ぎたかな……………」。

まさか《異名》

オールレッド

《壊倒乱撒》

オールグリーン

《至高柵護》の三つを重ねた状態で負けるなんて……………」

さすがに少しへこむな。」

スキルの重ね掛けをすることで強化に次ぐ強化。

《壊倒乱撒》、《至高柵護》、

どちらも自らのパワー、ガードを極限まで高めるスキル。

《異名》の上からこの二つを重ねた結果がさっきまでの姿であり、  
その『無茶』の皺寄せがジャンケンの瞬間に一気に押し寄せた。

「……………まさか——」

「因果応報とはこのことだな。

【天神同級生】。」

主人公が主人公（神天）にトドメを刺しにやってくる。  
めだか

「人のセリフを……

取らないで……

くれませんか……。」

必死に憎たらしい笑顔を作る。

「……そんな状態でありながらまだ余裕があるようだな。

驚きも呆れも飛び越していつそ尊敬に値するよ。」

トドメの姿勢に入るめだか。

「……いいんですか会長さん？

【俺】がいなくなったら善吉ちゃんが悲しみますよ？  
もがにゃんの友人が一人減っちゃいますよ？

阿久根先輩のかわいい後輩が消えちゃいますよ？」

イタチの最後っ屁。

こんな言葉に動揺はしないとはわかっている。

だがこんな時でもこんな調子なのが彼（神天）なのだ。

「見苦しいぞ【天神同級生】。」

そんな言葉に心を乱される私ではないことは知ってるだろう？  
そして、安心しろ。

【貴様】が思っている以上に善吉たちは強い。」

「そうですか。」

それを聞いて安心しました。」

覚悟を決め目を閉じる。

「…………一言だけ聞いてやる。」

「え？」

「最後に一言だけ聞いてやる。  
言い残したいことはあるか？」

「……………。」

虚をつかれ間抜けな表情になる。

「……ふふふ。」

優しいんですね会長さん。  
こんな【俺】の遺言を聞いてくれるなんて……。  
非情になりきれませんよ。」

「よし。」

それでいいのだな。」

「え！？ちよっ！

今のはノーカンノーカン！」

「…………ならさっさと見え。」

私の右手が真っ赤に燃えて轟き叫ぶその前にな。」

「……………」。

神天は考える。

考えた結果ある一言が浮かんだ。

「そうですね。

じゃあ本当に一言だけ。

この一言を……………」

会長さん、あなたからみんなに伝えてください。」

「その一言による。」

そして神天は遺言を残す。

『いめんなさい。』

「………」

めだかの表情が変わる。

「……………はい。」

これで【俺】は思い残すことはなくなりました。

これで言いたいことは全部吐き出しました。

やっと憎悪の対象を取りのぞけますよ。

よかったですね会長さん。

さあ早くトドメを刺して。」

「ぐうつ……………！」

き、【貴様】……………！」

めだかの表情が崩れていく。

まるで育てた家畜を自らの手で捌く時のように悲しそうな、

イタズラばかりの悪ガキに腹を立てているような、

取り返しのつかない事態に陥って諦めたような、

自分の腑甲斐なさに呆れているような、

そんなわけのわからない表情になっていく。

「いまさら……………！」

いまさらその言葉をツ……………！」

めだかの拳がわなわなと震える。

「……………ええ、そうですね。まったくもっていまさらです。いまさらこんな反省の言葉を口にしたところで会長さんが許してくれるはずありませんよね。だってみんなを騙して、みんなを傷つけて、その上女の子である会長さんにまで手をあげて……………、許されるはずがありません。だからそう、これはある種の自己嫌悪です。頼りがい



「やめろ【天神】。  
やりすぎだ。」

「！！

善吉…、  
阿久根書記…、  
喜界島会計…。」

「（はあ… やつと来てくれたよ。  
遅すぎなんだってまったく。  
無駄に長いセリフ言っつつかれちゃったぜ。）」

生徒会メンバーが駆け付けてきたことに安堵する神天。

「やれやれ……。  
一体何事だいこれは？」

阿久根先輩。

「どうして【あなた】……」

み、【神天クン】と会長さんが闘ってるの？」

もがにゃん。

「あとでキツチリ説明しろよ。

【天神】！」

……え〜つと

「俺だよ俺！

人吉善吉！

なんで今ちよつとボケた！」

「ははははは……。」

力なく笑い返す。

「ったく…。」

………なあめだかちゃん。」

善吉がめだかに向き直る。

「教えろよ。

何でお前が乱神モードになって

【天神】と闘ってたのかを。」

「………それは——」

言っているものかどうかを考えあぐねているのだろう。  
めだかが警戒しながら神天の顔をうかがう。

「（お好きにどうぞ。）」

ジェスチャーと表情で応える。

「……わかった。」

貴様らには少々、重い内容になってしまつやもしれんが……。」

雲仙から敵意の標的を神天自身に変える時に使った出任せを  
めだかはそのまま善吉たちに伝えた。

神天が催眠術を得意にしているということ。  
その催眠術で雲仙を操っていたということ。

その話を聞いた善吉たちの表情は――

「「「………へ?」」」

ポカーンである。

……ですよねー。

「え?なに?

お前、それを信じたの?」

善吉が『マジかよ』という表情になる。

「さ、催眠術って……。」

喜界島が『嘘だよね?』という表情になる。

「いくらなんでも……。」

阿久根が『信じられない』という表情になる。

「」「突拍子なさすぎ!」「」「」

三人のツッコミが半壊した校舎に響く。

第26箱「お好きにどうぞ。」（後書き）

原作では凄い展開になってますよね。

安心院さんのメタ発言っぷりときたら………

毎回痺れっぱなしですよ（笑）

にしてもあの善吉中心の見開き二連続は笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1907t/>

---

特別でも異常者でも過負荷でも悪平等でもなく・・・？

2011年10月5日15時30分発行